

瞿秋白・楊之華敬白。一九二四年×月×日我等は自由戀愛の趣旨に本づき、正式に結合して夫婦となつた。

瞿秋白・沈劍龍敬白。我等は今後とも依然として親愛なる同志であり、親愛なる朋友であることを聲明する。

流石に新らしいもの好きの上海人も、これにはダアとなつてしまつたさうである。しかし、出發點がこんな變なものだつたに拘はらず秋白と之華の關係はずつとつづき、之華が連れ子は今年十七歳の立派な娘になり、モスコイにゐるさうである。

閑話休題。一九二四年の國共兩黨合作から、一九二七年の分裂までの期間は、普通支那大革命と稱せられ、民族革命聯合戦線の活躍が目覺しかつたが、瞿秋白その人は、むしろ失意時代を経験したのであつた。肺病に罹つて、激しい活動が出来なかつたことも一原因であるが、それよりも、當時中共の家長であつた陳獨秀が、自己の直系を偏愛し、特に理論方面では、瞿の論敵であり、機會主義者である彭述之の意見を採用し、瞿の理論に一顧をも拂はなかつたことが、何よりも瞿の不運であつた。公平に見て、彭の學力は瞿に及ばず、彭の「中國革命の領導者は誰か？」などいふ論文は瞿に依つて容赦なく論破され、文獻方面に於ける活躍は比較すべきものがなかつたけれども、陳獨秀の御氣に入らねば、何と致し方もなく、彭が中央宣傳部長として時めくの反し、瞿は一九二七年の黨五全大會で、常務委員に擧げられ、毛澤東が湖南に歸つたアトを承けて、一時農民部長を代理したくらのこと、本職は武漢軍官學校の教官といふ案外振はぬ地位を占めてゐた。

この憾みは、しかし國共分裂とともに充たされた。陳獨秀、ボロディン、ロイ、譚平山等の日和見主義者がしりぞけられ、ボロディンの後を承けて、コミンテルン新代表ロミナアゼが赴任して來ると、秋白は、李立三、毛澤東、向忠發と語らつて、ロミナアゼ領導の下に、八月七日の有名な九江會議を開いた。これがすなはち「八・七會議」なるもので、日和見主義を揚棄し、黨のボル

シエダイキ化を開始したといふ點で、秋白は獨秀に代つて總書記兼政治局主席に選ばれたのである。知遇に感激した彼は、暴動を以て各省各地方に、一氣に勝利を占めようとして、農業地では「秋收暴動」(秋の收穫を目標といふ意味)を、工業地では罷業を計畫した。すなはち賀龍、葉挺等の共産軍はわが早大出身で、農民運動の權威である彭湃指導の下に、廣東省海豐、陸豐地方に潜入した。上海では、江蘇省委指導の下に外人經營工場の罷業が起り、江蘇省宜興、湖南省長沙にも労働者、農民の暴動があり、毛澤東亦湖南、江西兩省の農民暴動を指導した。一文弱書生に過ぎない秋白すら、湖南省岳州に進出して總指揮に當つたといふ冒険振りだつた。この一聯の行動を「四省秋收暴動」といひ、その殿戦として、一九二七年十二月の廣東コムミュンが起つたが、いづれも散散な失敗であつた。ことに張太雷の指導した廣東コムミュンは、彼自身以下五千餘人の銃殺を伴ひ、非常な痛傷を黨に與へた。これ皆瞿が革命勢力の目測を誤まり、盲動に次ぐに盲動を以てした結果であるといふので、彼はモスコイに喚問せられ、一九二八年の黨六全大會では、ロシア側のみならず、中共側向忠發、李立三等の攻撃的となり、就任後一年にしかならぬ中共總書記の職を、労働者出身の向忠發に取つて代られ、御情け的にコミンテルン中執委會幹部會員に選ばれ、中共モスコイ代表團主席として、其儘釘附けをされる不仕合せに終つた(六全大會に、秋白の提出した「中國革命と中國共產黨」といふ報告書は、然し非常に價値ある文獻で、セオリストとしての彼の面目を躍如たらしむる名著である)。後、一九三一年に出た華崗の「中國大革命史」と併せ讀むならば、支那側から見た一九二五—二七年は一目瞭然たるものがあるであらう。

六全大會で秋白を撃破し、總書記をかち得た向忠發は、その實無能凡庸な一好々爺で、一切は梟雄李立三の操縦の下に在つた。一方、毛澤東、朱德等の工作に依つて、一九二八年四月以後、湖南、江西、湖北、四川、福建、河南、安徽、浙江、廣西各省に共産軍乃至農民バルチザン隊が成立し、その遊撃に因つて、所在にいはいはゆるソヴェート區域が出来た。一九三〇年の初めに於いて、それは十二軍七萬五千の兵力を示したので、思ひあがつた李立三は、かつての瞿秋白の轍を踏み、革命昂揚期到來せりとなし、政治局をして、「一省或は數省に於ける首先的勝利」決議を採擇させ、毛澤東等の革命軍事委員會を鼓動して、長沙奪取を敢行させた

が、僅かに十日天下でケリになった。コミンテルンは、李立三が命を用ひず、終にかかる失敗を招いたことを責め、ミフを派遣しその秘蔵弟子で、當年の瞿秋白に彷彿たるセオリスト陳紹禹一派を以て、「李立三コース」の肅清を叫ばせた。李立三も起つてこれに反抗し、泥試合いつ果つべしとも見えなかつたので、久しくモスコに雌伏してゐた瞿秋白が起用され、その領導の下に上海で中央委員全體會議が開かれたが、瞿は李立三に幻惑せられ、コミンテルン及びミフ派の思ふ通りにならなかつたため、ミフ派の攻勢は益々鋭く、立三、秋白共倒れとなつて黨中央から放逐された。

折角擱んだ復活のいと口をフイにした秋白の遺憾は想像にあまりがある。しかし間もなく自己の非を認め、コミンテルン・コースへの服従を誓つたため、陳獨秀のやうな目に合はず、黨の元老の一人として、一九三一年十一月の中國ソヴェート一大大會で、中委兼教育人民委員に擧げられ、一九三四年二月の二全大會でも再選。江西の中央ソヴェート區に在つて、コソコツと教育的文化的工作に没頭し、時には詩をつくり、時には「瑞金縣志」を採訪し、時には機關誌に執筆し、彼にふさはしい活動をしてゐたのだがそれは要するに、夕陽の返照でしかなかつた。彼の生命はすでに一九二八年に終つてゐたのだ。セオリストとしての彼は、もはや今日の陳紹禹の敵ではなかつた。むしろその悲劇的就縛、銃殺に依つて、彼もまだ生きてゐたかと、回憶せしめた形である。

畢竟、共產黨領袖として大を成すべく、彼はあまりに文學者じみた。遺稿「多餘の話」の中で、彼は次ぎのやうにいつてゐるが正しい自己批判である。

「自分は、一種の『文人』であることを否認出来ない。一匹の老鼠さへ殺し得ない書生である。自信なく、見解は動搖し、立場が不安定である。懷疑的ですからある。」

この、小娘のやうな一書生を、蒋介石は何故銃殺したか？ 陳獨秀を助けた蔣か？ その理由は、陳が今日の共產黨に關係なく暴動を非としたに反し、瞿は例の盲動主義の首唱者であつたからである。

最後に、中共首脳部、例へば毛澤東が、秋白を白色區域に潜入させようとした眞意は？ 昨年來中共が唱へてゐる「新戰術」などは「抗日聯合戦線」を主要内容とする、「支那人民戦線の組織者」として、秋白の利用價値を認めたからであつたらう。(改題「一九三六・八

第八章 高漲する抗日聯合戦線

第一節 抗日思想の諸要因

支那に於ける人民戦線、いはゆる「抗日救亡聯合戦線」の萌芽、胚胎は、一九三二年四月二十六日附で發せられた、中華ソヴェート共和國臨時政府の「對日宣戰通電」に發見せられる。しかし、この通電に於いては、まだ「中國國民黨統治を全幅的に顛覆して、全中國民衆のソヴェート政權を建立し、……」などと稱して、中國共產黨及びソヴェート政府の領導の下に、抗日戰爭を實行しようとしてゐた。各階層との聯合戦線といふやうなアイデアは、まだ見られなかつたのである。それもその筈、當時の中共及びソヴェートとしては、三回に亘る蒋介石の圍剿をはねかへし、江西、福建、湖北、安徽、河南各省に、大ソヴェート區を擁し、意氣軒昂たるものがあつたからである。同年九月十八日、翌一九三三年一月十五日、同三月四日の三回に亘つて、中共及びソヴェートは、この趣旨を繰返したが、終に同年四月十五日附宣言を以て、左の條件を提出した。

「左の條件の下に、紅軍は、如何なる武装隊伍とも作戦協定を訂立し、日本帝國主義の侵略に反對する準備を有してゐる。一、即刻ソヴェート區の攻撃を停止すること、二、即刻民衆の民主的權利（集會、結社、言論、出版、示威の自由と、政治犯釋放等）を保障すること、三、即刻民衆を武装し、武装的義勇軍隊伍を創立し、以て中國を保衛し、中國の獨立、統一と、領土の保全を争ひとること。」

これに先だつこと一ヶ月、三月八日に、孫文未亡人宋慶齡女史を表看板とする國民禦侮自救會が成立したが、その裏面に中共尖鋭分子が潜んでゐたことは、いふまでもない。次いで五月二十八日には、中蘇政府主席毛澤東、紅軍の總帥朱德の名を以て、廣東軍及び福建の十九路軍に對して、抗日合作の提議が行はれてゐる。更に、九月三十日の世界反戦・反ファシスト大會（上海で開會）

を経て、十一月、福建革命が起ると、その二十六日に、瑞金中蘇政府、福建人民政府間に、抗日合作協定が成立した。

一九三四年に入ると、さきの中國領土保障同盟、國民禦侮自救會は、搖身一變して中國民族武裝自衛委員會となり、五月三日有名な「對日作戰宣言」並びに「中國人民對日作戰基本綱領」が發表された。中共もこれを支援して、「中國工農紅軍北上抗日宣言」(七八)を發し、この一年間は、民族武裝自衛運動で持ち切つた形であつた。しかし、彼等に取つて遺憾であつたのは、この年十一月十日に、赤色首都瑞金が陥落し、紅軍主力が西漸を餘儀なくされたことであつた。

紅軍の西漸に關しては、或はいはゆる國際路線の打開であるとか、或は戰略的退却であるとか、色んな辯護を中共側でやつてゐたやうであるが、それは表面だけのことで、實際は甚だしく狼狽したのであつた。蔣介石統治の心腹である江西、安徽、福建地方に頑張つて大小のソヴェート區を簇生せしめ、所在の討伐軍を牽制してゐると、貴州や四川、陝西の山の中を遊撃して廻るのでは、優劣は一目瞭然である。それでも暫くの間は、又盛り返す氣配もあらうかと、見てゐたわけだが、蔣介石の追剿軍事は、意想外の優勢で、紅軍は、辛うじてその實力を保全するのが關の山で、とても中原に根據地を確保することは不可能と斷定された。ここに於いて、中共では、戰略的退却論の蔭で、切實なる自己批判を行つた結果、從來の非を悟つた。すなはち、共產軍及びソヴェート偏重の愚を知り、共產運動本來の面目に立歸り、都市に於ける大衆の獲得、即ちインテリゲンチヤ、小ブルジョア、勞働者等々の各階層を味方に引入れるといふ方針に復歸するの賢なることに覺醒した。換言すれば、對日宣戰通電—國民禦侮自救會—反戰反ファシスト大會—國民武裝自衛委員會といふ一系の運動を擴大強化し、國民黨をして容共を餘儀なくさせ、再び一九二五—七年の民族革命聯合戦線の時代を實現させよう。——モスクワ駐在の中共代表團主席陳紹禹、團員康生(李立三)、周和生(これまで趙電新と紹介されてゐたが、誤りである)。史平、李廣、徐杰、康容、李明等は、一九三五年七月のコミンテルン大會を眼前に控えて、かくのごとく新方針・新戦術を決定したのであつた。これに基づいて、大會に出席した陳紹禹、康生、周和生等は各々その得意の題目下に廣長舌を振ひ、ことに黨唯一理論家たる陳紹禹は、「植民地・半植民地に於ける革命運動並びに共產黨の戦術に就いて」と題

し、理路整然たる演説を試みて、満場の喝采を博したと傳へられてゐる。さうして、いはゆる新戦術の基調は、いふまでもなく抗日聯合戦線の結成であり、八月一日附で發出せられた、中共の「抗日救國宣言」が、今日燎原の火のごとく燃え盛つてゐる抗日救亡聯合陣綫の、唯一無二の指導原理となつたのである。一九三二年四月二十六日の對日宣戰通電に胚胎して、三年の歳月は、ここにこの妖花を咲かせることになつたのだ。

「各黨派が過去に於いて、又現在に於いて、政見・利害を同じくしないにせよ、各軍隊が、過去及び現在に於いて、敵對行動を執つてゐるにせよ、均しくすべての人は、「兄弟鬩に閤げど、外、侮りを防ぐ。」といふ、眞の自衛が必要である。先づ一切の内戦を停止し、あらゆる國力(人力、物力、財力、等)を集中して、抗日救國の神聖な事業のために闘はねばならぬ。國民黨軍は、即時ソヴェート區攻撃を中止し、對日戦を準備すべきだ。紅軍は、國民黨軍との舊仇・宿怨にこだはらず、彼等と親密な提携の下に、協同救國を希望する。同胞、軍官、士兵、諸黨派、諸團體、國民黨及び藍衣社内の民族意識ある青年、被壓迫少數民族よ、起ち上つて、日寇及び蔣賊の壓迫を破り、中蘇政府と東北の抗日政權を單一的・全國的國防政府に組織し、紅軍と東北人民革命軍及び各地反日義勇軍と、單一的・全國的抗日義勇軍に組織しようではないか。黨及び蘇府は、國防政府の發起人たらんことを希望し、直ちに各黨派・團體・地方軍政機關と國防政府共同樹立を討議しよう。國防政府は國存の臨時指導機關、全體同胞の代表機關として、抗日救國の具體辦法を討論すべく、その重要責任は抗日救國に在り、その下に抗日聯合軍が組織されなければならぬ。統一ある國防政府指導下に、單一的抗日聯軍が先驅するならば、必ずや日本帝國主義に打ち勝つことが出来よう。」

「八・一宣言」は、大體かういつた趣旨のものであるが、これを模範として、各種の反日組織が續々として産れ、運動は日を逐うて熾烈となつた。その目星しいものを擧ぐれば、「八・一宣言」直後、中共系の「抗日救國大同盟」が上海に成立した。十月二十五日には、豫ねてから準備中であつたソヴェート・ロシアの對支文化工作が表面に現はれ、立法院長孫科を會長とする中蘇文化協會が

産れた。いはゆる「文化」は表面だけのことで、事實は親露系人物のために舞臺を提供し、彼等の總登場を促がしたのである（一九三六年に入つて、この協會は、機關誌『中華文化』を發行しはじめ、すなはち第四號まで出てゐる）。十一月十六日には鄒韜奮の「大衆生活」誌が創作された。支那教育界の元老で、かつては北京政府の教育總長をやつたことのある黃炎培といふ人があるが、鄒はその乾兄で、どこで學問したか知らぬが、相當筆が立ち、ことに煽動に巧みな男で、七八年前から上海で生活書店といふのを開き、「生活週刊」といふ雜誌を發行して、可成り賣り出してゐる。滿洲事變が起つて東北義勇軍援助の運動が盛んになると、もと黑龍江省長をやつたことのある朱慶瀾が總大將になつて、大々的に後援募集をやつた。鄒もこれに参加し、「生活週刊」の名義で十何萬元を集めたが、これを滿洲に送りもせず、大部分を着服し、それがバレさうになると一目散に外遊した。留守中、「生活週刊」は、福建革命に同情した廉で發行を禁止され、一九三四年二月十日に、鄒の友人杜重遠に依つて「新生」と改題して復活したが、一九三五年五月四日號に載つた「聞話皇帝」の一文が、わが朝野の憤激を買ひ、わが嚴重な抗議となつて發禁になつたことは、讀者の記憶に新たなるところであらう。餘熱のさめた八月頃、鄒はコソソリ歸國して、終に「大衆生活」の創刊に成功したのである。一體、最近數年來、抗日パムフレット、小雜誌の氾濫は、支那出版界の一大特徴でこれら豆タングの横行は「大衆生活」二誌に限らぬが、その中で最大の發行部數を持ち、今日救亡運動の代表的アヂテーターとされてゐる章乃器等を論壇に送り出したことに依つて、本誌の創刊は抗日運動史上の一頁を占める價值があるのである。

十二月に入ると、陶行知の「國難教育社」が産れた。沈鈞儒、章乃器、鄒韜奮、王造時と相並んで、救亡運動の五大リーダーである陶は、安徽人で本年四十五歳、コロムビア大學出身の教育家、教育に關する多數の著述がある。彼はその立場から、「國難教育方案」なるものを編み出し、上海文化界救國會（十二月二十八日成立、章乃器等を幹部とし、會員三百餘名）で滿場一致採擇された。「生存線」、「抗日先鋒」等の豆タングもこの頃創刊され、中共の救亡運動指導機關誌「救國時報」も巴里に成立し、陳紹禹以下の理論家總動員で、指導的言論を故國に送つた。十二月二十五日中共政治局は一現下の政治情勢と黨の任務を決議して、再び國防

政府、抗日聯軍組織を強調した。

かかる抗日宣傳の充實昂揚は、終に北平に於ける學生運動を惹起した。北支自治反對を呼號する同地學生のデモは、十二月九日、同十六日の二回行はれ、それが各省に飛火して、五・四運動當時に彷彿たる情勢を再現した。彼等は、骨を刺す寒風の中に、赤手を以て警官と戦つたり（北平）、列車を占領して南京に赴かうとしたり（北平、上海等）、揚子江頭に徹夜して渡船を待つたり（武昌）寒雨を肩し、飢餓を忍んで徹夜して奔走したり（上海）したが、就中最も秩序整然たるデモを敢行し、五・四運動のやうな原始的運動でなく、恐るべき態様を見せたのは、北平學生の一二・九及び一二・一六遊行であつた。北平學生聯合會の水も洩らさぬ事前布置の下に、一切が計畫され、清華、燕大兩校學生を中心とする一大示威隊は、騎車糾察隊、講演隊、口號隊（スローガン隊）、散發傳單隊（ビラまき隊）の四隊に分れ、北平の淺草である天橋地方に、十萬の民衆を集中することに成功し、反日、反漢奸、民衆武裝の三決議を通過せしめ、餘力を近郊に押し出して、農民への宣傳をすらすら決行したのである。これに較ぶれば、上海その他の地方のそれは、無秩序・亂雜なものであつた。

ともかく北平學生の大デモは、多大の影響を全國に與へ、抗日救亡聯合陣線の前途は、ますます有望であるやうに見えた。この成績に雀躍した中共は、一九三六年に入つて、二月十一日、「全國抗日救國代表大會召集通電」を發し、「即時全國抗日救國代表大會を召集して、正式に國防政府と抗日聯軍とを組織し、抗日戰爭準備の具體的方針を決定せんことを主張」したが、引きつづき三月十日附、中共中央北方局の名を以て、長文の抗日救國宣言を發表した。その扼要の一節に、次ぎのやうなものがある。

「亡國滅種の危機に際し、各政黨・政派・團體・軍隊が、いかにソヴェート制度と土地革命に不同意であらうと、その他の問題に於いて不同の主張と意見があらうと、苟しくも自己の實際行動を以て反日を表示し漢奸、賣國奴反對の闘争をなすならば、黨・蘇府は直ちにこれと聯合し、抗日・反漢奸・反賣國奴の聯合陣營を結成するであらう。例へば紅軍・ソヴェートが過去に於いて十九路軍と抗日・反蔣協定を締結したのと同様である。しかし紅軍は、當時ただちに實力を以て十九路軍を援助し得ず、蔣介

石を攻撃し得なかつた（十九路軍も亦これを積極的に希望しなかつた）。これはきはめて重大な錯誤であつた。今後紅軍・蘇府は、あらゆる可能な方法を以て同型の友軍を援助するであらう。

これと相應して、戦線統一運動は、一段と活潑になつた。北平學生救國會宣言（四・二六）、上海文化界、上海婦女界、上海職業界、上海各大學教授の各救國會、及び國難教育社の共同機關誌「救亡情報」創刊（五・六）を経て、五月二十九日中國學生救國會同六月一日全國各界救國會聯合會が成立した。就中各界救國會の成立は、救亡運動史上にエポックを劃するもので、參加團體は平津民族解放先鋒隊、南京救國協進會、上海文化界救國會、同婦女界、同職業界、同大學教授各救國會、廈門抗救會、香港同、廣東教育會、廣西全省學聯會、武漢文化界救國會、上海工人救國會、天津同、十九路軍等三十餘團體。促進抗日聯合戦線、即時抗日作戰、民衆武装、防共協定反對、日本華北増兵反對、密輸武力制止、國民救亡大會召集、平津學生救國會運動援助、義勇軍組織等の各案を可決し、長文の大會宣言を採擇したが、右宣言中に於いて、

(一) 對日經濟絶交。

(二) 各黨各派は、即時軍事衝突を停止すること。

(三) 各黨各派は、即時政治犯を釋放すること。

(四) 各黨各派は、人民救國陣線紹介下に、即時正式代表を派遣し、共同抗敵綱領を制定し、統一的抗敵政權を建立すること。

(五) 人民救國陣線は各黨各派の共同抗敵綱領の忠實なる履行を、全部の力量を以て保障する。

(六) 人民救國陣線は、各黨派の共同抗敵綱領違背、並びに抗敵力量削弱の行動を、全部の力量を以て制裁する。

といふ、重大な提議を試みてゐる。のみならず七月十三日には、章乃器等を代表として南京に赴かしめ、蔣介石代表としての馮玉祥を訪問してゐる。

六月七日には、作家茅盾、洪深、葉聖陶、鄭振鐸、鄭伯奇、歐陽予倩、葉紫、謝冰心、謝六逸等の文藝家協會が産れ、人民戦線

參加を聲明したが、魯迅、巴金、魯彥、孟十還、蕭軍、蕭乾、吳組湘等も、「文藝工作者宣言」を發してこれに應じた。更に評論家

沈鈞儒、章乃器、諸青來、王造時（江西人一九〇三年生。清華學校卒業後、ウイソコンシン大學政治學博士。清華時代學生會の主席。五・四運動清華代表。米國

から歸國後上海各大學教授、現在は延慶士。國家主義派の領袖であつた。）潘大遠（上海法學院教授。吳清友（交通大學露文講師、モスクワ東方大學出身）沈茲九

（婦女生活誌主筆、女流評論家）等は、六月二十八日著作人協會を組織して戦線に參加した。

かくて一九三六年六月までに、支那人民戦線の包括するところ、左のごとき廣汎さを示してゐる。

(A) 中國共產黨。(B) 共產軍。(C) ソヴェート政府。(D) 中國學生救國會聯合會。(E) 全國各界救國會聯合會に包含せらるる各

階層(前掲)。(F) 著作人協會。(G) 文藝家協會及び文藝工作者一派。(H) 中華民族革命同盟(李濟深、陳銘樞、蔡廷鍇等舊十

九路軍系で、今廣西軍に參加せる一派)。(I) 廣西軍。(J) 東北偽勇軍。(K) 十九路軍。(L) 二九軍。

これを側面から援助するものに、コミンテルンがあり、ソヴェート・ロシアの對支文化工作がある。國民政府内に於いても、中蘇文化協會會長であり、常にその代表をモスクワに常駐せしめてゐる孫科(立法院長)屢次反日的言論を、中外に發表した馮玉祥(軍事委員會委員長)並びにO・C團の一部は、人民戦線のシムバと目しても差支へあるまい。

かかる廣汎なる各階層が存在し、(第一條件) 對手方として強大、今や全支統一を完成せんとしつつあるファッシヨ政權(蔣介石政府)を持ち(第二條件) 背後に中國共產黨の有力にして且つ周到なる指導を控へ(第三條件) てゐる現勢は、正に支那に於ける人民戦線すでに成れりと斷ぜざるを得ぬ。

然り、支那に於ける人民戦線は、現實に成立してゐる。而してその理論及び工作はどうであるか？ これに關しては、鄭韜奮、(前掲)「業生活」が本年二月發刊となつてから、香港に「生活日報」を創刊、最近これを上海に移すべく準備中。陶行知(前掲) 沈鈞儒(浙江紹興人六十二歳、前清進士、わが法政大學卒業後、浙江師範局長、民國師範學院秘書長、浙江省政府秘書長、上海法政大學教授を経て、現に上海保護士會長。救亡運動が起つてから常に先頭にかつがれ、數年前の宋慶齡女士の役割を演じてゐる。)章乃器(浙江青田人四十一歳、浙江實業銀行副經理、銀行學會常務理事だったが、昨年来如抗日雜誌上に應

果として強はれ、雄健な筆力を以て救亡運動の大立物となつた。御蔭で銀行家、商賣した。四人の名で、去る七月十五日發表した「團結禦侮のいくつかの基本條件と最低要求」が、最も扼要的であるので、その大意を左に紹介しよう。

「救亡聯合戦線の正確な立場は、次のやうである。(一)抗日救國はわが全民族の生死存亡に關する大問題であるから、一切の人力・財力・智力・物力を集合し、全國總動員を實行してこそ、はじめて最後の勝利を得るのだ。民衆だけでも行かず、政府だけでも不可。いかなる黨派でも、單獨でこの大事業を請負ふことは出来ぬ。(二)すでに聯合戦線であるからには、各黨・各派を取消して、一團となることではない。各黨・各派はそのままにして、ただ抗日救國の一點に於いてのみ一致を求めようとするのである。(三)一切の行動の公開を求める。(四)聯合戦線の主要目的は、抗日救國隊伍の擴大に在る。漢奸でも悔悟すればこれを包容して差支へない。(五)聯合戦線は過渡的・一時的結合であつてはならぬ。抗日救國完成の最後の一日迄存続させなければならぬ。

我等の希望は次の如くである。

(一)國民黨領袖蔣介石先生に對しては、先づ「内を安んじて後外を攘ふ。」といふ主張を放棄せんことを勸告し、(イ)西南に對する軍事行動停止、(ロ)共產黨との停戦議和並に携手抗日、(ハ)抗日言論・救國運動の自由を要求する。(二)西南當局に對しては、聯合戦線に對して、今一步の認識を進むることその統治區域内に於ける言論自由、並びに中央との對立取消を要求する。(三)宋哲元將軍に對しては、環境を察して、ただ學生の愛國運動を壓迫せず、抗日民衆を逮捕しないといふことだけを要求する。(四)國民黨に對しては、共產黨との提携を恢復せんことを要求する。共產黨も中國人である。日本人以上に憎い筈はないではないか？(五)共產黨と紅軍に對しては、八・一宣言以後屢次の宣言聲明を具體的に實現し、中央軍に對する攻撃停止し、占領區域内に於ける勞資衝突を緩和し、聯合戦線内に於ける黨員の級闘争その他の理論を封せんことを要求する。(六)民衆に對しては、暫らく生活問題に關する要求を延期し、抗日といふ共同目的に向つて團結せんことを要求する。」

工作としては、勿論文字に依る宣傳が第一を占めてゐる。無数のパンフレット、小雜誌が、一仙か二仙で賣捌かれ、羽の生へたやうに賣れてゐる。その内容は民族解放、どうして自衛するか、どうして救亡陣線を組織するか、學生運動、國難教育、婦女解放、兒童の救國運動、財政經濟上から見た日支戦争といったやうな題目が多く、日本のことを倭寇・島夷・日寇・寇・敵・對方などと書し、日支戦争となれば、必ず最後の勝利は支那に歸すると斷じ、極端なものになると「金融状態から見ると五十一日しか繼續の能力がない。しかも上海事件でも、三十四日かかつたではないか！」などとアザつてゐる。噴飯ものであるが、それらの豆タンクは全國どこへでも自由自在に潜行出来るので、その及ぼす影響は看過出来ぬ。成都事件を起したのなども、中學生が主動だといふから、恐らくこれらの豆タンクの言論に煽られたものであらう。この外左翼作家のいはゆる國防文學、これが實に不思議と思はれるほど續出版される。宣傳工作には、この外左翼劇及び映畫がある。各界救國會成立の日、その餘興的に「東北の家」「走私(密輸)」などといふ劇が演ぜられたことは、その當時報せられた。組織工作としては、各學校に救國會があるのは勿論、各工場、商店等、少しでも人數が集まるころには、皆その組織があり(表面研究會、讀書會を名乗つてゐる)學生連は農村に入つて行つて、「御前達の苦しむのは、畢竟日本帝國主義のためだ！」といふ風に宣言して、農村救國會を組織するといった調子である。

これを要するに抗日救國聯合戦線は、支那版の人民戦線運動であり、その主要なる特徴は、抗日を唯一の旗印としてゐることである。中國共產黨の、これに對する領導力は非常に大であり、人民戦線運動は、事實上共產黨の一形態であるが、しかも中共戦術の巧妙なる、階級闘争の理論を隠蔽し、反ファッショ的宣言を慎しみ、抗日の一點に大衆の注意を聚焦せしめてゐる。彼等に取つては如何なる形にもあれ、ともかく一度大衆を組織すればいいのであつて、組織が出来ればアトはいかやうにも領導出来ると思つてゐるのである。——然り、共產運動である、容共促進・國共合作促進運動である。

それが、抗日の一點に運動方向を聚焦してゐる以上、日本として何等かの對策を講ぜねばならぬのは自明の理である。況んや、すでに赤化共同防衛といふ、國際的大經綸を打立てた日本である。では、どうしたらいいか？ 靜かに支那を凝視することである。

そこには、廣汎なる人民戦線と相對して、最近まさに全支那の統一を完成せんとしつつある一陣營が、否でも應でも眼に入る筈である。對策は、そこから著想されなければならぬ。

——京滬三週の視察から歸郷した八月二十五日が成都事件の當日であつた。舊師蘇岡先生の三男、渡邊洗三郎氏と、かつて東都一書肆の社員として、私と多少の交渉を持つたことのある深川經二氏とが、——日本にゐて、遙かにその重大性を感知し、焦燥の極、飛び出して行つて、一通りの検討を終つたばかりの「抗日救亡聯合陣綫」の犠牲となつてゐた、といふことは、何としても、偶然とは考へられない。餘き犠牲に對する敬禮の下に大稿を書いた私は、わが朝野に對して、切實なる對策樹立を促さずには居られぬ。希くば本稿及び下記略年表を索引として、抗日陣綫の徹底的検討を進め、對策の基礎工作を完成されんことを望んで止まぬ。

一九三二・四・二六中蘇政府對日宣戰通電九・一八黨中央、中蘇政府對日宣戰通電に對する大衆の回答を要望すと通電。一二・一二露支復交。

一九三三・一・一五中蘇政府對日宣言。三・四中蘇政府對日宣言。三・八國民黨自救會成立。四・一五中蘇政府對日宣言。五・二八朱德・毛澤東福建に抗日合作提議。九・三〇上海に第二次世界反戰反ファシズム大會開かる。一一・二六瑞金ソヴェト福州人民兩政府抗日合作協定締結。

一九三四・二・一〇「新生」週刊創刊。五・三中國民族武裝自衛委員會「對日作戰宣言」及び中國人民對日作戰基本綱領「發表。七・八中蘇府」中國工農紅軍北上抗日宣言」發出。九・一中國民族武裝自衛委員會代表大會召集。戰時工作研究會成立。

一九三五・五・四「新生」不敬記事掲載。七・七「新生」事件解決。七・二五コミンテルン大會開かる。八・一中共抗日宣言、新戦術を盛る。九・——抗日救國大同盟組織。一〇・二五中蘇文化協會成立大會。一一・九中山兵曹射殺事件。一一・一六鄒韜奮「大衆生活」創刊。一二・——國難教育社成る。一二・九北平學生デモ。一二・一五「抗日先鋒」誌創刊。中央救亡運動機關誌「救國時報」巴里に創刊。一二・一六北平學生デモ。一二・二五中共中央政・局政治決議。一二・二八上海文化界救國會成る。

一九三六・一・六陶行知「國難教育方案」上海文化界救國會で採擇。二・一「大衆生活」發禁。二・一一中共中央の全國救國會代表大會召集通電。三・一〇中共中央北方局抗日救國宣言。四・二六北平學生救國聯合會宣言。五・六救亡運動機關誌「救亡情報」創刊。五・二九中國學生救國會聯合會成る。五・三一全國各界救國聯合會上海に成立。左翼排日劇上演。六・七「生活日報」出版。左翼作家文藝家協會を組織。六・二一抗日救國軍第四集團軍總司令布告。六・二八著作人協會成る。七・一〇董生暗殺事件七・一三全救聯合會代表南京に赴き瑪玉祥と會見。七・一五沈鈞儒・章乃器・陶行知・鄒韜奮「團結禦侮的幾個基本條件與最低要求」宣言發表。七・一七ボゴモロフ大使蘇聯軍事映畫を支那朝野に展觀せしむ。八・二五成都事件。(中央公論一九三六・一〇)

第二節 抗日宣傳最近の傾向

全國各界救國聯合會及び全國學生救國聯合會を中心に、各階層に亘る抗日團體がこれに参加し、背後に中國共產黨を控へて、抗日統一戦線が完成に近づくとともに、支那の反日運動は、俄然緊張を示して來てゐるが、ここに我等の最も注意しなければならぬことは、抗日宣言の基調が、「反日」から「毎日」へと變化しつつあることである。即ちこれまでの抗日宣言は、例へば、「日露若し戦はば」支那はどうするか？ 或はどうなるか？ といったやうな題目が、多く見受けられたものであるが、この種のものは、近頃では、漸く清算せられて來たやうである。「清算」といふのは、すでに論じつくされて、暗黙の間に、一種の結論を民衆がつけてゐるといふ意味である。どういふ結びをつけたかといふに、日露は必ず相戦ふ、さうしてロシアが必ず勝つ、その場合、支那は勿論ロシアの側に立つ、といふ結論である。これにはロシアの對支宣言が、かなり利いてゐる。ロシアは強い、ロシアの軍備はかくのごとく強大だ、日本の侵略を防止し得るものは獨りロシアあるのみ、といったやうな宣言を、この數年來、不斷に繼續して來たロシアの努力が報みられ、支那人は、ロシアが勝つものと思ひ込んでゐるらしい。それは必然、日本は弱い、といふ風に開展する。ここに「毎日」の萌芽が見える。そこで、日支戦争を夢想する宣言が産れる。今や抗日宣言の基調は、日支戦争の必然性、

さうして最後の勝利は、必ず支那に歸するといふ點に集約されてゐる。かうした驚くべき宣傳が、民衆に與へる影響の大きいことは、成都事件でよく判る。この事件、畢竟毎日宣傳の産物である。

毎日宣傳の實例は拾ふべくその煩に堪えぬが、一、二を挙げると、抗日聯合戦線隨一の花形役者である章乃器（前浙江實業銀行副經理、現に全國、界救國聯合會の理事）は、

「支那の出路は、ただ犠牲を惜まぬアビシニア（エチオピア）式出路があるのみである。五百萬の人口しかないアビシニアでも、尙且つ伊太利と決戦することが出来たのに、四億五千萬の人口を持つ支那がどうして敵人と死戦することが出来ないのか？もし武器が萬能だといふならば、同盟會はどうして滿清政府を打倒することが出来たといふか？ 國民革命軍はどうして北洋軍閥を消滅することが出来たといふのか？ 支那と帝國主義との戦争の初期に於いては、失地は免がれたいところであるがその限度は、恐らく現在の屈從外交に因る失地の限度を超過することはあるまい。」

と論じてゐるし、國家主義派を代表して、抗日聯合戦線上に活躍してゐる王造時も、

「九・一八後四年來の事實は、民衆力量の偉大を證明してゐる。日本に對して抗戦しようとならば、先づ民衆を解放しなければならぬ。民衆を解放してこそ民衆ははじめて組織せられるのであり民衆の組織があつてこそはじめてその偉大な力量が發揮せられるのである。而して民衆のこの偉大な力量こそ、我等の最後の勝利を保障するのだ！ 我等と日本との戦争は、被壓迫民族が、外來の侵略に反抗する戦争であり、物質の落後せる國家と、物質進歩せる國家との戦争である。我等の恃むところは、新式の大砲、飛行機、タンク、軍艦でなく、廣大なる民衆の血、肉、精神、この精神の打成せる一片の武力である。一・二八（上海事件）はその鐵證である。當時親しく作戦を領導した翁照垣將軍はかういつてゐる「十九路軍と敵人との物力上の對比は相距ること甚だ遠かつた。彼等は二百以上の飛行機、二百以上の重砲、四百以上の野砲があつたが、我等には一つもなかつた。軍隊の數量上の對比も、敵人に及ばなかつた。しかも二ヶ月の抗戦に、敵はわが戦線を一步も越えることが出来なかつたのだ。」

これはどういふわけか？ 上海各界の民衆が奮起して戦争に参加したことが、その主要な力量となつたのである。敵人の力量は、十九路軍を打ち敗ることは出来たが、上海の全曉民衆を打ち敗ることは出来なかつたのだ。同様に、もし果して全國軍隊が前線に進み、全國民衆が一致して抗戦するならば、戦勝の把握は我等の手中に在るであらう。これは眞理である。惜むらくは上海停戦協定以後、民衆は壓迫され民衆は銷沈し去つたのである。」

と書いてゐる。

以下、私が、比較的詳細に紹介しようとする論文も、その一例に外ならぬ。題して「中日の財政經濟上より未來の戦争を觀察す」といひ、筆者は評論家の錢俸瑞、反日文獻方面には、相當活躍をつづけてゐる論客だ。

「主要な敵人に向つて抗戦しない限り、支那の前途には、一條の死路があるのみである。支那の國民經濟は、植民地化に向つてまづしぐらに進むあるのみだ！ だが、抗戦するとなれば敵人の武器がいかにか我等に數倍しようとも、最後の勝利は我等に屬するのだ！

どうして、抗戦せねば植民地化するといふか？ 目前支那の全經濟は、帝國主義に握られてゐる。石炭、鐵等は殆んど外人、特に日本人の手中に在る。東北（滿洲國を指す）の炭礦は全國の四十%を占めるが、これはすでに敵の資源に歸した。山西の石炭も、將さに日本に握られようとしてゐる。支那の鐵礦はほとんど日本に取られてゐる。八十%以上が日本のものだ。絲業は日本に壓せられて、「奄々一息」の状況であり、煙草業も帝國主義の蹂躪下に在り、「民族工業の王」と構せられた紡績業は、今日では日本の在支資本、支那商の三倍以上に達してゐる。東北と北支の市場を失ひ、原料を日本に占められた支那紡績は、停止するやら、閉鎖するやらの状態に引替へ、日本は上海、天津、青島等に於いて資本を増加し、新工場を増設した。天津の支那紡績は、ほとんど日本の經營に歸した。

農業はどうか？ 元來植民地の農村といふものは、帝國主義資本掠奪の主要淵源である。最近日本はしきりに經濟提携をいひ、「工業日本、農業支那」の計畫を提出してゐるが、日本が好意上から「以農立國」の金看板を支那の爲に保存しようといふのでなく、日本の目的は、支那を正真正銘の落後植民地とし、支那から日本に廉價な原料を輸出させ、日本は支那に高價な製造品を輸出しようといふのである。これでは支那は永久に日本に經濟的齷齪を強ひられるわけである。北支に於ける棉花栽培などは、支那の農民をして、日本資本家の第二等奴隸たらしめんとするものに外ならぬ（第一等奴隸は日本の工人である）。

金融、財政はどうか？ 表面は堂々たるものであるが、實權はコムブラドルに握られてゐる。最近日英米三國の支那貨幣競争奪は、支那の金融、貨幣が早くすでに帝國主義の附庸となつてゐることを語つてゐる。關、鹽稅收入、内外債の募集、皆外人の鼻息をうかがはねばならぬ状態である。

だから、もし現在の狀況をそのまま繼續して行つたならば、工業といはず農業といはず、財政、金融といはず、全國民經濟は完全なる植民地化の一路をたどる外はないのである。

にも拘はらず、最後の勝利が我等に歸すると斷定するのは、どういふわけか？

兵家の語に曰く「知己知彼、百戰百勝」と。我等は先づ財政、經濟方面から「知彼工作」をやつて見よう。

日本帝國主義の一大特徴は、技術と經濟の發展の水準と、軍備の現状との間の差が、非常に大きいといふことである。現在の陸軍常備軍が四十萬、戦時には三百萬になる。軍艦總噸が六十萬以上、軍用飛行機が千七百、タンク五百餘輛。かやうな巨大な戦備は、日本の能力の負擔し得るところではない。日本資源の缺乏は伊太利の比ではない。戦時主要の動力についていへば、全國動力總額の百分の四十三を占めるのは石炭だが、その貯藏量八十二億噸（滿蒙四十四億噸）は全世界の百分一に過ぎぬ。石油の貯藏量は數ふるに足らぬほど少い。鐵礦は全世界の千分の二・一だ。戰略金屬（非鐵質金屬）は、銀以外はすべて他國（カナダ、澳洲、歐州）の輸入に待たねばならぬ。食糧——その最主要な米は、消費量の四分の三を産出するに過ぎぬ。

金融と財政——現金が五億、紙幣流通高十四億、計十九億圓。第一次世界大戦で、各參戰國一日の戦費三千七百萬だったが、それで計算すると、日本は五十一日間を支持するに堪へるのみだ。面して一九三二年の滬滬の役（上海事變）ですら、三十四日を要したではないか！ 日本の國富總額百三十三億圓、一日三千七百萬で計算すると、日本は二百五十八日間の戦費を維持し得るのみだ。租稅増加？ これは大したものではない。日本民衆の赤貧とダムピングは、世界的名物なんだ！ そこで紙幣の増發となる。これは國內的に極めて危険だ。

一九三五・一・二八高橋聲明に「單に國防にのみ注意して、悪性膨脹を惹起して信用を破壊したならば、國防も決して鞏固といふわけには行かぬ」とあつたではないか！ 紙幣濫發、悪性膨脹は、社會政策上の大問題で、それが起るとなれば「攘外」より「安内」が大切になりはせぬか？

公債増募？ 日本の國債は、今や百億を突破しようとし、金融機關の公債消化力は異常に薄弱であるのに、更に戦時となれば軍需購入のために、大宗の資金が不斷に外流するから消化力はますます弱くなる。日本全國銀行預金百二十五億、公債消化率を二十％とすれば、二十五億圓、僅かに六十七日間の戦費を支持するにとどまる。

外債？ 目下の國際關係は日本に取り不利である。日本と米國、日本とソヴェート・ロシア間の矛盾と衝突は、ほとんど避免しがたく、英國も未來の日支戦争中に於いては、必ずしも日本を助けまいであらう（第一階段に於いては殊に然りである）外債を借りる希望は薄い。

三日以内に、日本が支那を滅し得るであらうといふ論は、少しの根據もない。我等が堅決的に抵抗するならば、全社會經濟についていへば、未來の戦争の勝利は、必ずや我等の手に歸するであらう。

今、我等の力量を見るとしようか。

支那の地大物博、技術經濟發展の可能性の非常に大である事は、皆の知つてゐる通りである。石炭儲藏量は米、ソヴェート・ロ

シア、カナダの次に位し、二四八二八七百萬噸。鐵礦十一億噸以上。石炭三千二百兆噸。戰略金屬は非常に豊富で、タンクステンなどは世界的産出品だ。米は四一五億石を産し、消費量は四億五千萬石。麥三億、(消費量四億二千萬石統計専門家張心一氏の計算に據ると、糧食不足五億だが、日本の不足は二五億に及ぶといふ)

銀藏有量二十億オンス、今は十八億オンス位かも知れぬが、銀集中政策を取るとする。十八億オンス即ち米金十億弗、中國法定貨幣三十億元これを準備として紙幣を發行すれば少くとも六十億元は大丈夫だ。戦時だからこれ以上増發しても差支へない。所得税遺產税を徴することも出来るし、漢奸の財産を沒收することも出来る。

軍隊は常備二百五十萬人。全國動員、戦時編制となれば日本の何倍になるか？ 廣西一省の民團を動員しただけでも三百萬あるではないか？

未來に於ける戦争の勝負は、武器の數、質丈けで決せられるものではない。社會、民族の構造が、戦争の勝負を決する主要因素である。支那が一旦抗戦を發動すれば、全國人民は一條の路線上に立ち、一心一德以て敵に對し作戰する。敵人の「侵略戦争」はこれと異なる。彼等の中で侵略に賛成するのは少數の軍閥と資本家で、一般大衆は反對である。後方から反對運動を起すであらう。農村小作争議、都市の勞働争議、今回總選挙の結果、等々は、日本をして未來の戦争に失敗せしむる基本的因素である。況んや支那民衆は必ずや全世界弱小民族及び廣大群衆(日本大衆をも含む)の同情と援助とを得るであらうに於いてをや。故にいふ、未來の戦争の勝利は、必定我等の手中に在ると。〔永生〕第二期所載)

夢物語見たやうで、一顧にも値ひせぬが、支那では現在かやうな宣傳が盛んに行はれ、無知の民衆が、これに動かされつつあることは疑ふべくもない事實である。欠伸をかみ殺しつつでもよいから一應讀んでいただきたいと思つてここに紹介した次第である。

〔南北〕九三六・一〇)

第三節 抗日聯合戦線と蘇聯邦

一 ロシアの對支文化工作

ロシアの對支工作は、その革命成功以來絶えず行はれてゐるところであつて、これを逐一書くことはここでは不可能である。ここには、昨年來一種の動機を秘めて遂行せられつつある文化工作の一斑を述べる。所謂「秘められたる動機」とは、露支同盟を目的とし、その達成のための工作として、南京政府の内部改造を行ひ、然る後これをして容共政策を採用せしめ、中國共產黨を容納させ、往年の武漢政府に彷彿たるものをつくるといふことに歸するのである。ただ政治的に動き過ぎる時は、人眼に着き過ぎるので、文化の假面を被り、その蔭で事を行はうといふ方策を採つた。けだしロシアは、(一)その國力を誇大に宣傳し、(二)日本の進攻を防止し得るものはただロシアあるのみとの印象を支那民衆に植ゑつけ、以て、(三)日支離間を策し、抗日運動を昂揚せしめようとしてゐるのである。

工作の最大業績としては、一九三五年十月廿五日成立した中蘇文化協會がある。成立大會の臨時主席に推された孫科(立法院長)は、參會者二百五十餘名に向つて、左の如く演説してゐる。

中國は東亞に於いて極めて大なる、悠久なる歴史を有する國家であり、今やその國內建設を實行しつつあるが、中國の西北方にも極めて大なる一國家が存在する。いふまでもなくソ聯である。中國とソ聯とは、地理的關係に於いて極めて密接であるとともに、歴史的關係に於いても極めて重要である。かかる關係からいへば、兩國人民は一種の接近の機會を持つべきであり、文化上に於いても一の研究的聯絡機を持つべきである。本會同人は過去に於いてかかる機關がなく、聯絡と接近を圖るべき多くの場合に、その機會を失したことに考へついたので、ここに本會を組織することになつたのである。以前の缺陷は今日から補はれることと思ふ。我等はこの機關を媒介として、兩國文化の恒常的相互的溝通を圖り、兩國文化をしてその鞏固と發揚

とを得せしむるとともに、兩國民間の友誼を促進せしめ、相互理解を深めねばならぬ。

大會はついで會章十五條を可決し、會長には孫科、名譽會長に蔡元培、于右任、陳立夫、顏惠慶、ボゴモロフ(駐支大使)、カーピンスキー(ソ聯科學院院長)を挙げ、ラデック等五人を名譽會員に、梁寒操(立法院秘書長)、王陸一(監察院秘書長)等十五人を理事に選んだ。これらの顔ぶれを見ても判る通り、前から親露的色彩のあつた孫科、于右任の據つてゐる立法、監察兩院を根幹とし、これにC・C團を加へたのであるが、C・C團の陳立夫が参加したのは、學生運動操縦を試みて失敗し、蒋介石から叱責され、國民黨部に於ける勢力を失墜した爲めに、河岸を變へてロシアに縋る策から参加したのであると傳へられてゐる。會の活動は本年に入つて益々盛んとなり、三月一日には上海分會が成立し、潘公展(上海市教育局長)、杜月笙、黃炎培、王曉籟(上海市商會主席)、章乃器等が幹部となり、會員數も六百を超過し、五月から機關誌「中蘇文化」(主幹張西曼、編輯長西門宗華)を發刊しはじめた。

表面「文化」を標榜してゐるが、實は「親露系」分子のために活動の舞臺を提供し、歐米派及び知日派に對して支那政界に親露派なる一大團結を結成せんとする目的であることはいふまでもない。それにしても、歴次抗日的言論を發表し、札附きの聯露抗日派である馮玉祥(軍事委員會副委員長)の名前が見えないのは不思議であると思つてゐたら、果然去る九月三日の理事會で、馮以下三十餘名の入會を可決したとのことである。今時馮玉祥などといへば、日本では問題にしてゐないが、これは机上論であつて、明日の支那に大いに顯はれる可能性のある怪物であることを、私は今度の視察で確認した。いはば抗日派の總帥である彼が、今回いよ／＼中蘇文化協會に入會したことは、非常に意義のあることであり、私はこの一事を以て、聯露抗日派の一大陣營が確立されたと見るものである。

かくてソヴェート・ロシアの對支文化工作は、中蘇文化協會の花々しい活躍を最大の業績とするが、その外、私が上海で聞いたところによれば、次ぎのやうなことが行はれてゐる。

(一) 映畫宣傳。ボゴモロフは本年七月十七日、中華日報總經理林柏生以下支那新聞界の有力者二十餘名を大使館に招待し、

日支問題に關し意見を交換した後、軍事映畫「バリバ・ザア・キエフ」を上映したが、翌十八日は北四川路アイシス・シアターを借切り、同映畫を上映し、中外人士數百名を觀覽させた。この映畫はその後無償で支那側に渡し、方方の映畫館で持ち廻り上映をやつたさうである。この外「三同志」、「最も蒼い海で」、「夏の日」、「チャバーエフ」等のソ聯映畫が、本年五月以後上海大戲院(孫科出資)で上映され、多大の歡迎を受けたといふ。

(二) 新聞政策。ソ聯御得意の題目である。もとニュー・ウォールドといつた新聞を買収し、これを英露兩文のチャイナ・デイリー・ヘラルドと改稱して發刊し、別に漢文週刊「中國導報」を創刊した外、漢字紙〇〇〇〇、英字紙〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇等に補助金を出してゐるといふ。

(三) 宣傳工作。大使館情報部長サラトフツエフ(ヴオツクス即ち對外文化聯絡協會の代表を兼ね)、タス通信支配人ソートフを主腦とし、水も洩らさぬ宣傳陣を張つてゐる。

(四) 聯絡工作。ロシア料理店・カフフェーなどは、大低息がかかつてゐるさうで、一癖あるらしい支那人が盛んに出入してゐる。無論街頭聯絡もやる。なほロシアからの文獻、乃至黨員などは、月三回浦鹽、上海間を往復するセーヴェル(北方)號が輸送に當つてゐるといふことである。〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇、コムパニーといふ書店があつて、その支配人は〇〇〇〇夫人で、〇〇聯絡に當つてゐるといふ。

(五) 〇〇提携。國際形勢變化の結果、上海〇〇當局との聯絡が出来、爾來活動が非常に活潑になつたといふ。

(六) 左翼作家への働きかけ。これも當然想像し得るところで、最近盛んに出版されるいはゆる國防文學について、出版資金が問題となつてゐる。昨年出た田軍の「八月の鄉村」は、東北偽勇軍を取扱つた代表的な國防文學であるが、その巻末に、出版資金のことで色々辯解してゐるのなんか、充分臭いといへる。

これを要するにロシアの對支文化工作は、民衆の獲得及び南京政府領略(變な言明であるが)の二方面に於いて、異常の成功をかち

得て居り、支那に於ける抗日聯合戦線の側面援助工作としての目的を充分に達してゐる観がある。今後とも注意を怠つてはならぬ。朝鮮にもロシア通を上海に送つて、充分監視する必要あらう。

二 抗日から侮日へ、支那宣傳は悪化した

日本に力があるから、排日とか反日とかいふのだと、自惚れてゐた時代があつたが、今日はそんな呑気な事態ではない。最近の宣傳傾向は、抗日から侮日に變つて來てゐる。日本がイヤだ、恐ろしいといふのではなく、一目散に仇日、侮日まで來てゐる。恐ろしいといふ感じよりは、最後には支那が勝つのだと思ひ込んで來てゐるのだから始末が悪い。

東京にゐると不便で、支那の雑誌を讀むにしろ、代表的な大雑誌しか購讀することが出來ぬ。そこで我々は、支那の抗日宣傳といつたところで、大したことはないと思ひ勝ちである。といふのは、大新聞大雑誌の論調は比較的穩健だからである。ところが今度上海に行つて見て、息も吐けぬほど驚いたのは、我々の名も知らないやうな小新聞、雑誌、パムフレットが無數にあつて、抗日宣傳の亂舞をやつてゐることであつた。迂かつて耻ぢた私は、上海在住の同愛の親友T・H君に依頼して、一通りこれらの豆タンクを蒐集して貰つて、コッコッ當つて見て、再び驚いたのは、最近の抗日言論が、いづれも日支戦争を豫想して、しかも支那の終局の勝利を斷定してゐることであつた。

數年前までの彼等抗日宣傳者の主要題目は、日露戦はば、もしくは日米戦はば、支那はどうなるか？ 支那はどうすればいいか？ といふことであつた。この時代が大分つづいたことを記憶してゐるが、今日では、彼等は、民衆は、これらの題目に關して、すでに結論をつけてゐるのである。日露は勿論戦ふ。さうしてロシアが勝つ（ここにロシアの對支宣傳工作の效能が現はれてゐる）。支那は？ 勿論定まつてゐるぢやないか！ ロシアに味方するのさ！、かう結論をつけると、彼等はすぐにこの題目を揚棄した。さうしてまつしぐらに、日支戦争を豫想するところまで來てしまつたのである。

「もし果して武器が萬能ならば、同盟會はどうして滿清政府を打倒し得たか？ 滿清政府は當時比較的高度の武器を持つてゐ

たではないか？ 國民革命軍と北洋軍閥との對抗も、同様である。」（章乃器——由愛國救國說到誤國賣國）

「敵人二百架以上の飛機、二百尊以上の重砲、四百尊以上の野砲、而して、我は一もあるなし。軍隊數も亦及ばず。しかも二ヶ月の抗戰、敵人はわが戦線を一步も踏過し得なかつたのである」（翁照垣——大衆生活第十一期誌上）

「對手方の常備軍二十五萬、戦時動員員五百萬乃至一千萬。これを全部中國に輸送することは不可能。しかも彼は米露をも考慮に入れなければならぬ。わが正式軍隊三百萬、共産軍四十萬、民團七十萬、これが中國の常備軍ではないか？」（葉英——救亡前途估計）

「日本の現金五億圓、流通紙幣十億、世界大戦戦費一國一日三千七百萬圓を以て計ふれば、五十一日の戦闘にたへるのみだ。

しかも一・二八事變でも、三十四日かゝつたではないか？」（錢俊瑞——從中日財政經濟觀察未來戰爭）

噴飯ものであるが、無知なる支那民衆は、これを鵜呑みにしてゐるのだから困る。再びいふ、支那民衆は日本を恐ろしがつてばかりはゐないと。

三 かくて抗日聯合戦線は成る

ソヴェート・ロシアのかかる工作、毎日意識にはめ込まれたかかる民衆、これを背景とし、これを材料とし、中國共産黨はその抗日領導を必死に進める。江西ソヴェート區の潰滅、共産軍の西への退却を善後すべく、中共の打ち建てた新方針、新戦術が、國防政府樹立と抗日聯合軍の組織であることは、もはや周知の事實であらう。昨年八月一日の抗日宣言に、この新方針、新戦術を盛つて以來、中共は大童になつて抗日聯合戦線の結成に努めたが、かつて五・四運動に躍つた北平學生は、今回も亦先導者となり、實踐にその一步を進め、昨年十二月九日及び十六日のデモに依る流血を以て、全國に一大衝撃を與へ、本年六月までに、中共、中ソ、共産軍、中華民族革命同盟（社會民主黨系と十九路軍系の政治團體）、十九路軍（その武力）、廣西軍、〇〇〇軍（事實上〇〇〇影響下に在る）東北偽勇軍、全國學生救國聯合會、全國各界救國聯合會（最廣汎なる階層を包含する）、著作人協會、文藝家協會、文藝工作者一派等を組

（成分子とする抗日聯合戦線（彼等は自ら抗日救國聯合陣線と稱す）が出来上つた。この戦線の欲求するところは、抗日は勿論であるが、より迫切なる要求は、容共促進であり、國共合作助成である。即ち國民黨及び南京政府に對して、共產黨を容納せよ、國共合作を再現せよ、而して抗日戦争を發動せよと要求してゐるのである。

今や彼等は實踐に第二步を進めた。近時頻出の抗日テロがそれである。見よ成都事件は、全國學救聯の仕業であり、中山兵曹事件、董生事件、北海事件、上海海寧路事件は、汪兆銘狙撃事件、唐有壬暗殺事件とともに、廣西軍、十九路軍系は、自づから手を下し、或は殺人請負ギャング團、紅帮を使つての仕事ではないか！

これら諸事件に關しては、今や日交渉が開かれようとしてゐる。日本側の要求がどんなものであるかは、我等の知らざるところであるが、その中の一項に、抗日運動の徹底的取締、抗日團體の解散、排日教育の絶対禁止が含まれてゐるであらうことは、勿論疑ひない。而してこの一項こそ、最重要な條件であることは、我人ともに異議のないところであらう、何を措いても、これだけは貫徹せねばならぬと思ふ。（支那一九三六・一）

第四節 抗日聯合戦線の人物

成都事件や北海事件の原因を通じて、「ナニ、南京政府と黨部の煽動サ！」と、片附けるのは、一應尤もな推測である。しかし、同時に、机上論らしい臭ひが多分にする。といふのは、昨年来、特に急調を帯びて結成せられつつある抗日聯合戦線の存在を、全然無視してゐるかに見えるからだ。事實は、今や支那版・人民戦線にまで展開して來た抗日救國聯合陣線の存在、それに對する國民黨部、南京政府の日和見的態度、乃至不徹底な取締り。かういふはなければ正しくない。成都事件は、聯合戦線の一組成分子たる全國學生救國聯合會の系統の起したものであり、北海事件は、他の組成分子たる中華民族革命同盟、及びその武力を成すところの十九路軍の仕業ではないか！曾つては革命外交を唱へ、排日を鼓吹した國民黨部ではあるが、抗日では、彼等の笛では民衆

は踊らないのだ。だから、彼等のうちのあるものに、當年の熱情を剩してゐるのがあり、學生運動にチョツカイを出したことがあるにせよ、踏み込むこと一步にして、忽ち退却を餘儀なくされてゐる。C・O團の陳立夫が、怖氣を振つて引込んだことは、今に傳へて笑柄とされるところである（彼は蔣介石から、眼の玉の飛び出るほど叱られたさうだ。かくて彼等の大部分は、むしろ火消し役に廻つてゐるのである。一步を譲つて、彼等の中にまだ陳立夫の二の舞を演じてゐるものがあるにせよ。しかし彼等の煽動力は、もはや何程も利かないのである！民衆は、國民黨の旨を奉じて、抗日をやつてゐるのではない。では、誰の領導の下に動いてゐるのか？誰が抗日戦線を指導してゐるのか？

答へは至極簡單だ。——中國共產黨である。抗日運動は、共產運動の一形態である。簡單だが突飛だ、といふ人があるかも知れぬ。解嘲のために數十行を費やせば——

(A) 胚胎時代（一九三二・四——一九三三・三）。上海事變のまだ完全に片附かぬ前、一九三二年の四月二十六日中國ソヴェトト政府は、日本に對して宣戦を布告してゐる。抗日戦線の種子が卸されたのである。同年九月十八日滿洲事變の紀念日に黨中央は、中ソ政府の對日宣戦通電に對し、大衆の迫切なる回答を要求するといふ通電を發し、中ソ政府も亦一九三三年の一月と三月に、抗日宣言を繰返したが、まだ聯合戦線といふアイデアは見られなかつた。

(B) 萌芽時代（一九三三・三——一九三五・七）。ところが一九三三年の四月十五日に、中ソ政府の第四回抗日宣言が發せられたが、この宣言で、はじめて各階層との聯合を謳つてゐる。これと前後して成立した國民禦侮自救會（會長宋慶齡）は、中共が合法左翼機關を抗日に動員した最初のものであるが、彼は更に第二次世界反戦・反ファッシズム大會を上海に持つて來た。（九月三十日開會）。次いで十一月、福建革命が持ち上り、福州に人民政府が成立すると、四一五宣言を實行して、同政府との間に、抗日合作協定を締結した。一九三四年に入ると、國民禦侮自救會は一變して國民武装自衛委員會となり、有名な對日宣戦綱領を發表し共產軍もこれに應じて、北上抗日宣言を發したりした。

(C)開花時代(一九三五・八——一九三六・六)しかし、江西中央ソヴェート區の潰滅(一九三四・一一・一〇)は、共產軍の本意なる西漸を伴ひ、湖南・貴州・雲南・四川・陝西と逐ひ込まれることになる。コミンテルン及び中共は、今更考へ直さざるを得なかつた。その結果到達したのは、軍事偏重主義の揚棄である。共產軍及びソヴェートに頼ることを愚なることを悟つた彼等は、新方針・新戦術として、國民禦侮自救系統の運動を綜合集大成し、廣汎なる抗日聯合戦線を結成しようと思案するに至つた。抗日聯合軍組織・國防政府樹立を謳つた同年八月一日の抗日宣言が指導原理となつて、抗日戦線はいよいよ結成の氣運に向ひ、一九三六年六月までに、(イ)中共、(ロ)中ソ、(ハ)共產軍、(ニ)中華民族革命同盟(陳銘樞、李濟深等)、(ホ)その武力を成す十九路軍、(ヘ)二十九軍、(ト)東北義勇軍、(チ)廣西軍、(リ)全國學生救國聯合會、(ヌ)全國各界救國聯合會(農・工・商學各階層を含む)、(ル)文藝家協會及び文藝工作者一派、(ヲ)著作人協會、等が戦線内に包含せられるに至つた。

(D)結實時代(一九三六・八——)。八月二十四日の成都事件以後の展開は、これを結實時代と指稱することが出来る。すなはち實踐時代である。前掲戦線のいづれの部分にも、一觸即發の危機を藏してゐる。

以上の諸段階を通じて、中共の適切なる領導は、文獻に徴して明かなるところであり、かくて今日の支那は「形は蒋介石の統一を示してゐるが、魂は共產黨に屬してゐる。」ともいへる實相なのである。

與へられた題は、しかし、抗日聯合戦線の歴史的展開ではなく、この線上に踊る人々の評傳である。

先づ本家、根元の中共からは、毛澤東と陳紹禹を逸するわけには行かぬ。だが毛澤東のことは、すでに叙したから、ここには贅せぬ。陳紹禹は黨第一の理論家である。安徽人で、一九二六年莫斯科に留學し、中山大學校長ミフの寵を受け、歸國後いはゆるロシア留學生派の首領として、陳獨秀、李立三、瞿秋白各派を撃破し、一九三一年向忠發死後の中共に總書記として臨むに至つたが、久しからずして中共莫斯科代表團主席に轉じ、現にコミンテルン執行委員となつてゐる。中央の新戦術は主として彼の案出す

るところであり、王明(ワンミン)のペンネームを以て抗日理想を發表し、抗日戦線の總司令官格となつてゐる。巴里發行の「救國時報」(抗日專門の中共機關誌)誌上に見る彼の論文は、妖氣身に迫るものがあり、抗日評論界では、後述する章乃器とともに雙壁を成してゐる。

中華民族革命同盟といふのは、一九三三——四年の福建革命の殘黨である。即ち第三黨社會民主黨系、乃至生産黨系であつて、陳銘樞、李濟深等の一派である。福建革命失敗後、陳銘樞は絶えず代表を莫斯科に出し、ソヴェート・ロシアの援助を得べく努力してゐたが、終にその目的を達し、一九三四年末に、中華民族革命同盟なるものの組織に成功した。彼等の思想は、福建革命當時よりも一層左傾し、ほとんど中共の別働隊と見做してもいゝくらいになつてゐる。がしかし、政治活動としては、さまで注目すべき業績を示してゐず、首領陳銘樞のごときは、今なほ莫斯科に滞在してゐるやうな次第であるが、軍事的には相當の展開を見せてゐる。

即ち廣西軍の抗日戦線への加入、並びに十九路軍の再建がそれである。

廣西軍の抗日戦線加入は、勿論李濟深の努力の結果である。一體廣西派といふものは李宗仁、黃紹雄、白崇禧を首領とするのであるが、これを國民革命と結びつけたのは、同じく廣西人であり、廣東の實權を握つてゐた李濟深に待つところが多い。この關係のために、廣西派全盛時代に於ては、李濟深が同派の最高首領と目されたものだ。その後政治的情勢の變化とともに、黃紹雄は中央に歸順し、李濟深は蒋介石に監禁され、不本意ながら廣西派と離れ、揚句の果てが福建革命。この時廣西派が李を見殺しにするなど散々であつたが、血は水よりも濃く、本年になつて、西南派が抗日反蔣の旗を擧げるやうになつたのは、李の努力の結果である。李は今廣西に入り、事實上廣西派の首領に復歸したわけである。

中華民族革命同盟の武力である十九路軍が、蔡廷鍇、翁照垣を統率者として再建されたのも李濟深の盡力に依る。十九路軍は陳銘樞の手創した軍隊で、その再建についても、陳が當らなければならぬ筋合ひだが、前記のごとく莫斯科にゐて、コミンテルンと

の聯絡に任じてゐるので、李が廣西軍に説き、陳に代つて再建したのだ。福建革命失敗後、この軍隊は中央第六十一師に改編され、今たしか新疆方面に行つてゐる筈だが、中堅幹部約百人ばかりは、逃げて方々に散つてゐたらしいが、蔡廷鍇歸國後、彼を中心としてポツポツ組織にかかり、終に再建にまで漕ぎつけたのだ。上海事件以後、骨の髄まで抗日になつてゐる。この軍隊のことである。果然、北海事件は彼等の仕業だつた。

一方、廣西軍にしても、折角抗日反蔣の旗は擧げたものの、實力の相違はいかんともし難く、やむなく蔣と妥協したが勿論本心ではない。何とかして蔣にケチをつけたい。如何なる手段を講じて、蔣の全支統一を妨げねばならぬ。かういふわけで廣西軍、中華民族革命同盟・十九路軍のブロックが、抗日テロの主力となることは、必然の勢である。汪兆銘狙撃、唐有壬暗殺から、中山兵曹事件、壹生事件、北海事件とつづく一聯の行動は、疑ひもなく彼等の手に依つて行はれたもので、最近の田所水兵事件も、どうやら同じ系統らしい。彼等は飽くなき抗日テロをつづけて、蔣を外交的に不利な立場に逐ひ込み、没落の途をたどらせようといふのである。その手先きとなつて踊つてゐるのが、支那ギャング紅幫（殺人請負團體）である。

成都事件を起したのが、同地の學生だといふ説をホントウだとすれば、これは抗日戦線の一分子たる全國學生救國聯合會（一九三六・五成立）系のものといふことが出来る。五・四運動以來、支那の學生層の役割は、相當重要であるが、北支自治問題を契機として捲き起された今回の學生運動は、五・四運動のやうな原始的・ロマンティックなものではなく、確然たる方針を持つて、特に共產黨の影響の著るしい運動である。昨年十二月九日及び十六日の北京學生遊行は、終に流血を見たのであるが、その全國に及ぼした影響は、素晴らしく大きかつた。抗日聯合戦線の基礎が、これに依つて確立されたといつてもいい。

彼等のリーダーは、まだ無名であるが、久しからずして表面に浮び出るであらう。我等は抗日運動等の搖籃としての學生層を忘れてはならぬ。

抗日聯合戦線が、一九三六年六月に一先づ完成されたと述べたが、それはその頃、全國各界救國聯合會が組織されたからである。

參加團體三十餘、農・工・商・學・女・文化各界を網羅し、抗日運動の總匯たる實質を具備してゐるこの會の成立は、眞に運動に一時機を劃したものであり、機關誌發行、デモ敢行、抗日請願等、表面的にも最も花々しく活動してゐるが、そのリーダーは沈鈞儒、軍乃器、陶行知、鄒韜奮、王造時が五巨頭といはれてゐる。

沈は浙江人で、もう六十二歳の老人である。前清時代の進士で、わが法政大學で新學の色揚げをし、歸國後浙江諮議局（地方議會）議長、民國になつてから衆議院秘書長、上海法科大學教務長などをやり、現に上海辯護士會長をやつてゐる。近年抗日運動には常に先棒にかつがれ、一時の宋慶齡女史の役割を演じてゐる。章乃器は上海言論界の惑星で、本職は浙江實業銀行の副經理だつたが、昨年来突如として抗日宣傳をはじめ、稀れに見る齒切れのいい文章で抗日雜誌に登場し、一躍救亡運動の代表的指導者と認められるに至つた。本業の經濟論文でも、なかなか立派なものださうだ。これも浙江人で四十一歳學歴はないが英語が上手ださうだ。鄒韜奮は黃炎培（江蘇教育界の元老）の乾兒で、國家主義くづれの男だといふ。相當筆も立ち、煽動もうまく企業之才もあり、生活書店を起して生活週刊を發行し、一時大いにアテたものだ。その後東北義勇軍後援資金をゴマかしたと非難され國外に逃避し、弟分の杜重遠に新生週刊をやらせてゐた。この新生が、わが皇室に對する不敬記事をのせて、大問題になつたことは、讀者も知られる通りである。その餘熱のさめた昨年八月、鄒はコソコソ歸國して大衆生活といふ抗日雜誌を起し、これが又大當りを取つた。それが發禁になると、今度は香港で生活日報といふのを創刊したが、今は休刊してゐる。抗日デヤリナリストの代表的な男だ。陶行知は安徽人でコロムビア大學出の教育家、大分著述もある四十五歳の男盛り、いかにも抗日教育家らしく、國難教育社といふのを起し、「國難教育方案」を發行して、センセーションを捲き起した。抗日教育家ともいふべき男だ。王造時はまだ三十五歳の若手で、江西産れの北京清華大學の出身、ウイスコンシン大學の政治學博士。五・四運動では清華代表として活躍した。米國から歸つてから上海各大學の教授、今は辯護士、國家主義派の健將である。

戦線に参加して左翼作家は、二派に分れてゐる。積極的な方が茅盾、洪深、鄭振鐸、葉紫、葉聖陶、歐陽予倩、謝冰心、謝六逸

等の文藝家協會、消極的なのが魯迅、巴金、魯彥、孟十還、蕭乾、吳祖湘等の文藝工作者一派である。茅盾は本名沈雁冰、共産黨くづれの作家でインテリの苦悶を描くことでは第一人者、最近わが芥川賞作家、小田嶽夫氏の譯した「大過渡期」はその代表作である。洪深は戯曲に長じ映畫監督として有名。歐陽予倩は早大出の新劇の大家、葉紫は支那文壇近年の傑作といはれる農民文學の「豊收」の作者。魯迅（周樹人）に至つては「阿Q正傳」に依つて世界的に知られてゐる大御所、今更紹介までもあるまい。

文士について戦線に参加した著作人協會には沈鈞儒、章乃器、王造時の外、諸青來、上海法學院教授潘大遠、交通大學露文講師でモスコイ東方大學出の吳清友、女流評論家で、婦女生活誌の主筆沈玆九等がある。

以上は抗日人民戦線上に立つて、表面的に活動してゐる人々であるが、これと立場を異にし、いはば國民戦線側に屬しつつ、しかも抗日意識を多分に持つてゐる連中が澤山ある。

第一が馮玉祥。軍事委員會副委員長でありながら、絶えず抗日言論を發表してゐることは周知の通り。かつてロシアと結んだことがあり又抗日戦を發表したこともある男。今は兵力を擁してゐないが、二十九軍方面の舊部に對し、何等かの制壓力を持つてゐる。實は馮玉祥など問題にするに足らぬと思つてゐたが、今度支那に行つて見て、その誤まりであることを知つた。蒋介石の後を繼ぐものは馮だといふやうな評判さへある。御互ひの再認識を促して置きたい。

立法院長の孫科。これは聯露主義者として有名。かつて對露復交の主唱だつたことはいふまでもなく、常にモスクワに代表者を送つてゐたし、現に、ソヴェート・ロシアの對支工作のために設けられた中蘇文化教會の會長でもある。監察院長の于右任もロシアびいきで、秘書長の王陸一といふ、共産黨くづれを使つてゐるし、子の娘も共産黨轉向者だといふ。だが于その人はもはや老いさまで問題とするに足らぬ。

歐米派として知られてゐる宋子文、孔祥熙。ここいらは名前をあげただけでよからう。蒋介石腹心のC・C團、藍衣社の一部にも、抗日意識が燃えてゐて、その下層工作者は、共産黨と擇ぶところはないさうだ。C・C團首領陳立夫にしてからが、人民戦線

に便乗しようとし、學生運動操縦に乗り出して蔣から叱られたともいふ。

この外拾ひあげれば抗日分子はまだいくらでもある。眞に少數の親日派（政界、實業界、新聞界に、寧々晨星の如きを發見し得るが、名前をあげるわけに行かぬからそれは省略）を除けば、一世を擧げて抗日派だといふことが出来る。不愉快だが、認めぬわけに行かぬ。

そこで、最後の鍵を握る蒋介石の態度が問題となる。ヤレ親日だ、抗日だと、随分色んな論議があるやうだが、無益な詮索だと思ふ。それよりも、彼の現在の政治的地位を検討し、いかに動くであらうかを見るに如くはない。すでに西南問題を片付け、憲法制定會議（國民大會）を眼前に控え、加ふるに抗日戦線の背後に、中國共産黨が潜んでゐることを察知してゐながら、尙且つ彼がこれに雷同して日本を敵に廻し、九仞の功を一簣に缺くやうな馬鹿らしい取引を敢へてしようとは、ちよつと思へないのである。最近支那から歸つて來た一友は、「蔣は日本人に酷似してゐるが、最後の一线に於いて矢張り支那人だ。」と語つたが、味ふべき言だと思ふ。利害の打算に徹するのは、由來支那人の最大特徴である。（『世界知識』一九三六・一一）

第九章 西安事件と國共兩黨の再婚

第一節 「容共」と西安事件

「容共」が「聯蘇」とタイ・アップして、近代支那の政治史に現れたのは、實に一九二一年であつた。容共はすなはち共產黨員容納であり、聯蘇は、ソヴェート・ユニオンとの提携である。時に或は「聯共」と使用されたこともあつたが、結局「容共」に一定されたやうである。——用語の解釋はさて置いて、では、何が共產黨を容納するといふのであるか？ 誰がこの政策を案出し、且つ採用したのであるか？ いふまでもなく、中國國民黨及び孫文である。さうして、逆にこれを見れば、中國共產黨員の、中國國民黨内部への浸潤工作であるが、どんな原理に基づいて、誰がこれを主張し、何がこれを實行したか？——レニンが、植民地革命の原理に基づいてこれを主唱し、コミンテルンがこれを實行したのである。

一九一一年の辛亥革命は、清朝の打倒には成功したが、民主主義革命の觀點からすれば、それは決して成功ではなかつた。清朝と革命黨との中間に介在した政治ブローカー、袁世凱に依つて、油揚げがさらはれたからである。この結果に失望した孫文は、一九一三年の討袁革命失敗とともに日本に亡命革命の眞の完成を目標として「中華革命黨」を創立した。一九一五——一六年の第三革命には、大體傍觀し、一九一六年八月黎元洪に依つて國會復活を見た時も、孫及び中華革命黨は、一部代表を國會に送つただけだったが、一九一七年六月黎が張勳の強要に因つて國會を解散すると、議員の一部は「護法」を叫んで廣東に南下し、「國會非常會議」を開いて孫を大元帥に擧げた。孫は中華革命黨を「中國國民黨」と改稱して就任したが、政學會(非常國會の多數派)に掣肘され、一九一八年五月辭して上海に隠れた。一九二〇年秋、廣西派首領、陸榮廷の廣東に於ける調制が失敗し、陳炯明がこれを驅逐して廣東

軍總司令となると、孫は廣東に迎へられ、一九二一年四月非常國會から非常總統に選舉された。孫は廣西を平定し、北伐(北方に於ける舊軍閥掃蕩)案を國會に提出可決、十一月大本營を廣西の桂林に組織したが、この時彼を訪問した一人のロシア人があつた。コミンテルン派遣員マアリンである。彼は同年七月の中國共產黨第一回大會に出席した後、南下してここに現はれたのである。

孫・マ會見が、孫のいはゆる聯蘇政策の出発點となつたのであるが、效果は即座には現はれなかつた。彼はまだ武力に依る北伐を夢みてゐたのだ。間もなく陳炯明の背叛が來た。それは先づ北伐反對となつて現はれたので、孫は一九二二年四月廣東に歸り、陳を免職して、廣東軍を孫の直轄とし、北伐軍を江西に入れ、李烈鈞の手で贛州を占領したが六月十六日陳終に公然背叛し、孫これに對峙すると二ヶ月、八月十三日再び去つて上海に歸つた。

離伏・沈思の孫文は、靜かに北伐失敗の原因を考察した。その結果想倒したのは、彼の「支那の社會的平原説」の誤謬である。從來孫文は支那には、貧富の懸隔がほとんどない。支那の社會は、ほぼ一つの平原と見ていい。だから清朝——平原の中央に突起してゐた唯一の高山——を倒さへすれば、國民は擧つて平等の權利と幸福とを享受し得られると考へてゐた。ところが辛亥革命で清朝は倒れたけれど、國民には決して平原状態は來なかつた。清朝の遺産を繼承して、袁世凱が崛起した。これはいけないと、又この山を崩して見たが、今度は方に「軍閥」といふ山が出來た。一方外國資本の侵入に因つて、國內にも資本主義が勃興し、勞資の對立が漸次顯著となつて來た。ここにも山が出來つつある！ この點に考へついた時、孫の胸にヒシとこたへたのは、レニンの次ぎの言葉であつた。

孫文の支那社會的平原説は、小ブルジョアの反動社會主義者の理論だ。支那に於いて、資本主義過程が避け得られるとし、又その産業發達の遅れた故を以て、社會革命が容易であるとするが如きは、全く反動的の空想だ。例へば上海のやうな工業地が勃興する時、勞働者の勢力は増大し、やがて社會民主黨を成し、ブルジョアのユートピアである孫の反動思想の進化を促し彼の政治及び土地政策中に含まれてゐる革命的民主主義の核心を擁護し、その成長を圖るであらう(支那に於けるデモクラシ

イと國民革命運動——布施勝治氏の譯に據る。

レニンのこの批評に心折した孫は、思想的にその徒となり、従来の彼の革命運動が、主としてその基礎を小ブルジョア・インテリゲンツィアに置き、且つ自己の利害に因つて反覆常なき既成軍閥の武力に依頼して、北伐を遂行しようとしたことの錯誤を痛感した。この反省の結果、これまでの革命理論・方法を改變し、労働者と農民を主として民衆を組織し全民的な組織を以て國民革命を達成すべく、その手段として、労働者の組織に一隻眼を具し、すでに「人民のうちへ！」に手を着けてゐた中國共產黨との提携を必要と悟つた。革命方法としては、ロシア革命の展開過程に學び、既成軍閥依存を全廢し、大衆を組織・訓練して、黨軍を編成しなければならぬことを知つた。更に又支那に於ける資本主義勃興が外國資本に負ふの多き事實に鑑み、帝國主義打倒のスローガンを掲げて、民衆の結束を堅めることの有利な事に目覺めた。——さうして以上の諸目的を達成するためには、一九一九年七月のカラハン宣言以來支那上下の同情を集め、「平等を以て我を待つ唯一の國家」の外貌を備へてゐるソヴェート・ユニオンと提携することが、絶對的必要條件であると確信するに至つた。

孫のかうした「心理革命」と相呼應して、コミンテルン及び中國共產黨の、國民黨内部への浸潤工作も、亦日一日と成長しつつあつた。その過程——。

一九二〇年七月のコミンテルン第二回大會で、レニンは植民地革命の原理を説明した。布施勝治氏の譯に據つて要約すると左の通りである。

植民地及び被壓迫民族に對する政策を講究するに當つては、先づ支配的帝國主義國、即ち植民政策の主體國と、植民地及び被壓迫國、即ち植民政策の目的國との間に、判然たる區別をつけなければならない。兩者に對するコミンテルンの政策は、全部別のものでなければならない。植民地被壓迫國に於いては、或期間、少くとも革命の初期には、その國のブルジョア階級の帝國主義に對する反抗運動を扶けなければならぬ。何となれば植民地及び被壓迫國に於いては、プロレタリア階級の勢力は微

弱であり、最先に外國——壓迫國の帝國主義に對して反抗するのは、インテリゲンツィア及びブルジョアであるから、コミンテルン及びその國の共產黨は、インテリゲンツィア及びブルジョアの民主主義革命を援け、これと共同戦線を張ることに依つて、帝國主義の勢力を減殺し、一方労働者、農民に對して、共產主義の運動訓練をなし得るからである。

これを換言すれば、プロレタリア階級の勢力微弱な間は、一時的にブルジョア・デモクラシイと提携して帝國主義を排除し、その間實力を培ひ、ブルジョア・デモクラシイが、その攻撃力をプロレタリアに向けて來た時、コミンテルン及びその國の共產黨（すなはちコミンテルン支部）は、猛然起つてこれに反抗すべきであるといふに歸する。これが支那革命に對するコミンテルンの根本方針である。この方針を支那に施すに當つて、コミンテルンの着目したブルジョア・インテリゲンツィアの黨が、孫文の中國國民黨であることは勿論である。

根本方針が確立してから、コミンテルンは其實行に多忙を極めた。その極東部長ワートインスキーの渡支に依つて、中國共產黨が成立したのは、コミンテルン第二回大會後二ヶ月を経た一九二〇年九月であり、翌一九二一年十一月には、前述の通りマアリンが孫文を桂林に訪問してゐる。次いで一九二二年七月の中共第二回大會宣言には、「中國共產黨は、現在に於いては労働者と貧農との利益のために、労働者を指導して民主主義聯合戦線をつくらなければならない」と謳つてゐるし、その直後の黨中央委員杭州會議では、マアリン指導の下に共產黨員の中國國民黨加入が可決され、それに基づいて中央委員李大釗が、張繼の紹介で國民黨に加入した（一九二二年八月、すなはち孫文上海に歸來した時）。中央委員長陳獨秀も、李の後を追うて國民黨參議になり、國民黨政綱修正委員となつた。爾後（A）共產主義を加味した國民黨政綱發表表（一九三三・二）、（B）孫文、ヨッフエ共同宣言（一九三三・二六）、（C）ヨッフエ・鄒愷熱海ホテル會議（一九三三・二）、（D）中共三全大會で國民黨加入案正式可決（一九三三・六）、（E）參軍長蔣介石、黨軍編成の重要任務で莫斯科派遣（一九三三・八）、（F）最高顧問ボロディン着任（一九三三・二二）等を経て、一九二四年一月の國民黨第一回大會は、國共兩黨合作のステージとなり、中央の國民黨内フラクション責任者、譚平山等九名の中共黨員が、中央委員に指名された。國・共合作こ

に成立し、「民主主義革命聯合戦線」はここに結成され、中共フラクションはこの戦線のムーヴィング・スピリットとして、爾後一九二七年七月まで三年半の間、中共は合法政黨として縦横無盡に活躍し、労働運動と農民運動とを、相並んで昂揚させ、黨勢は大飛躍を遂げたのであった。

これが過去に於ける「容共」の歴史と成績である。然し一九二七年四月十二日の蒋介石に依る上海クーデター以後、民主主義革命聯合戦線は一片の夢と化し、中共は地底に没し去り、(A)農民暴動、(B)罷業、(C)農民バルチザン隊の組織、(D)その共産軍への成長、(E)その遊撃戦に依るソヴェート區の繁生、(F)ソヴェート區の擴大・強化に因る中華ソヴェート共和國の誕生(一九三一年)といふ順序で、共産革命は逐年盛んとなつてゐたが(ソヴェート區合計は支那の約二省に相當し、共産軍は三十數萬を算へた、その極盛時代に於いては)(G)蒋介石の五回に亘る討伐は、一九三四年十一月に至つてソヴェート中央政府を崩壊せしめ、(H)終には共産軍の西北移動を見るに至つた。

そのここに至るまで約七年間、コミンテルン及び中共は、ソヴェート建設方針及び軍事依存主義を執つてゐたのである。ソヴェート區の擴大、共産軍の強化は、彼等をして、その方針の妥當を認識せしめたのであつて、「これで充分、これ以上加へる必要はない。」と自惚れ、關門主義(セクト主義)に立籠り、往年の「容共」時代を忘れてゐたのである。然し情勢は變化した。鐵の如き事實は彼等に示すに、彼等の軍事實力の頼むに足らざることを以てした。西方移動は、共産軍の戦術的展開である。と、自から辯護はしつつも、然しその蔭で、軍事偏重主義の誤謬を反省しつつあつたのである。「軍事依存が不可であるとすれば、何を以てこれに代置すべきであらうか?— 勿論大衆の力である。」と考へついた時、彼等の腦海に浮び上つたのが「容共」の二字であつた。ソヴェート建設方針軍事依存主義を揚棄し、共産運動本來の面目に立歸り、都市に於ける大衆の獲得、すなはちインテリゲンツァ及び小ブルジョア、労働者、農民から、商人、地主に至るまでの各階層を再組織するといふ方針に復歸することの賢なることに想倒した彼等であつた。では、何を目標として民衆の再組織に進まうか? それには絶好の題目がある。すなはち全民衆を牢固として捉へて

る抗日意識である。

彼等にとつて幸ひだつたことは、一九三二年以來約十回に亘つて抗日宣言、對日宣戰通電の類を發し、國民禦侮自救會、民族武装自衛委員會等の抗日團體を組織し、世界反戰・ファッシスト大會を開き、或は福建革命政府との間に、抗日軍事協定を結んだりして、抗日意識に便乗することを忘れてゐなかつたことである。ソヴェート建設方針軍事依存主義と相並んで、かうした反帝・抗日運動にも捨石を置くことを忘れてゐなかつた彼等である。今やこの捨石を利用すべき機會が到來した。この一系の反帝・抗日運動を擴大・深化し、それに依つて民衆を再組織し、民衆の力を驅使して、國民黨をして往年の「容共」を餘儀なくさせ、再び一九二五—七年の民主主義革命聯合戦線時代を實現させよう。— 莫斯科駐在の中共代表團主席で、黨隨一の理論家である陳紹禹(もと中共總書記で、王明・ワンミンなる假名を使つてゐる)等は、一九三五年七月—八月のコミンテルン第七回大會を前に控えて、かやうに新方針、新戦術を決定したのであつた。

コミンテルン第七回大會は、この方針を極めて妥當と認めた。大會席上、ファッシズムの勃興、及びファッシズムに對する労働階級統一のための闘争に於ける、コミンテルンの任務に關する報告が、デイミトロフに依つて行はれ、その一節「植民地及び半植民地に於ける反帝統一戦線」に於いて、デイミトロフは反帝・抗日の最高原理を説明してゐる。

それに據つて新方針、新戦術を揣摩して見ると、(A)コミンテルンは第二インターとの間に反ファッシズム戦線統一を行ひ、(B)その支部たる各國共産黨では、各その國情に應じ、その國の社會民主黨との間に戦線統一を圖るだけでなく、職業組合コーペラティブ、スポーツ團體文化團體等いやくも反ファッショ闘争の利害を同じうする改良主義諸團體との間に戦線統一を行ふべく反帝運動に關しても右と同様の團體、全民解放運動者、平和主義者、宗教的民主主義者と、人民統一戦線を張るべきであるとし、(C)特に支那に於いては、抗日運動に重きを置き、統一的國防政府の樹立と、抗日聯軍の組織を必要とすとし、(D)以上いはゆる戦線統一は、對手團體内部に浸潤し、その内部に在つて活動すべきであるとし、陰險蛇のやうな浸潤工作を以て、敵の中に喰ひ入

るべしと教へてゐるのである。

中共がこれを遵奉し、一九三五年八月一日の有名な「抗日救國宣言」を發聲し、約一年間に亘つていはゆる抗日人民戦線の結成に努力した効果は決して空しくなかつた。これが經過に關しては、最近多くの解説がなされてゐるし、私自身も一再ならず叙述したので、ここには繰返さず、ただ一九三六年六月までに、抗日戦線がほぼ完成し、中共、中國ソヴェート、共産軍、中華民族革命同盟、社會民主黨系、十九路軍、廣西軍、東北軍、二九軍、東北偽勇軍、全國學生救國聯合會、全聯各界救國聯合會、著作人協會、文藝家協會等がその中に包含せられ、シムバとして南京政府部内に馮玉祥、孫科一派の蘇聯容共派があり、實踐運動としては學生デモ、抗日テロ、及び往年の五・三〇事件（一九三五年五月上海の對日英セネスト）のごときものに、一步を誤まれば轉化し兼ねない上海・青島日本紡績罷業煽動等を見てゐることを記すにとどめる。

私は一九三六年八月上海に遊んで實地に研究した結果、抗日人民戦線の現實に成立せることを確認し「容共」が「抗日」を表看板として一大國民運動と化し、その將來の危險性を指摘すること、ここに四ヶ月に及んでゐるが、識者は「燥急の言、その實に過ぐ。」として、嘲笑を浴せたものであつた。然し、十二月十二日に至つて起つた張學良の西安クーデターは、完全に私の認識の正確さを立證した。蒋介石の巧妙なる軍閥處理策の犠牲となり、陝西の山奥に追ひ詰められてゐた張學良及び東北軍は、窮餘の一策、終にコミンテルン及びその手先である中共、中國ソヴェート、並びに共産軍と結び、抗日人民戦線の最強武力となり、クーデターを以て蔣を監禁し、公然「容共、聯蘇、抗日」を綱叫するに至つたのではないか？ 今や共産軍の甘肅に在るもの、北部寧夏省境の毛澤東、徐海東軍、中部の朱德、徐向前軍、東南部陝西省境の賀龍、羅炳輝、蕭克軍合して十萬、これに學良軍十二萬五千が合流したのであるから、その勢少く見て二十萬はあらう。更に新疆を見ると、ここはソヴェート・トルキスタンと通稱されるほどで、すでにソヴェート・ユニオンの一翼と化して居り、滿洲事變後ロシア領に導入した蘇炳文、李杜の部下が、これもかつて東北にゐたことのある盛世才を推して、省内最強の武力を成してゐる状態である。かくのごとく新・甘・陝三省は、完全にコミンテルンの指揮

下に動くことになつたのであるから、實に支那近來の大變といはざるを得ない。クーデターは、眞に突如として起り、しかも事前周到なる布置の下に行はれ、一切の通信機關が杜絶し、断片的なニュースだけしか傳へられてゐないので、見透しは甚だ困難であるが、この稿起草の夜（十二月十三日夜）のラヂオは、南京軍飛機西安上空偵察結果を報じ、赤旗が市内各處に懸つてゐるといつてゐるし、又他の情報に據れば、張學良は獨立政府を組織したといふ。これが或は、一九三五年八月一日の中共抗日宣言以來、抗日人民戦線の口頭禪である「統一的國防政府」なるものではあるまいかとも想像されるのである。不幸この想像が中つたとしたらば、抗日人民戦線は結成開始以來一年有半にして、その中心的スローガンである「統一的・全國的國防政府」樹立の段階に達したといへるのである。他の、もう一つの中心スローガンである抗日聯軍の擴大は、廣西軍、十九路軍を最先きに、可能性が充分あるのであるから、蔣を失つた南京政府の施措一步を誤まらば、所在に反國民抗日軍の蜂起を見るかも知れないのである。

ここに於いて「容共」の意義は一大變化を來した。もはや國民政府をして共産主義黨軍を容納させようといふやうな、微温なものではなくなつたのだ。實力を以てこれを強制しようとする段階になつてゐるのである。民國の大變たるにとどまらず、東亞の危機にまで及んでゐるのである。これに對するわが對策は、日獨防共協定締結の精神に徴して明白であり、支那のみならず、滿洲國にまで及んでゐる抗日人民戦線の跳梁（滿洲國內に於いて抗日合同軍と稱する赤色バルチザン隊は六軍十萬に及んでゐる）を斷じて許容し得ないのであり、實力を以て自衛に當ると同時に、一切の行掛りを捨て、南京政府を「防共」に協力させなければならぬのである。（改造一九三七・二）

第二節 國共妥協問題の真相

中國國民黨と中國共産黨との妥協といふことが、近頃問題になつてゐる。この問題はしかし今にはじまつたものではなく、もとから色々な情報があつた。この問題は、その中で一等古いのは北京政府時代の政客として一寸名のあつた黃漢湘といふ男が、その

甥の黄公略を口説き落して見せると、いふ觸れ込みで、妥協交渉をやつたことがある。黄公略は黄埔軍官學校出で、彭德懷を煽動して共産黨に引入れ、紅第五軍を組織した男。その後分れて自から第八軍を組織してその長となつてゐたのである。漢湘と公略の會見は嘘ではなかつたさうだが、勿論モノにならず、ただ一時黄公略返り説が流布されたにとどまつた。

その次にバツと起つた噂は、蒋介石と、毛澤東代表某との會見が行はれたといふ一件。それにつづいて、一九三三年の四月下旬であつたか、上海からの情報は、國共妥協の條件として、共産黨側から、(一)國民黨中央執行委員の三分の一を共産黨員とすること。(二)ソヴェート區の現状維持。(三)軍費月三百萬元支給。の三條件が提出されたが勿論不成立に了つたと傳へてゐた。

一九三四年十一月に瑞金が陥落した時には、討伐軍から軍費と武器を供給して、大人しく引下がつて貰つたのだといふ情報があつた。八百長だといふのである。

こんな情報を拾つたら切りがない。一九三五年にも、陝西省の洛川で、毛澤東、張學良、蒋介石の三角會見が行はれたとさへ傳へられてゐる。この洛川會議説は、今でも事實だと主張する向きが多い。

この種の情報は、「確證を示せ」といはれては困るが、「全然嘘だ」ともいひ切れない性質のものである。否定も肯定も出来ぬ。然しこれに類する事實は、たしかにあつたらうと思はれる。ことに共産黨の勢が不振になればなる程、妥協したい気分が盛んになるのは、當然だからである。——かうした気分から、中國共産黨の新戦術、新方針が産れた。

新戦術のことは、もう誰も知つてゐる。私自身も度々書いた(一九三六年十月號「中央公報」所載「抗日思想の諸要因」その他)。又繰返すのは嫌であるが、次ぎのことだけは逸するわけに行かない。——(一)軍事依存主義を揚棄したこと。(二)國民の間に普遍化されてゐる抗日意識を搖撼して、抗日人民戦線を結成すること。(三)右は畢竟民衆の再組織を意味するが、この組織された民衆の力に依つて、一九二四—七年の民族革命聯合戦線を復活すること。換言すれば、國民黨及び國民政府をして容共を餘儀なくせしめること。

一九三五年八月一日の「抗日救國宣言」以來、共産黨は必死になつて、各階層の民衆に呼び掛けた。學生、勞働者は勿論のこと

監衣社、青帮、哥老會、白軍將兵等。はじめの間は、未だ新戦術の骨をつかんでゐなかつたためか、やや反國民黨的であり、蒋介石のことを「蔣賊」と書いたりしてゐたが、後になると、「蔣賊」などはオクビにも出さない。さうして最後に、「致國民黨書」(一九三六・八・二五)などが出て來た。この書翰は、一九三七年二月二十日附の妥協提議(後述)の先驅であるが、この兩文獻の間に、西安事件が挟まつてゐて、兩文獻を意義あらしめてゐる。

この事件は、東北軍の人民戦線移行といふところに特徴がある。軍閥の取引と見るは一知半解の論である。中國共産黨、共産黨青年團、中華民族革命解放行動委員會、人民戦線派等が、經營年餘に及んでゐたことを知らぬものは、平面的に軍閥の取引と見るだらうが、これを知るものは、事件を輕視せぬ。理解を導くために、左に素材を提供する。

(一) 雜軍整理策の犠牲となつて、尾羽打ち枯れ行く東北軍に對する「士兵工作」、即ち下層兵士赤化工作のために、黨から潘漢年等が入り込んでゐた。共産黨討伐の第一線に立つことは、赤化宣傳の矢面にさらされることだ。黨・軍の士兵工作が成功するには、半歳を要しかつた。

(二) 學良の側近に在つて、「手引き」的地位に在つたものに、學良の機要秘書黎天才がある。北京大使館手入れの際、李大釗と一緒に捕まつたが、奉天人といふので生命乞ひが利き、爾後學良に喰附いてゐたのだといふ。

(三) 共産黨青年團の影響下に、學良がつくつた東北大學がある。その卒業生は、群を成して東北軍内に入り込んだ。西安事件の中心人物苗劍秋はその最も著はれた一人である。

(四) 解放行動委員會の首領黃琪翔は、十月頃西安に現はれ、學良に人民戦線加入を勸説した。

(五) 「新生事件」の杜重遠は、人民戦線のアヂテーター鄒翰齋の弟分であるが、彼も西安に現はれ七千の大デモを指導したりしてゐた。

蒋介石監禁の第三日、學良に依つて彼に手交された八要求こそは、これらの背景の拘懐する主張の結晶である。蔣、南京歸還に依

つてこの八要求が消えたと思つてはならぬ。活きてゐる。それを中心として現在の支那政局は旋廻しつつあるを知らねばならぬ。張・楊の八要求に次いで、周恩来と蔣の會見といふ歴史的事實が発生した。周が中國共產黨の元老であることは今更説明するまでもなく、かつては黨中央の要職に歴任し、現在總書記に任じてゐる有力者である。西安事件發生するや彼は十二月十七日西安に入城し、「紅中社」(紅色中華通信社)といふ通信社を組織し、宣傳に大重になつてゐたが、某日、張の紹介に依つて、兩者の會見が行れた。といつても、兩者は決して初対面ではない。蔣が黃埔軍官學校の校長だつた時、政治主任代理であつたし、一九二五年の十月に蔣介石が第一軍長になると、彼はその下で第一軍政治部主任をやつてゐたといふ因縁があるのである。變つた形で久瀾を叙したわけだ。この時周の持ち出した條件は、次ぎのやうなものだつたといふ。

(一)中央軍が共產軍討伐を停止するならば、共產軍は蔣に屬して抗日戦線に出陣するであらう。

(二)黨は反國民的活動を一切停止し、國民黨と抗日に協同しよう。

(三)黨はソヴェート區に於ける土地政策を抛棄し、ソヴェート區を社會主義實驗區と改稱するであらう。

(四)國民政府を改組し、人民戦線派代表を参加させられたい。

これに對して、蔣は次ぎのやうに答へたといふ。

(A)共產軍を軍武裝解除して中央軍に改編し、幹部將校は同一資格で中央軍籍に入れる。毛澤東、朱德は國民政府保障の下に外遊させる。

(B)黨は「大衆黨」又は類似名稱に改し稱、秘密政黨として存続は差支へないが、統一を破壊するやうな工作は絶対に許さない。

(C)ソヴェート區を解消して省縣制にする。現ソ區職員は國民政府から相當官に改めて任命する。收復地區の實質上の社會主義的實驗工作は別に干渉せぬ。

(D)國民政府改組は、歸京後政府當局と談合決定する。

この問答の眞偽は、保證の限りでない。然し有り得ることだと思ふ。

どんな條件で手を打つたか？ 事件解決の條件を揣摩して見るのも面白い。必要でもある。南京側では勿論絶対發表しないから、西安側の報道を擧げる外ない。西安側の機關紙「解放日報」は、十二月二十五日附紙上で次のやうに報じてゐる。

蔣は出發に先ちかの八要求を容認した外、楊虎城に對して次の約束を與へた。(一)中央軍は二十五日から撤退開始、以後の内戦は蔣の責任に歸する。(二)内戦を停止し國力を集中して外敵に對する。(三)國民政府を改組して各方面の人材を入れる。

(四)外交政策を改變し、支那民族の解放に同情する國家と聯繫する。(五)沈鈞儒、章乃器等人民戦線派領袖釋放。(六)陝甘軍事は張楊に一任。

蔣がこんなに讓歩したかどうかは、勿論疑問であるが、さればとて、西安側としても折角の獲物を無條件で放つわけがない。○千萬元の軍費の外「解放日報」所載の半分ぐらゐの條件は獲得したに相違ない。

いづれにせよ、蔣に取つては奇耻大辱である。南京歸還後、郷里奉化に籠つた一ヶ月の間、彼はこの大辱を化して小辱となし、小を化して零とすべく、心力を盡したもと思はれる。事件を善後するステージとしての三中全會を前にして、共產黨の焦慮は、蔣の「化大爲小、化小爲零工作」に集中した。この工作が成功してはたまらない。そこで彼等は、又しても御得意の「表曝工作」に出た。一九三七年二月十日附の「三中全會に致す書」である。本當に國民政府に送られたものか、これ亦判然しないが、「ノース・チャイナ・デイリ・ニュース」が、次ぎのやうにその内容を發表したのは、動かせぬ事實である。(この篇起草の日「三月十一日」落手した「チャイナ・ウキークリ・レビュー」に據ると、同誌にも同文のものが送附されて来たとある)

西安問題の平和的解決は舉國慶幸とするところ、これに依つて和平統一、團結禦侮を實行し得るならば、それは國家民族最上の幸福である。日寇猖獗、中華民族存亡千鈞一髮の秋、本黨は、貴黨三中全會が右方針に基き、次ぎの各項を國家根本策として採擇されんことを切望する。(一)内亂を停止し、國力を集中して一致外敵に對す。(二)言論・集會・結社の自由と政治犯の

釋放。(三)各黨各派各界各軍の代表會議を召集し、全國人材を集中し、共同救國を實行する。(四)對日抗戰準備工作の急迫完成。(五)人民生活狀態の改善。——貴全會が、この國策を確定せらるるに對して本黨は次ぎの保障を提供する。

(A)反國民政府の武裝暴動方策を全國的に停止する。(B)ソヴェート政府を中華民國特別區政府と改稱、紅軍は國民革命軍と改名、國民政府及び軍事委員會に從屬する。(C)特別區内に普選に依る徹底民主制度を實施。(D)地主土地沒收を停止。(E)抗日民族統一戰線綱領執行。

この表曝工作はタイムリ・ヒットであつた。西安事件の影響下に在る國民黨は、換言すれば、張・楊八要求に規制されつつある國民政府は、何等かの形式に於いて、公的に「回答」せざるを得なくなつた。即ち三中全會に於いて、「根絶赤禍案」を採擇し、二月廿一日第六次大會「全會宣言」(二月二十二日)中に於いても亦この問題を言及した。全會宣言は抽象的であるだけにまだしも恕することが出来る。しかしながら「根絶赤禍案」に至つては、明白に「容共條件」を提示し、外間の疑惑を招いてゐる。これを額面通りに解し國民政府は今後益反共的に傾くものと見るのは、少しく早計ではあるまいか？(案全文は「國際事情」五〇九號に出た。)

右の案に現はれた四條件を容認したら、中國國民黨及び國民政府は、中國共產黨を容認しようといふのである。ナニ、實行不可能な條件だから、結局矢張り「赤禍根絶」になるのサ、といふものがあるかも知れぬが、新戰術以後の中共は、もはや昔日の中共ではない。それに何より先きに、ソヴェート・ロシアが否コミンテルンが、如何なる代價を支拂つても、支那をその側に誘引することに決心してゐるのだから、そこには「容れ得ざる條件」はないのである。かうした情勢下に於いては、「根絶赤禍案」は充分に「張・楊八要求への回答」たり得るのである。——さうしてこれを印證するものは、蔣が二月二十二日の閉會式後、中央通信社をしてキャリイせしめた個人的談話である。この中の「言論の自由開放」は、張・楊八要求の第五・六項に、「人材の集中」は第一項に、「政治犯の釋放」は第三・四項に、いづれも相呼應するものだからである。

國民政府は容共した。——かく率直に私は印象を述べる。周恩來の奉化潛行、蔣との會見説、國民黨中央執行委員張冲の西安行、

周との折衝説、これらは未だコンファームし得ないから省くが、最後に風氣の一變を物語る一エピソードを加へ置かう。近着の「國聞周報」即ち支那第一の大新聞であり、胡蝶、張熾章兩氏の據る信用ある言論機關「大公報」の姉妹誌である「國聞周報」に、徐芸書なる人物が、「予は一個の共產主義者である。……」と冒頭して、長論文を書いてゐることである。アチ専門の抗日小雜誌ならばイザ知らず、「國聞周報」の如き穩健中正なる代表的誌上に、かうした論文が出るやうになつたとは、風氣の一變を證するものでなく何であらう。

狐と狸の化かし合ひとして一笑に附することは出来ぬ。東亞反共プロックの組成は、日本がイニシアテイヴを執つた國際的經綸だからである。この見地から些さか表曝したのである。深文羅織に了つたら、日支兩國の幸ひである。(支那一九三七、四)

第三節 國共再婚と周恩來

その頃、巴里にゐた支那留學生は、三つの派に分れてゐた。官費で留學してゐる連中は、多くは國家主義派であつたし、潤澤な私費で留學し、美術などを研究してゐるのはあまり政治的關心を持たず、いはば超然派であつた。第三派は「勤工儉學生」といはれる苦學生であつた。國民黨の元老吳稚暉、李石曾等の主唱で、晝はフランスの工場で働き夜勉強するといふ仕組みの、一團の苦學生であつた。この派は、環境上どうしても共產黨に傾く。超然派は論外として、國家主義派には曾琦、李璜、余家菊等が居り、勤工儉學生には趙世炎、陳延年、李立三、蔡和森等があり、いづれも相當以上の人材で、兩派の軋轢は随分激しかつた。支那公使館の前にあつた某カフェーは、彼等の俱樂部であつたが毎度議論の果てが、殴り合ひ沙汰になることも珍らしくなかつた。かうした環境に、わが周恩來が、勤工儉學生派の末輩として入つて来て、非常に特徴のある活動をするのであるが、その前に兩派の主な連中のプロフィールを描いて見よう。

曾琦、李璜、余家菊は、最近はあまり振はぬが、一時は支那に於ける國家主義派の領袖として、飛ぶ鳥を落とす勢ひがあつた。即

ち歸國後上海に「醒獅」週報を起し、何公敢等日本系國家主義者の「孤軍」週報と相呼應し、「中國國家主義青年黨」の中心となつた。いはゆる「醒獅」派(フランス系國家主義者)の領袖である。趙世炎は一九二五年の五・三〇事件後間もなく死亡し終に大いに彰はれなかつたけれども、それまでの短かい業績を以てして、すでに「中國共產黨空前の人材」の名をかち得てゐた傑物である。陳延年も早世したが、陳獨秀の長子といふ、親の七光りを超越して、これ亦趙に次ぐ人材と目せられた。李立三は人も知る、後一時中國共產黨の實権を掌握して、いはゆる「李立三時代」を形成した男である。蔡和森は黨の理論家として知られ、政治的には伸びなかつたが、それでも當時の地位は、周恩來に比すれば格段の相違があつた。

曾等は「中國青年黨」を組織し、趙等は「中國少年共產黨」を形成し、理論的闘争から戦り合ひまで發展し、公使館の役人を手古ずらせてゐたが、少年共產黨の宣傳幹事周恩來は、持ち前の心臓の強さを發揮して「少共」第一次大會に、國家主義派との妥協辦法案を提出したものである。趙世炎は一驚を吃した。彼等の立場から見ると、それは恐るべき「機會主義」だつたからである。趙の冷嘲熱罵の下に周の案は満場一致否決されたが、ともあれ周が空論に走らず、常に或程度の解決を意企するといふ、實際政治家としての片鱗は、たしかにここに現はれてゐる。後に黨内に遊泳して、常に中樞を離れず、「不倒翁」の綽名を獲得したのも成程と肯づかれる。最近支那の最注目すべき政治事象たる國、共兩黨の「再婚」に於いて、彼が遺憾なくその才能を發揮したのは、決して偶然でない。ノツケから、彼は相當の政治家であつたのだ。

周恩來字は少山、別に伍豪といふ變名がある。一八九六年生れといふから、今年四十二歳の油の乗つた盛りである。湖南人であるとか、浙江義烏縣の人であるとか、色んな説があつたが、結局江蘇淮安の人だといふことに最近定説が出来た。父の立之が天津電報局の會計を永年やつてゐたから、彼も當然天津で育ち、卒業はしなかつたらしいが南開大學にゐたらしい。叔父の嵩堯は蘇皖鐵道巡閱使李純の秘書長だつたといふし、一門先づは中流の家庭。何時南開大學を去つたか不明だが、一九二〇年彼が二十五歳の時すでに巴里に現はれてゐたと思はれる。一九二一年になると、趙世炎や李立三は相繼いで莫斯科に去り、巴里少共も中國共產黨旅

法支部と改稱され周はこれを牛耳つてゐたが、一九二三年、趙、李、陳延年等が歸國して、黨の中樞に入つたといふ噂を聞くと、矢も楯もたまたま廣東に歸つて來た。さうしてこれらフランス派の先輩の推薦で、廣東區軍事委員會の書記になつた。この時、黄埔軍官學校がすでに設立されて居り、黨は特にこれを重視し、校内に黨の特別支部を組織したが、それは當然區軍委书记たる周の指揮に歸したのである。彼はここに於いて大いに支部の強化に努め、表面は校の政治部主任代理として、その下に共產黨員學生としての蔣先雲、王逸常、楊其綱、許漢慎、陳賡、李之龍、劉仇西、黃錦輝、伍仲豪、陳毅、楊溥泉、余洒度、盧德銘、麻植、留佛勤工儉學生出身の魯易、聶榮臻等の錚々たる連中を集めた。このうちには後に共產黨の軍長、政治委員、地方ソヴェート主任、師長になつたものが多く、周がその總大将といふわけで、いはゆる「赤黄埔系」の一勢力がここに形成せられたのである。この勢力を踏臺にして、周は着々彼自身を高め、蔣介石が黄埔卒業生を根幹として第一軍を組織し、自から軍長を兼ねると、周を軍の政治部主任兼政治訓練主任(黄埔校内)にした。周は軍政部に黃錦輝、劉仇西、王逸常を入れ、政治訓練班には魯易、聶榮臻を残し、又一味の李之龍は中山艦長兼代理海軍局長となり、赤黄埔系は第一期全盛時代を現出した。蔣介石の周に對する信頼も、相當なものだつたと傳へられてゐる。

然し一九二六年三月二十日の「中山艦事件」即ち李之龍が中山、寶璧二艦を秘密裡に黄埔に廻し、蔣に對して不利な策動をしようとし、未然に發覺した事件は、赤黄埔系に少なからぬ悪影響を與へ、周に對する蔣の信頼も大分薄らいだので、機を視るに敏なる周恩來は、見切りをつけて上海に走り、中共中央の工作に参加し、一九二七年春中央の武漢移轉とともに、彼は中共中央委員兼黨中央軍事部長になつた。廣東に於ける工作成績が高く買はれて、地方區委から一躍して中央の要職に就くことになつたのであつた。

だが、久しからずして國、共兩黨の分裂が來た。一九二四年の合作以來、國民革命の領導權を争うて來た兩黨は、ここに至つて共產黨の退却に終つたのであるが、コミンテルンの見解に従へば、中共失敗の原因は、全く黨幹部の日和見主義に在つたといふの

である。譚平山等が國民黨左派との聯繫にしがみつき、農民運動の領導を誤まり、又コミンテルンの黨軍編制指令を遵奉しなかつたことが、失敗の原因だといふのであるが、農民運動問題は暫らく措き、黨軍編制の機を失したことは、確かに軍事部長たる周の責任であつた。當時中共の操縦し得べき軍隊は、張發奎軍の大部分、中央獨立師、湖北省政府警備隊、工作糾察隊、農民自衛軍、湖南軍、雜色合計約十五師十五萬人あつたといはれ、コミンテルンが「七萬の黨軍を編制せよ」と指令したのは、決して過大評價ではなかつたのであるが、周が猶豫したために、唐生智等に先を越され、僅かに葉挺、賀龍兩軍約三ヶ師、三萬人足らずを動員し得たに過ぎなかつた。この微弱な實力を以てしては、南昌革命委員會（八月一日成立、周はその參謀團參謀であつた）の維持は思ひも寄らず、下して潮州、汕頭に據つたのも東の間、殘兵一萬二千が、流沙の一戦に漸盡灰滅し去つたのは、むしろ當然の結果であつた。

葉賀南征失敗後、周は上海に潜行し、黨の新總書記瞿秋白の下に中央政治局常務委員兼軍事部長として、宿望の廣東奪取を指示した。一九二七年十二月十一日張太雷を總指揮として起した廣州暴動は、僅かに二日天下に終り、つづいて浙江地方諸處で暴動を計畫したが、いづれも散散の失敗。これらの責任は、當然周に歸したが、強辯して居据はり、なほも各地に共產軍組織の工作に没頭した。その結果、一九二八年五月から一九三〇年春までに、十四軍七萬五千の共產軍が組織されたが、その中周恩來の息のかかつてゐるのは第一軍長許繼慎、第一軍總參謀長陳毅、第三軍總指揮伍仲豪、第十軍團同劉仇西、第六路總指揮周逸群、第十四軍長何昆、第十三軍長胡公冕、第十一軍長陳庚、江西東南路總指揮鍾赤心、中央軍事委員委秘書長聶榮臻、江蘇軍委書記李富春等で、朱德、賀龍、彭德懷、黃公略等を除く大部分の幹部は、皆周の赤黃埔系であつた。赤黃埔系第二期の全盛時代である。

然し周知のごとく、朱德、彭德懷一派には、比類なき組織者たる毛澤東がある。彼の黨内に於ける歴史は、周の到底比肩し得べきところではなく、共產軍の組織者としても、農民バルチザン隊三千を基礎として、常に足を大地に立てて組織して行つた毛の實力は、黨中央の名を背負ふだけの周の組織力をはね返すに充分であつたので、共產軍の實權は忽ちの間に毛澤東、朱德に移り、赤黃埔系の全盛といつても、それはただ表面的のものでしかなかつた。ただ黨官僚としては、常に重要な地位を失はず、ロボット總書記

向忠發の時代にも、李立三に次ぐ地位を保つて、中央組織部長兼軍事部長であつたし、李立三コース問題が起つて、李立三が莫斯科に逐はれてからも、彼は依然その職に止まつてゐたし、向忠發刑死後ロシア留學生派の陳紹禹が總書記となつてからも、彼は依然軍事部長であつた。

だが、黨特務部長顧順章の轉向は、彼をして完全に中央に盤據する望みを失はせた。特務部はゲ・ベ・ウで、南洋煙草會社職工あがりの顧順章がその部長として、領袖の身邊保護を引受けてゐたのであつて、領袖の住所アヂトその他一切の秘密を握つてゐたのである。この男が國民政府に自首して出、逆に共產黨特りの主任者となつたのであるから、領袖連の驚きは一通りでなかつた。陳紹禹が浦鹽から莫斯科に遁れ、瞿秋白が松江に逃避するのを他所に見て頭よい彼は最安全な避難所を江西の中央ソヴェート區に求めた。で、中共中央政治分局を中央ソヴェート區に設け周はその分局書記として赴任することにした。行掛けの駄賃に、彼は顧順章の上海の留守宅を焼き全家を屠殺させた。赤色テロ事件として、當時の上海新聞を賑はせたこの事件と前後して、周はコソツリ江西ソヴェート區に入った。

それは一九三二年のことであつた。爾來今日まで、彼は毛澤東、朱德等と行動をともにし、一九三四年瑞金ソヴェート政府陥落後、共產軍に隨つて四川、陝西、甘肅に轉戦し、戦地工作を擔當した。一時毛澤東と權力争ひをしたこともあつたらしいが、保身の術に巧みな彼は、すぐに妥協したものと見え、そのうち黨の中央組織にどんな變更があつたものか、代理總書記だつた秦邦憲のかはりに、彼の名が總書記として現はれるやうになつた。——そこへ勃發した西安事件である。

外見上、いかにもアツ氣なく一應の解決を告げたといふ點に幻惑されて、西安事件を、單なる「軍閥の取引」以上の何物でもなかつたと見るのが、爾來わが論壇の通説となつてゐる。「何等の思想的背景もなかつた。コミンテルンが發給指示したなど、情測に過ぎない。」から出發して、「國民政府の基礎は、些些たる西安事件に因つて、動搖するほど、しかく弱いものではなかつた。それはますます鞏固に赴き、統一は眼前に在る。この事態を認識しなければならぬ。」といふ、いはゆる對支再認識論に歸着してゐる

が、中共の對國民黨妥協提議（一九三七・二・一〇）國民黨三中全會に於けるそれへの回答（二月二十一日採擇の「根絶赤禍決議」等）、溶暗、溶明の幾場かを經て、今我等の眼前に展開せられてゐるのは國、共兩黨の再婚と、全國的抗日熱の新たな高漲である。いはゆる統一の進捗といふものも、畢竟支那の英國植民地化への一歩前進と、内に幾多の財政上の缺陷を包蔵する無謀な借款政策なのではあるまいか？

——と、現前の形勢を略説して、さてこの新形勢を觸らすに與かつて力ある、一人として、周恩來の策動を擧げると、西安事件の第六日、西安に入った周は、即時「紅中社」（紅色中華通信社）を組織し、つづいて蔣介石と會見した。曾つての黃埔軍官學校長と、その政治部代理主任とが、變つた形で、久瀾を叙したわけだ。この歴史的會見の内容は、周知の事實だから繰返さないが、要するに萬事これでO・Kとなつたのである。どこまでも政治家である周は、一氣に蔣を殺せといきまく孫銘九、苗劍秋等を抑へ、蔣から周到な言質を取り、その上で釋放したのであつた。

それからの周は、或は自づから奉化に潜行し、或は西安で國民黨代表張冲と協議し、必死となつて國、共再婚交渉に當つた。その努力は酬ゐられて、爾來支那からの情報は、一報は一報より急に、交渉の進捗を物語つてゐる。「再婚式」の擧げられたことはまだ聞かぬが、もはや儀式などはどうでもいいのではなからうか。國民大會に對する中共總書記周恩來の批評が、堂堂新聞紙に出るやうになつては、もはや續報を要しないといふ氣がする。

一點の疑ひもなく國・共は再婚した。さうしてこの再婚交渉に於いて、最重要な役割を演じた周恩來が、毛澤東、朱德外遊の後を承けて、西北支那特別區（舊ソヴェート區）の政治責任者として残り、否、今や桃色に變色した新支那の指導者の一人として、すでに隣邦の政治舞臺に登壇したことも、尙更疑へない眼前の事實。彼のためにはじめて傳を立てた所以である。（改造一九三七）

附 録

支那文壇の颯風時代

— 郭沫若半自叙傳・「創造十年の一節」 —

一 發端——魯迅先生への感謝

「創造社」は、一九二九年の二月二日に封鎖された。もう、三年にもなる。社の成立以來の経過を書け、と、友人がいふ。私の知つてゐる創造社、それを中心に置いての、私の十年間の生活。書いて見たいとは思つてゐたが、つい愚圖愚圖してゐた。今度、いよいよそれを書くのだが、書く決心をつけて呉れたのが、わが中國の大小説家・魯迅先生なんだから、突飛で、意外で、ちよつと面白からう。

一九三二年の正月三日、Kがやつて來た。日本の友人だ。例に依つて支那文壇の話になり、魯迅論に落ちた。

「魯迅の立場は、どうですか？」

「寫實手法の作家で、もとは虚無主義的傾向を帯びてゐたが、近年、左翼に轉換したといふではありませんか。」

「さうです。日本作家の右翼の雄・佐藤春夫が、魯迅を、左翼の雄といつてゐますよ。」

歸りがけにKは、黄色の表紙の雑誌を呉れた。「古東多田」(佐藤春夫編)の第二號だつた。その中に、魯迅の「上海文壇の一瞥」が載つてゐるのである。無論、日本文に翻譯されてゐるのだが、その翻譯者は、

「魯迅が、上海の某處で、秘密に講演したもので、週刊「文藝新聞」誌上に載せたのだが、官憲の干渉を恐れて、大分刪つた。それを、本人が更に手を入れて、もとの形に、或はそれ以上にしたのが本篇である。」

と勿體をつけてゐる。これは面白い。大いに左翼の理論でも展開して、上海の御用文學、民族主義派に對して、辛辣な罵倒をやつてゐるのだらうと思つて、二十何頁かの長文を、一氣に讀了したのだが、成程鴛鴦胡蝶派や創造派を罵倒し、左翼運動をも辛辣

に清算してゐるが、民族主義文學に對しては少しも觸れてゐないのである。

「秘密に講演した」のだとか、「官憲の干渉を恐れて」とか、そんな心配は、少しもない講演だ。が、それはそれとして、聞き捨てにならないのは、創造社に對する誤解・曲解の數數である。

そのことが、私をして、この「創造十年」を書かせることにつた。この點、魯迅先生に感謝しなければならない。

附帶的に説明して置くが、本書は、小説ではない。歴史でもない。ただ一個の破落戸の、自叙傳の一部でしかないのである。

二 張資平との邂逅

一九一八年の夏、私は六高を卒業して、九大醫學部に入つた。岡山から福岡へ。大學から遠くない、一軒の質屋に間借りした。まだ學校もはじまつてゐない。ある日の午後、千代の松原を散歩しようと思つて、箱崎神社の前に来ると、パツタリ、張資平に出會はした。

「や、どうしたんだ？」

「君こそ、どうして來たんだ？」

張資平と私とは、一高豫科での同級生だ。彼は理科、私は醫科だつたけれど、中國留學生の數が少いので、授業は一緒に受けたのだ。豫科を出ると、彼は五高に、私は六高に、別れてから、もう三年になるわけだ。

「僕はこの醫科に入つたんだ。君は工科だね？」

「いんや、僕はまだ卒業しないんだ。」

彼の、廣東梅縣の土語も、久し振りのだ。

「どうして、卒業しないんだ？」

「校長が頑固でネ。追加試験を受けさせないんだ。それ、排日運動で歸國したことがあるだらう。で、試験を受けなかつたんだ。」

校長の奴め、「排日したり、卒業免状を取らうとしたり、虫がよすぎる。」といつて、どうしても試験を受けさせないんだ。仕方ないから、海水浴に来てるんだ。」

五月頃、「中日軍事協定」反対のストライキが起つた。「誅漢姦會」といふのが出来て、日本人を妻にしてゐるものを「漢姦」と云ひ、「ただちに離婚すべし。然らざれば、武力を以て處分す。」といふ警告が發せられた。東京では、大分皆が離婚を實行したさうだが、私のアンナは、同棲すでに一年半、それに、子供が産れて五ヶ月、私は甘んじて「漢姦」の名を受けた。田舎に住んでゐたので「武力」處分は免かれたが。

ストライキは二週間続いた。さうして、こんどは「全體回國」の決議が採擇された。金のある留學生は、歸れもしようが、私のやうな、タツタ三十二圓の官費で、親子三人暮してゐる男には、歸らうたつて、旅費がない。金がなければ、「愛國」する資格がないのだ！

「君は、アノ時歸つたんだネ。結果は、どうだつた？」

「どうも實もないネ。北京に行つた代表等は、それでも段祺瑞に一度會つたさうだ。彼曰く、「安心して日本に行け。政府は、決して國體を損するやうなことはしないから。」——そこで、日本に歸つたものもある。北京で役人になつたものもある。上海に下つて、上海代表と一緒に、「救國日報」などいふ新聞をはじめたものもある。要するに、皆、相當な「政客」だよ。」

「だが、本當の愛國者も、あるにはあつたらう。」

「犠牲になつたのも、少くはない。就中、若い連中は一生懸命だつたらしい。新聞を賣つたり、宣傳したり、大分盛んにやつたさうだが、それがいつまで續くと思ふかね。」

落第の不平もあるのか、張は、果しなく憤慨する。道傍の石に腰かけながら、一時間餘りも話した。さうして、一緒に彼の下宿を訪ねた。郊外の下宿屋、二階の大疊、机も何もなく、簾のバスケットが一個抛り出してあり、書物が二三冊散らばつてゐる。何

の氣なしに取り上げて見たら、「留東外史」といふ、その頃持て囃された、淫書のうちに算へられる書物だつた。

「こんなものを讀むのかい？」

「悪いかネ？ 寫實の手腕は、相當なものだと思ふかね？」

——これが切掛けで、話は、故國の文壇に移つた。私は、もう三年も國に歸らないし、その上田舎に住んでゐたので、雑誌や、新聞を見る機曾が少かつた。又、見たくもなかつた。商務印書館で出してゐた「東方雜誌」と「小説月報」これは中國での代表的雑誌なのだが、その内容は、政談でなければ翻譯で、小説も翻譯が多く、たまには創作があつても、舊式の才子佳人派の「章回體」で、「次ぎの巻に、分解くるを聴きねかし。」派だ。新聞に至つては、尙更メチャメチャだ。——私がかういふと、資平も同感だといつた。

「テンデ、讀めるやうな雑誌はないよ。」

「新青年はどうだネ？」

「ややいいネ。しかし、要するに啓蒙的文章たるに過ぎないネ。」

「丙辰學社（註）の「學藝雜誌」は、大分評判がいらしいぢやないか？」

（註）中華書局の舊名だ。丙辰の年（一九一六年）に一部分の日本留學生が發起したもので、陳啓修、鄭貞文、周昌壽、許崇清等が、初期に於ける主要分子だつた。

「新青年」に比較して、専門過ぎ、複雜過ぎる。陳啓修の政治論文が、蔡元培（當時北京大學長）の氣に入つて、それが縁で陳は北大の教授になつた。それから彼は、あまり書かないよ。許崇清の折學論文は、蔡元培との間の論争になり、陳、北京から同人に手紙を寄越し、あまり蔡を叩くなといつて來たさうだ。同人は皆怒つてゐるさうだ。それは兎に角、今の中國で最も缺乏してゐるのは、科學に關する通俗雜誌と、純粹な文學雜誌だと、僕は思ふ。」

「社會に、さうした要求があるか知らん？」

「あるやうに思ふ。中國にゐたつて外國にゐたつて、我階級の學生の考へることは、同じやうなものだよ。」

「同人を集めて、純粹な文學雜誌をやつたらどうか、これは大分早くから、考へてゐたんだ。白話で、文章體を排斥して、さうして文學上の作品だけを集める。科學雜誌の方は、出来るだけ専門的にやりたいと思ふ。通俗科學は各級學校の教科書と參考書で、澤山ぢやないか。」

「文學雜誌大賛成」しかし、同人があるかネ？」

「豫料の同級生に、郁達夫がある。」

「さうだ、さうだ。彼は詩をつくるさうだネ。「神州日報」にいつも出してゐるさうだ。小説もつくと云ふ話だ。」

「岡山にゐた成仿吾、去年東大の造兵科に入ったんだが、文學趣味に富んでゐる男でネ。英文なんか、たしかなものだ。」

「僕等よりちよつと前に、文範村、吳君毅などいふ連中がゐたネ。「學藝」に小説の翻譯を載せてゐるが、彼等は、恐らく僕等と一緒にゐるまいね。」

結局資平と私、それに郁達夫、成仿吾の四人が同人になつて、毎月五圓ぐらゐの支出し、同人雜誌をつくるといふことになつた。それには郁、成の消息を探るのが第一だといふことになつて、これは資平が引受け、私の住居を事務所にすることに定めた。

資平との邂逅、同人雜誌の計畫、これが私の一生に、深刻な印痕を與へた。資平とのホントウの意味での交誼、彼に文學趣味のあるのを發見したこと、このときがはじめてであつた。だから、「創造社」のことを考へると、いつもこのときの資平との會談を想ひ出すのだ。

「創造社」は、このとき受胎したのだ。

二日ばかりして、資平は、熊本に歸つて行つた。大學もはじまつた。

三 私の處女作

九月下旬、ある日の午後、學校から歸つて來ると、アンナが、子供を背負つて、茶の仕度をしながら、

「珍しい御客様が、二階に見えてゐますよ。」

横つ飛びに、段梯子をあがる。御客は成仿吾と、陳君哲、もう一人は知らない人だが、顔だけは大學で見覚えがある。君哲の紹介で、大學四年の徐誦明だと知る。皆六高出身で、仿吾と君哲は、私より一年先きに大學に入ったのだつた。

仿吾も、この間の騒ぎで、歸國した一人だ。今度日本に來るときに、同郷、老先生で、盲目になつて十年にもなる人を連れて來た。さうして君哲のところに落ちついたが、私が福岡に來たと聞いて、やつて來たのだ。老先生は、大學病院で診て貰ふのだといふ。

仿吾とは、一九一五年以來の友人だ。私より三歳も若くて、しかも一級上だ（工科）醫學は天才。彼の兄貴の成邵吾も留學生で、八高にゐたとき、仿吾等二三人を助手にして、英文辭典を譯したことがあつた。それで途方もなく語學の力が出來、高等學校にゐる間、辭典なしでやつてのけた。驚くべき記憶力だ。

湖南省新化の土語で、初對面の人には、サツパリ判らないのが缺點だが、しかし、中國の古文學は、一通りやつてのける。隨分子供のときに國を離れたらしいのだが、それで相當に詩を暗誦したりした。——私の友人のうちでは彼が一等頭腦明晰だ。

さて、仿吾の用向きは、——といつてここに來て考へつたに相違ないが、陳先生と四人、それに私夫婦を入れて、一軒家を借り、アンナに家政をやつて貰はうではないか、といふ、その相談だつた。

御茶を持つて來たアンナに話すと、彼女は非常に喜んだ。共同生活になれば、家賃も安くつくし、或は拂はなくて済むかも知れないし。經濟的に、大いに助かるからだ。一も二もなく相談一決して、早速空家探し。ちやうど箱崎神社の前に、格好なのが見つかった。二階が四間、そこに陳老先生等四人が陣取り、階下の二間には、私等親子三人が住むことになつた。アンナが家政婦、私

がボーイ見たやうな地位に立つわけだが、家賃が助かるので、感激した！

張資平との話——文學雜誌の發行——は仿吾も大賛成だった。が、彼の意見は、同人の数が少いといふのである。東京の留學生には、文章の書けるのは、いくらもあないし、まして文學などとも分りつこはない。ユックリ同志を探して、その上でといふのである。

二週間はかりあて、仿吾は、私等の忠告を容れて、東大に復歸した。寒くなつたので私のマントを着て發つたのを覚えてゐる。

陳老先生の診て貰つたのは、大西教授である。獨逸に十二年も留學し、眼科では、日本で一二といはれる人であるが、有名な奇人、變人で、その點でも、日本醫學界の名物男だ。ある時、某陸軍大將だか、中將だかが診察を受けに行つて、擧手の禮をしたところが、教授は、

「帽子を脱げ。」

將軍は吃驚して、

「軍人は、帽子を脱がないのです。」

教授は、飛び上つた。さうして、將軍を、無二無三に診察室外に押し出した。

「診察を受けに來ながら、帽子を脱がんとは、怪しからん！」

——こんな先生だから、助手になる人が少い。と、そこで、陳老先生の場合である。中國の舊禮としてやはり、帽子を脱がないことになつてゐるので、陳老先生の頭の上には、いつも小帽が載つかつてゐる。この小帽を、如何にすべきか？ だ。幸ひ陳老先生は、すこしも拘泥しなかつた。郷に入れば、郷に従ふのだと云つて、小帽を脱いだ。教授の方でも、年老つた盲人でもあり、わざわざ支那から、名指しで來た、といふ點もあつてか、陳老先生が、その後時時脱帽を忘れても、すこしも問題にしなかつた。

陳老先生の眼は、白内障といふのだつた。外科手術で、或はよくなるかも知れぬといふ。陳老先生は、老人にしては勇氣があり

手術を受けるといふ。血液や便の検査、食餌の調節等型の如くやつたが、陳老先生の一番苦しんだのは、しよ^うがのやうな辛いものが喰べられないことだつた。湖南人からしよ^うがを奪ふことは、實際慘酷なことだが、陳老先生は、それをも忍んだ。手術の日私は、立會はなかつたが、大西教授は、大變うまく行つたと、大得意だつたさうだ。

寒くなると、學校では解剖の實習がはじまる。屍體は刑務所から來る。日本人の身體で、グロテスクに感じたのは文身である。朱と藍とで、實に巧みに出來てゐる。——奇怪にも、それは、私の創作慾を刺戟した。

私は、今日、一つの屍體を解剖した。胸部に、裸體女人の文身があり、その傍に、みみずのやうな文字で、「濱田愛子」と入れ蓋してある。一緒に解剖した日本學生が、ギョツとして叫び出した。

「これあ、齊藤寅吉の屍體ぢやないか！」

私の質問に答へて、彼は「屍盜」齊藤寅吉の話をして聽かせた。——

濱田愛子は、唐津の名門の女である。三年前の夏、海水浴で死んだ。夕暮方、死體が海邊に揚つたので、發見者たちは、屍體を材木小屋の中に入れて置いて、警察に奔つた。ところが、警官が來て見ると、愛子の屍體は、影も形もなかつた。

前代未聞の怪事件だといふので、新聞では大騒ぎ。警察も、一生懸命に捜査をつづけたが、一週間はかり何の手懸りもなかつた。そのうちに一人の漁夫に、嫌疑がかけられた。彼は、晝の間は家から出ず、夜になると外出して、氷を澤山買つて歸るといふ噂だつた。この男が、齊藤寅吉だつた。三年前に細君を亡くし、今はやもめ暮らしだつた。二人の探偵が、後をつけてゐるとも知らず、ある夜、彼は、魚籃に氷を容れて、彼の漁船に行くではないか。籃をおろすと、

「御嬢さん、唯今。濱田の御嬢さん……。」

探偵が躍り出ると、齊藤は、隠し持つた匕首で、胸を突き刺した。も一人の探偵が躍りかかつて、捕縛した。

屍盜、〇〇の廉で、いや、その上に殺人（一人の探偵は、終に死んだのである。彼は、死刑に處せられた。まだ牢屋にゐる

うちに、裸體人像と、「濱田愛子」の四字を入墨したのだ。

私は、その入墨を切り取つて、アルコール漬けにし、コソソリ家へ持つて歸つた。疲れたので、墨の上に寝ころんで、トロとまどろむうち、

「女をかへせ！」

といふ叫び聲、眼をあけると、室の入口に、一個の枯體が立つてゐた。吃驚して、ほんとに眼を醒めた——夢だった。

「枯體」と題する、私の最初の創作である。稿を易へること三たび、出来上ると、陳老先生に読んで聞かせた。陳老先生は、ほんとにさう思ふのかどうか、口をきはめて賞める。得意になつて、「東方雜誌」に投じて見たが、ツツ返された。

陳老先生の眼は、しかし結局駄目だった。四週間ばかり入院した後で、たうとう歸國した。私は、門司まで彼を送つた。

四 宗白華と田漢

陳老先生が歸國したので、共同生活は解消した。もう、こんな大きな家には住んでみられない。海邊近くの、小さい家に引越した。それは、一九一八年の十二月だった。一九一九年になると、世界大戦が終り、正月から、巴里で贖物分け取りの會議が開かれ山東問題が八釜しくなつた。ちやうどこの時代に、私は、第二創作「牧羊哀話」を脱稿した。一九一四年の大晦日に、京奉鐵道で北京から東京に旅行し、その間に、ちよつと朝鮮を見たが、その經驗を利用して、舞臺を朝鮮に取つた。排日の感情を、朝鮮人の心理に移し、幻想を以てデッチあげた。その中に幾首かの牧羊歌、一首の「怨日行」といふ詩があるが、それも勿論私の作である。金剛山を舞臺にしたが、實は、行つたことはない。私の金剛山に関する知識は、寫眞と、それから大町桂月の「金剛山遊記」とより外にはない。

長兄が、北京の司法部に奉職してゐたので、すぐ送りつけた。どこか發表して呉れるところがあつたら、發表して貰ひたいと、つけ加へた。長兄は、原稿を送りかへし、文學などやつてはいかんといつて來た。「怨日行」は、朝鮮の何といふ人の詩集にあるの

か？ など尋ねて來たりした。

間もなく五・四運動が起つた。形式上、民族主義の自衛運動だが、實質上、中國資本主義文化の、舊封建社會に對する決死的抗爭であり、以後、中國の文化は一個の劃期的外觀を呈した。六月、福岡にゐる同志で、「夏社」を組織した。夏は中夏の夏で、時は夏、第一回の會合を夏といふ同志の宅で開いたといふ因縁。目的は、無論抗日で、日本の新聞雜誌から、中國侵略的な言論と資料を蒐集し、翻譯して、中國の各學校、新聞社に送るので、謄写版も買つて來た。ところが、かうした仕事になると、結局陳君哲と私がやるよりない。他の連中は、一向文章が書けないのだ。その君哲も、たつた一回書いたきりで、浙江に歸つてしまつたので、アトは私一人。翻譯、印刷、發送、皆一人でやつた。

この「通信社」をやることによつて、中國の新聞紙と關係が出来た。上海「時事新報」である。この新聞は、五・四運動後目ざましい活動をした。その文藝附録である「學燈」は、當時有名であつた。九月からこの新聞を取つたのだが、はじめて着いた日に、中國の白話詩が載つてゐた。康白情の「——君の歐洲に往くを送る」といふのだった。

「こんなのが、いはゆる「新詩」か？ そんなら、私が今までつくつた舊作でも、發表の資格がある。」

そこで、岡山時代の作である「死の誘惑」、「新月と白雲」、「離別」それに新作二三篇を加へて、時事新報社に送つてやつた。時勢に合したと見えて、「學燈」に載つたときの嬉しさ！ まるで酔つたやうだった。一九一九年の下半年から、一九二〇年の上半年はかうして、私の詩的創作の爆發期だった。

元來、私は詩は好きだった。これは母の感化だった。しかし日本に留學することになると、私は、私の文學的傾向を抑制しようとした。無理もない。その頃の少年は、皆一種の國家主義者だった。「富國強兵」といふことが、その頃のスローガンだった。文學など、以ての外だといふ空氣だった。かうした時代の影響を受けて、文學的傾向、素質があるに拘はらず、科學に志した。しかし數學が得意でなかつたので、理工科を避け、醫科を選んだのだ。(法政・經濟の學は、最初から嫌ひだった)ところが、一高豫科の時印度の詩

人タゴールに魅せられ、それから、高等學校時代の外國語が、獨逸語であつた關係から、ゲーテ、ハイネに心酔した。タゴール、ゲーテから、哲學上の汎神論の思想に接近した。又、タゴールから、印度の古詩人カビールを知りウパニシャッドの思想に進み、ゲーテからスピノザに向つた。それから莊子に歸つた。少年時代の愛讀書であつたが、理解の程度は、皮相なものらしかつた。それが、外國思想の參證を経て、はじめて、本物になつた。

九大二年の時、有島武郎の「叛逆者」を讀んで、ロダン、ミレー、ホイットマンを知つた。ホイットマンの「草葉集」は、私に大影響を及ぼした。それは、私の「晨安」、「地球わが母」、「匪徒類」等に觀取される。

これらと相まつて、私の創作慾を爆發させて呉れたのは、わが友、宗白華だ。「學燈」の編輯者で、哲學研究者である彼は、汎神論者傾向を持つてゐた。これが我等二人を接近させたものらしい。私の詩は、一として没にされず、時には「學燈」の半分を占めたこともある。私は、まるで詩作の工場だつた。捌け口があるとなると、いくらでも詩が出来るのだ。一九一九年から二〇年にかけて、熱病に罹つたやうだつた。だか、二〇年の五月に、白華が獨逸に留學し、「學燈」の編輯者がかはると、私の詩作慾も、全く減退した。

白華の紹介で、田壽昌(田邊)を知つた。彼等は皆、少年中國學會の會員だつた。壽昌は、東京高師に在學中だつたが、ロシア文學が得意だつた。二〇年の三月、春の休みを利用して、彼は福岡にやつて來た。ちやうど次男の博孫(長男の名は和孫、譯者補註)が産れて大さわぎをしてゐたときだつた。金はないし、一切萬事自分でやらなければならぬ。しかし、初對面の壽昌、歓迎しない譯に行かない。一緒に福岡の市中を見物したり、太宰府に行つたりした。そのために、エライ家庭悲劇を起したが、それはアトで書く。

壽昌訪問の結果、出來上つたのが「三葉集」である。白華、壽昌、私の三人の間の往復書翰を蒐めたものである。この書物は、大分歡迎された。壽昌は、その後又「新三葉集」を出さうとしたが、私は拒絶した。別に壽昌に悪感情を懷いたわけではないが、少し臍に落ち兼ねることがあつた。それは、福岡からの歸途京都に寄つて、鄭伯奇に會つたとき、「沫若には、會はない方がよかつた。」

といつたといふことを、聞いたからだつた。彼がやつて來た時、ちやうど子供の産れる時だつたし、私自身が、産湯を沸してゐたといふさわぎ。

「談笑、鴻儒あり」

と、いつたら、

「往來、產婆あり。」

と、受けて、侮辱の意を露はした彼だつた。「三葉集」出版後、手紙を呉れて、

「易梅園先生が、詩人の天分はあるが、煙火の氣が重すぎると、評してゐたよ。」

と、いつた彼だつた。思ふに、私が清高でなく、自重しなかつたことが、彼に侮蔑の念を起させたのだらうが、錢があれば、誰だつて「清高」になり得るさ。壽昌は、たしかに若かつた。人生の何物たるかを知らなかつたのだ。

壽昌と一緒に遊んで、産後のアンナをほつたらかして置いたため、乳は出なくなるし、人工榮養にしたため、今度は食餌中毒になつた。絶食療法の外ないといふので、大學病院の一室に、親子四人が泊り込んだ。秋空、窓外のヒヨロリとした葉鶏頭に、しじらとした秋の陽がさしてゐた。幸ひ二日目から熱が退き、だんだんよくなつたのでホツとした。「密桑索普羅的夜歌」は、このときに得た副産物で、壽昌が、オスカー・ワイルドの「サロメ」を譯したとき、その序文として送つてやつた。

「學燈」には、小説を送つた。「鼠災」が、その中の一篇である。心理描寫の點では「枯體」や「牧羊哀話」より、一步を進めたものである。「牧羊哀話」の原稿は、まだ持つてゐたが、「學燈」の廣告で、「新中國」といふ雜誌が、北京にあることを知り、送つてやつた。「筆酣墨飽、情節勝人。」とか何とかいつて賞めて、その第七期に載せて呉れた。

五 ファウストの翻譯

文學的傾向を持ちながら、時代思潮の影響を受けて、結局醫學をやることになつた私は、日本學風の特徴である「詰込主義」に

憐まされた。それでも高等學校の時は、まだよかつた。語學が主で、教科書は、重に文學書だつたし、同學生も四五十くらゐだつたが、大學に入ると、さうは行かない。とても忙がしい。それに、十七八歳のとき、中耳炎をわづらつたのが、缺陷となつて、百人以上の聴講生に交つて、講義を筆記するのが、とても苦しい。いつそ文學に轉向しようと思つた。だが、それには妻の重大な反對があつた。文學では飯が食へない。醫者になつてゐれば、その方の心配はないといふのが、彼女の主張であつた。無理もない。彼女は生活上の苦痛だけしか見ないのだ。私の、精神上、肉體上の苦痛など、判る筈はないのだ。

一九一九年の夏、「ファウスト」の翻譯をはじめた。さうして同年雙十節（十月十日）の「學燈」に載せた。勿論一部分である。ところが、それが機縁になつて、翌年——一九二〇年——の七月十九日、上海「時事新報」主筆・張東蓀から手紙で、

「同志を集めて、「共學社」を組織した。海外の名著を翻譯したい。君には「ファウスト」を御願ひしたい。全譯を頼む。その他、ただ翻譯を御願ひしたいものもある。報酬は原稿料でも、印税でもどちらでもよい。」

と、いつて來た。私も、アンナも、大喜びだつた。早速、承知の旨を返事して、すぐ取りかかつた。第一部を、四週間かかつて譯了した。改良半紙に、日本筆で。引きつづいて第二部に移つたが、遊戯文字が、第一部に比べて多く、その中に包含されてゐる帝王思想、革命反對の思想は、何としても辛抱出來なかつたので、全譯を中止した。これはしかし私だけではない。「ファウスト」の英譯は、三十種以上あるが、全譯は十種くらゐ。アトの二十何種かは、第一部だけの翻譯なのだ。芝居をやるにしても、第一部だけなのだ。それをいひ立てて、共學社に、第一部だけでどうだと手紙を出したが、着かなかつたか、それとも不承知なのか、何とも返事が來ないうちに、「風災」に罹つた。原稿を、鼠に喰べられてしまつたのである。そこで、妻の説教がはじまつた。「やつぱり、文學をやつてはいけないといふ神のお告げですよ。」

そればかりでなく、「ファウスト」の翻譯は、私の詩作に、悪い影響を及ぼした。私の詩は、五・四運動以前ダダール、五・四時代はホイットマン、その後ゲイテ。かうした變化を経て、私は韻文の遊戯者となつた。「棠棣の花」（女神の一巻）、「女神の再生」、

「湘累」、「孤竹君の二子」等は、この影響下に、書かれたものである。一面、ネオロマンティズムと、エキスプレッショニズムの影響もあるが。北京大學の劉半農博士は、かうした點を捉へて、「語絲」誌上で、

「郭沫若は、上海灘上の詩人で、自稱ゲイテだ。」

と、罵倒した。私は、しかしゲイテを自稱したことはない。却つて今では、ゲイテは崇拜に値ひしなないと思つてゐる。かういふと、劉博士は「自稱ゲイテ以上」といふかも知れないが、それは甘受する。ゲイテに尙ぶべき點は、その努力に在り、それ以外はない。彼の成績と、マルクスのそれと比べて見よ。太陽の前の盤火でしかないではないか！彼は資産階級闘争の選手として、封建陣營に挑戦したが、後にはワイマル公國の宰相になつて、封建陣營に退いたのである。彼の貴族趣味と、帝王思想は、鼻持ちながらぬやうな氣がする。ハイネは、

「彼はただ、女人と接吻することしか知らない。」

と。「紅樓夢」の表現でいふと、

「御嬢さんたちの、唇の、臍脂をなめることしか知らないのだ。」

彼は、獨逸の賈寶玉だ。

ゲイテとは自稱しなかつたけれど、私は、かへつて屈原を以て、自から任じたものだ。「湘累」が、そこに産れた。「女神の再生」（民権雜誌所載）は當時の中國の南北戦争を象徴したものだつた。第三中國——美的中國の建設を唱つたのだが、力が弱かつた。この原稿は、はじめ鄭伯奇に見せ、鄭から郁達夫に見せた。達夫は、一首の獨逸詩をつくつて、私にかへして來た。この方が、私の詩劇より、ズツといいものだつた。

六 颶風時代來る——成仿吾宣言

壽昌。

御互ひに、久しく御無沙汰したネ。君の「ダイオリンとバラ」を見たいと思つたが、「少年中國」の前金が切れたので、まだ読んでゐない。僕も冬休みに短かいものを二つ書いた。「湘累」は、「學藝」に出る。「女神の再生」は、鄭伯奇に送つてある。李石岑の「民鐸」に載せるつもりだ。

成仿吾に會つたか？ 昨年手紙が来て、いよいよ純文藝雑誌を出したい。君にも、僕にも入つて呉れ、といつて来たが、君にも勿論話があつただらう？ 國內雜誌界に於ける文藝は、ほとんど鼓吹の力を失つてゐる。我等にして、狂瀾を挽回するに非ざれば、老頑固派及び形勢觀望派が、勢ひを盛り返すだらう。一班新進も、懷疑に陥るだらう。——と、彼は書いてゐるが、同感だ。京都にも、三四人同志があらう。二月には、僕も京都に行く。ここまで、昨日書いた。今日學校に行つて、仿吾の手紙を受取つた。君のところに、相談に行つたさうだネ。進行状況如何？ 早く返事が欲しい。アトの相談もしたいから。

一九二一・二・一八沫若

この手紙に、「二月には、僕も京都に行く。」とあるのは、京大文科に轉ずるつもりだつたからだ。だが、これも仿吾の反對で、實現されなかつた。

仿吾とは、福岡で別れてから、ズツと通信をつづけてゐた。「學燈」に詩を送るとき、いつもカーボンをに入れて、一部を仿吾に送つてゐた。彼も、一九二〇年に作詩をはじめてゐた。「澎湃たる黄海」で、彼は、

「我等は、我等のスツルム・ウント・ドラックに到達した！」

と、宣言してゐた。房州に、海水浴に行つて、澤山の詩をつくつた。私はそれを「海上吟」と命じて、「創造季刊」の創刊號に採録した。これは、後のこと。仿吾の散文は、勁峭といへるが、時として生硬。ところが、韻文は、幽婉、捉摸しがたき悲哀を藏してゐる。まことに奇妙なコントラストだ。彼が造兵科に擧んでゐるのは、私の醫科と同じく、富國強兵の時代思潮に影響されたに相

違なかつた。一九二〇年の下半期を、彼はトルストイの研究に費した。

沫若と、達夫の外、張資平も東大の地質科にゐた。私の紹介で、田壽昌がそのグループに加はり、京都には鄭伯奇、穆木天、張鳳學、徐祖正等がゐた。資平と私の博多での會話が基礎となつて、いよいよ雜誌が産れさうになつたのだが、東京の連中が、達夫のところへ、二三四回會議したといふ消息があつたきりで、尻切れトンボになつたらしい。

この間、私自身は、學校にも行かないで、フローベルの「ボザリイ夫人」ゾラの「創作」その他モオパッサン、ハウプトマン、イヴセン、ゴルスワージー等に讀み耽つてゐた。醫學はますますイヤになり、國に歸りたい念で一杯だつた。

東大造兵科にゐて、トルストイを研究してゐた仿吾も、私と同様、煩悶してゐたらしい。そこへ、先づ彼に、いい機會が来た。彼の同郷で、一九二一年二月に、法政大學を卒業した李鳳亭が、上海泰東書局編輯部の法學科主任になり、李石岑が哲學科主任、さうして仿吾に文學科主任を割當てたのだ。仿吾は急いで南下、四月一日門司から上船するといふ手紙が来た。矢も楯もたまたまなくなつて、私も同船で歸國することにした。アンナももう諦めてゐた。

アンナと同棲、四年三ヶ月。これが第一次の離別だ。夜雨の中を、十里の松原を通つて、箱崎ステーションで汽車に乗り、翌朝門司に着いて、仿吾と一緒にゐた。支海灘は、大分荒れた。横臥したまま仿吾の持つてゐたレクラム版で、ツルゲネーフの「父と子」を讀んだ。仿吾は、トルストイから、ツルゲネーフに移つてゐたものと見える。

四月三日、上海に着く日だ。黃浦江の、淡黃の水の色が懐かしい。終に着いた。工場、苦力、乞食、長袖の男、短袖の女、電車、自動車、人力車の上海。

上陸して、馬路の泰東書局に行つた。ところが、何としたことか！ 我等は、だまされたのだ！ 李鳳亭は、安慶法政學堂の教授になつてゐる。李石岑はゐない。やはり「學燈」と「民鐸」の編輯をやつてゐて、近く商務印書館に入るといふ噂だ。仿吾のやることになつてゐた、文學科主任には、王といふ人がすはつてゐる。彼は、我我を歓迎した。

「兩君のやうな、立派な助手を得て、大いに嬉しい。」
と。何といふことだ！

はじめの話では、文藝科主任で、月給一百元といふことだった。仿吉は、その心算をして来たのだが、泰東書局の經理、趙南公は、全然その話に觸れない。ただ、仿吉と私とに、多少の商品價値を認めたものか、兎も角みて呉れといふ。三週間はかり様子を見た上、仿吉は、長沙に歸るといひ出した。兵工廠があり、廠長は、東大での同學だから、何とかなるだらうといふのだ。仕方がない。私一人取り残され、地位も、月給も、何もかも定まらないで、ズルズルに書局に居居ることにし、仿吉は發つて行つた。

七 創造社 成る

(譯者曰。本稿の原本「創作十年」は、四六判二百七十一頁、二百二十枚ばかりのもので、全譯するとすると、どうしても三百枚以上になる。それを、六十枚に縮めるのだから、骨が折れる。分量とはかりつつ、ここまで来たが、もう四十枚になつてしまつた。百枚ないと、盛り切れならしい。で、以下、極力節約することを、おことはりして置く。)

成仿吉が去つた後の私は、孤島のロビンソン・クルソーだった。王主任は、イヤらしい男だったし、——ただその下に居る四川人の鄧均吾は、吳芳吉の推薦で入つて来た男で、謹直な青年だったので、すこしは助かつた。私は默黙として「女神」を詩集にしたり、元曲の新式標點化をやつたりしてゐた。

「文學研究会」の連中と、はじめて牛滸園で會つた。鄭振鐸、沈雁冰(譯者註、今、茅盾のペンネームを以て知られてゐる)、柯一岑(時事新報の「青光」編輯者)、李石岑等が来た。會は、ちようどこの頃、北京から上海に還つて来たのだつた。

鄭振鐸。ギリシヤ人型の、顔色はよくない。眞率で無邪氣。握手したとき、小學生見たいに手に墨をつけてみた。

沈雁冰。印象はよくない。小男で近眼。聲音尖銳。何だか鼠のやうな氣がする。

柯一岑、朝鮮人的風貌。

文學研究會組織のはじめ、振鐸から田壽昌宛てで、資平、仿吉、私等の参加を求めて来たことがあつたさうだ。どういふつもりか、壽昌は、その手紙を誰にも見せなかつた。振鐸は、きはめて無邪氣に、私の加入を求めたが、かうしたイキサツがあるので斷るより外なかつた。

その後、振鐸の紹介で、葉聖陶に會つた。蘇州辯まる出して、閉口したが、和氣親しむべき青年だと思つた。

朱謙之にも會つた。彼はトても喜んで呉れた。私も嬉しかつた。五・四以後、新文化運動に従事して居る人人は同じ陣營の戦士であり、かうした同志愛を懐くのである。朱は、その著「革命哲學」を、泰東から出版するので、たうとう引越して来て、二ヶ月ほど一緒に暮した。

「少年中國學會」の左舜生(譯者註、今「國家主義青年團」の領袖)と知つた。意外にも、彼は、私等の雜誌發行計畫を知つてゐた。

「壽昌から、二月頃手紙があつて、出版所を探して呉れといつて来た。一わたり當つて見たが、中華書局も、亞東も駄目だった。商務印書館は、とても駄目だらうと思つて、話して見なかつた。」

と、彼がいふ。これで、東京グループの會議の結果がはじめて判つた。

左舜生の談話からヒントを得て、趙南公に打つつかつて見た。案ずるより産むが易く、快諾して呉れたが、さて同志がない。どうしても日本に行つて来なければといふと、南公は百元旅費として呉れた。それから妻に、四十三元の腕輪、合計百四十三元が、泰東にゐた三ヶ月間の給料見たいなものだった。

福岡に一日ゐたきりで、すぐ京都に行つた。鄭伯奇と李閃亭に會つた。李は、後に「孤軍」派の國家主義派の健將となり、長沙法政學校校長だったが、一九二七年上海で客死した。河上肇の弟子で、私に「社會問題研究」を讀めと勧めた。張鳳舉にも會ひ、その紹介で、北京大學教授沈尹默に會つた。京大に来て、研究中だったのだ。茶色の眼鏡をかけ、四十がらみの、色の青い、按摩のやうな人で、私が、

「上海で、文藝雑誌をやらうと思ふんですが。」
と、いふと、

「上海なんかぢや、文藝なんか……。」

と、来た。二の句がつけなかった。

童話をやつてみた穆木天にもあつた。吉林人で、三高の二年生、トマトのやうな頬をした、天真爛漫な青年。

京都に三日ゐて、夜汽車で東上した。新らしく産れる雑誌の名として「創造季刊」と「辛夷」の二つを、車中で考へ出した。

東京に着いて、五年振りで郁達夫に會つた。杏雲堂病院にゐたが、大した病氣ではない。彼は、私の計畫を熱烈に歓迎し、毎號書くと約束した。「沈淪」、「南遷」、「銀灰色之死」といふ三篇を、もう書き溜めてゐると云ふ。

田壽昌、漱瑜、屠模(六高同學、演劇に長ず。等に會つたが、雑誌計畫の上では、得るところがなかつた。轉じて張資平、何畏、徐祖正に會ひ、達夫を加へて會議した結果、(一)「創造季刊」とすること、(二)出版の時期は、出来るだけ早くすること、(三)創刊號の原稿は、暑休中に纏めること、の三項を議決した。この會合が、創造社の成立會となつた。一九二一年七月初旬の某日——

八 「創造季刊」出づ

日本行、往復三週間、七月中旬に、上海に歸つて来た。間もなく、鄭伯奇が、暑休で歸つて来たので、一緒に「季刊」の準備工作をやつた。

この頃、商務印書館の重役 高夢且老先生が、遙か後輩の私を訪ねて呉れた。安慶法政學堂長、光明甫先生から、英文教習を探して呉れと、頼まれたからだといふ。月給は二百元、ことはつて、郁達夫を認めた。高先生も、納得して呉れた。

着滬して四ヶ月も経つたが、一向創作が出来ない。同人の原稿もあまり集まらない。もう一遍日本に行つて來るといひ出した。趙南公も仕方なく承認した。發つ前の日、高夢且先生が、胡博士と私を主賓に、鄭伯奇等を陪賓にして、盛宴を張つて呉れた。

商務印書館の編輯部にゐる同學、鄭心南(廣東)、周頌人(昌德)、何公政(譯者註、後孤軍瀛洲主義者の首領、昨年の福建革命で活動した人)等も出席した。胡博士とは初對面、光榮の至りである。尖削の面孔、中等の身裁、滿面春風。何公政が、

「二人の新詩人、はじめて御對面會。」

と、茶目ると、

「郭さんは新かも知れんが、僕はもう舊だよ。」

私は、ただ笑つただけだつた。

席間、胡適博士が中心になつて、文學論一くさり。今はもう、どんな話だつたか覚えてゐない。ただ、博士の獨逸語が、ややブロークンだつたこと、煽風器の廻つてゐる中で、博士が酒盃で風をよけて、うまく私のタバコに火をつけてくれたことや、それだけ記憶してゐる。

安慶法政學堂の英文教習の件は、達夫が承諾して、九月上旬、上海にやつて来た。それから四五日して、私は福岡に歸つた。達夫、伯奇、均吾、それから新しい友人の畢瑞生が送つて来た。上海での工作は、達夫と伯奇に頼んだ。達夫は大膽にも、創造季刊明年一月出版と云ふ豫告を、すぐ出した。さうして、遅れはしたが、一九二二年の五月に、第一號が出た。印刷も悪く、誤植二千字以上、新文化運動はじまつて以來、記録破りの不體裁ではあつたが、達夫の「茫々たる夜」が壓巻だつた。

暑休になると、又上海に歸つた。達夫も、安慶からやつて来た。さうして一緒に第二號を編輯した。鄧均吾の進境に驚いた。彼はハイネに爛熟し、新詩人として、誰よりもいい素質を顯はした。彼の「白鷗吟」等は、第二號に採録されて居る。張開天(譯者註、現中華ソヴェト共和國政府人民委員會主席)、吳明、汪履泉と知つた。文學研究會系の詩人で、禿頭から清新な詩をヒネリ出す朱自清も、時遊びに來た。

創造社と、文學研究會(無聲、羅冰、魯迅、冰心、葉聖陶、王統照)等との對抗がはじまつた。彼等の「文學旬刊」は、達夫を肉慾描寫
支那文壇の颯風時代

者と罵り、壽昌と私を、盲目的翻譯者とケナした。沈雁冰は、「郎損」といふ筆名で、私等を頹廢派と評した。達夫と私は、柯一岑の「學燈」で、彼等に應戦した。達夫は、「血と涙」といふ短篇を発表して、雁冰と振鐸を嘲弄した。

創造季刊の第一號は、二千刷つて、千五百賣れた。文學研究會の連中と文學上で喧嘩はしたが、私交上は、何ともなかつた。達夫の發起で、私の「女神の會」が一品香で開かれたときには、振鐸、雁冰、謝六逸、盧隱女士等が出席した。

この頃、政治方面に、少し興味を持ち出した。といふのは、何公敢等が、陳慎侯をかついで「孤軍」といふ雑誌を泰東から出すことになり、私が、その仲介者だつたからだ。陳は福建人で、第一革命に功があり、衆議院議員をやつたことがある。後、商務印書館の編輯になり、國文法及び國語の整理に没頭してゐた。惜しいことに、「孤軍」の出る前に丹毒で死んだ。アトは何公敢が引受けて、その領導の下に、「孤軍」が出生した。彼等の政治思想には、しかし同意することが出来なかつた。私兵を擁する督軍に、護法だとか、裁兵だとか、そんなものが、耳に入る筈はないのだつた。

そのうちに、季刊第二號が出た。仿吾は、長沙から私に書を送り、達夫、資平の作品を批評した後、壽昌の「薔薇の路」に及び「かういふものを出すやうでは、壽昌の前途は絶望だ。」

と、酷評した。中華書局の編輯になつて、上海に歸つてゐた壽昌が、仿吾の机の抽出しからこの手紙を引張り出して見て(仿吾は、この時長沙から引揚げて来て、第三號の編輯に當つてゐた。私に宛てた彼の手紙を、私が福岡に歸るとき、彼のところに預けて置いたのだ。大いに立腹した。これが原因になつて、壽昌と仿吾が決裂した。しかし、元來壽昌は、少年中國學會系で、國家主義派であり、創造社の非國家主義的態度と、自から相容れないものがあつたのだから、どうせ一度は別れるべき運命に在つたのだ。創造社に對して、彼が熱心を現はしたのは、主として私に對する友誼からだつた。

九 「創造週報」と「創造日」

一九二三年三月、福岡に住むこと四年七ヶ月で兎も角大學を卒業した。醫學士にはなつたが、耳の悪い私には到底醫者は出来ない。北大教授になつてゐた張鳳學から、周作人教授の發案で、東洋文學部をつくるから、その教授にならぬかといつて來た。日本留學は、八九年になるが、文學を専門にやつたのではなし、殊に日本文學は不得手なので、斷つた。さうして、やはり上海に歸ることにした。勿論、家族連れで。妻は、はじめて知らぬ國に行くのだ。當然、何等かの感想があるべきだ。——かう書きながら、「アノとき、どんな氣がした？」と、尋ねたら、

「何だか、明るくなるだらうと感じました。あなたは卒業したのだし、これからよくなる筈だと思ひました。」
彼女の、かうした期待は、間もなく裏切られたのだが。

上海では、民厚南里に住んだ。仿吾と一緒に。均吾は泰東に、そこへ、達夫が、夫人、龍兒と女中を連れて、安慶から歸つて來た。辭職したのだ。仿吾と、私と、達夫と、三人の失業者が集まつたのだ。

「籠城だ！」

異口同音に叫んだ。その結果、達夫の不朽の傑作「葛蘿行」が産れ、五月一日には、「創造週報」第一號を出した。五月一日、メーデーでもあり、創造社成立滿一年(季刊出版の日)でもあつた。仿吾の勇猛なる、この號に「詩の防禦戰」を発表した。それは一個の爆撃彈だつた。大博士、胡適、大導師、周作人、その他文學研究系の人人は、これに對して、毒ガスを撒布した。餘憤は、一九三二年魯迅先生の「一瞥」(冒頭参照)に残つてゐる。魯迅いふ。

「極左的・兇惡的面像！」

張鳳學と徐祖正は、季刊の第四號に書き、鳳學は別に「途上」といふ小説も載せたが、仿吾が、彼等の文章を修正したといつて、私等と決絶し去つた。どうしても私の調停を容れない。創造社の一角が、崩れたと感じた。

週報の二號が出てから、達夫が郷里から出て来た。彼の勇猛は、仿吾に譲らず、出馬するや、忽ち「階級闘争」を文藝界に持ち出した。

大阪毎日新聞の上海特派員Mが来て、「英文毎日」の「中國號」に、何か書けといふ。「我等の文藝新運動」といふのを書き、仿吾が英譯した。この、ブルジョア新聞の編輯者は、私の似て非なるプロレタリア文學論を見て、失笑したかも知れぬ。稿料は二十元だった。

季刊の四號に、達夫の「采石磯」、私の「卓文君」が載った。

週報の編輯は、忙がしい。毎號必ず書かねばならず、月曜に原稿を揃へ、水曜初校、金曜二校、土曜三校、日曜出版、まる一日の暇もない。それに、金がない。泰東は、依然月給を定めて呉れず、十元、五元といふ工合に、取つて来るのだ。仿吾も、達夫も、金の問題になると、私に押しつける。御互ひに、随分苦しかった。そこへ、「中華新報」から、一種の好餌が飛び込んだ。

この新聞の主筆、張季鸞は一高の先輩である(譯者註、現大公報主筆)。九月初旬、消閑別墅での同窓會で、彼は、次ぎのやうな提議をした。(一)文學副刊を編輯すること、(二)篇幅は半頁、(三)編輯費一百元、(四)一切干渉しない。達夫、仿吾、陶晶孫、何畏、皆賛成で、私だけ反對した。同新聞は、政日會系の機關紙だし、三百部くらいしか賣れてゐない。我々の週報は、創刊當時三千、第十號を出した今日では、六千に増加してゐる。それで澤山ではないか。それに、人手も足りないし、——といふと、仿吾等は、文學研究會系の「學燈」(時事新報副刊)、その傍系の「晨報副刊」(北京)、民國日報の「覺悟」副刊に對抗して、我等も副刊を持たねばならぬ。それから週報は程度が高く外來の原稿は、ほとんど收容出来ぬ。程度を低くし、日刊でそれを消化しよう。編輯の全權を呉れろといふし、百元の編輯費も入ることだからといふ。多勢に無勢、たうとう引受けることにし、仿吾、達夫、均吾が責任を負ふことにした。かうして、中華新報副刊、「創造日」が産れた。

一〇 前期・創造社の末日

編輯費の百元を、達夫が六十、仿吾、均吾が二十づつ取つた。達夫の創作慾は、この油を得てますます盛んになり、「還郷記」、「還郷後記」、「蘇州煙雨記」等の傑作を、矢張り早やに發表した。「蘇州煙雨記」の第二回が出たとき、北京大學から、達夫のところへ電報が来た。

「陳啓修が、ロシアへ留學する。統計學——一週二時間——を擔當して貰ひたい。」

と、いふのだ。私は反對した。達夫は、社の大黒柱であり、彼に行かされると、季刊、週報、創造日と、三つとも大打撃を受けるからだ。それに、北大には関がある。行つても面白くあるまいと思つた。が、仿吾は賛成した。

「散兵戦を布くべしだ。開拓！開拓！」

「雑誌をどうする？」

「停刊したらいいぢやないか！」

達夫がかういひ出した。

——自分で育てた子を、一刀兩断にするやうな。頭が、グラグラツとした。それでも、

「北京に行つても、書いては呉れるだらう？」

「とても、書けないよ！」

取りつく島もない。

達夫の出發する前後、私の子供は、三人とも病氣してゐた。泰東で送別の宴を張つたが、出席出来なかつた。出帆のとき、辛うじて駆けつけ、手を握つて別れた。達夫は、密柑の籠を呉れて、

「子供にやつて呉れ。」

私は、すんでのことに、涙を流さうとした。

達夫は、出發前、「離散の前」といふ小説を書いて、「東方雜誌」に發表した。創造社の崩壊を豫言したもので、その中に出て来る鄭海如が、郭沫若だ。海如が、季刊を神棚にあげて、「藝術の神」と、稱名して、叩頭するところを描いてゐる。私は、友達の間には、かうした忠厚の長者で通つてゐるのだが、魯迅先生は、疑ひもなく、この見解に反對であらう。

達夫が去つてから、「創造日」は、たしかに悪くなつた。仿吾が、リウマチスの足を曳きずりつつ、執筆、校正をやつてゐた勞は多とするが。

末路！ 仿吾、均吾、私、三人ともくたびれ切つてゐたところへ、政學系の大将、章行嚴（秋桐）が、上海に出て來た。中華新報はその統率を受けねばならぬ。十二月中旬、同社の總理股柱夫先生がやつて來て、「創造日」の停刊を申込んだ。一も二もなく承諾した。第一一號を最後として、「創造日」は死んだ。

「創造日」が死ぬと、創造社も、喪氣の氣を現はして來た。仿吾は、長兄の勸めで、政治方面に關心を持つやうになつたし、私は妻と子供が終に上海に馴れず、日本に歸りたがるので氣が減入つてゐた。鄭伯奇が歸つて來たので、週報をしばらく彼に任せた。

苦悶の日がつづいた。當時の私は、たしかに、人生の岐路に立つてゐたのである。しかし、終に決心した。さうして、妻子を先づ福岡にかへし、滿腹の牢騷を、「岐路」三部曲に發した。恐ろしい力量が、その中にあつた。多くの讀者が、涙を流して呉れた。我等の達夫も、感動して、友誼を恢復した。そのしるしに、「北國の微音」を、週報に送つて來た。

だが、解散の日が、終に來た。その第一の形式は、泰東と分離することである。趙南公は狼狽して、私が百五十元、吾が百元と月給を定め、これまでの分は、泰東の株券にして、私が一千、達夫が六百、仿吾が四百、——これで引きとめようとしたが、問題は、もうそんなことではなかつた。第二の形式は、私の離滬。第三には、私が上海を去つた一ヶ月後、達夫が北京から駆けつけ、仿吾と相談の上、最後の週報誌上で、「太平洋社と創造社との合辦の下に、週刊「現代評論」を發行する。」と、廣告した。二人で死水を取つて呉れたのだ。

福岡で、最後の週報を受取り、この廣告を見たとき、私は、溜めてゐた涙を、皆出してしまつた。思ふさま哭いた。忘れもせぬ一九二四年、五月のある日。

達夫や仿吾は、我等の「ミス創造」が死にかかつてゐるとき、一息で活き歸らせ、いいところに、御縁にやつたと、いふだらう。私から見れば、どこまでも、アノ憐れな娘が若死にして、しかも、屍姦を受けたとしか思へないのである。

作者附記。本書は、創造社の前期を書いた。標題の「十年」とは、やや符しない點があるし、「發端」で示した問題も、まだ解決を與へるまでに行つてゐない。後期の事情は、最短期間内に記録し出すであらう。（一九三二・九・一一。校後。沫若。）（「支那」九三三・九）

廬山の風光と人物

— 王芸生氏著「贛行雜記」梗概 —

長野勤氏と私とが、同志の協力を得て、翻譯しつゝある「日支外交六十年史」は、原著を「六十年來中國與日本」といひ、天津大公報記者、王芸生氏の編述に係る。すでに第七巻を出し、修史の業績を以て、中外を驚倒せしめつつある氏は、一面有爲な新聞記者で、ここにその梗概を譯述する「贛行雜記」は、「國聞周報」に連載され、讀者をして、一讀三嘆せしめたものである。——原序にいふ。「八九年も新聞記者をやつてゐるが、机にかぢりついてゐるばかりで、外に出て探訪するなどといふことは、今度がはじめてだ。社命に依る江西旅行、八月八日發、九月九日歸津、計三十三日。牯嶺滞在二十四日。その他は汽車汽船。河北、山東、江蘇、安徽、江西、湖北、河南七省を經過し汪兆銘、蔣介石、林森、段祺瑞、四元首(先後の別はあるが)各部部长、各省主席、政客、軍人、外交家、學者、同業各方面に亙つて、多くの人と會談した。詳しい日記をつけなかつたので、追憶に依つて書き綴るので、遺漏の點なきを保し難い」と。原文、四六倍判、五號活字で、およそ二十頁。それを二三十枚に纏めるのだから、譯者も亦、剪裁の妥當ならざる點を、讀者に御詫びしなければならぬ。

天津から牯嶺まで

微雨の中を、天津を發つたのが、八月八日午後六時二十分の平滙列車だつた。德州を過ぎる頃、雨はますます降りしきり、ちよつと寒いくらゐる。中國旅行社の滙社の襄理、胡時淵君と同車。關外觀察に行つてゐたさうで、滿洲國の實情を語ることにさぶる詳しい。談後、滿洲國の銅貨と銀貨を一枚づつ呉れた。硬貨はこの二種きりで、一元以上は紙幣だといふ。東北の幣制は、由來複雜といはれたものが、日本統制の下に居然統一せられたと。私が今度の旅行で經過した數省では、紙幣は南北相通せず、一仙銅貨の外は、これ亦省を隔てては通用しない。不便でもあり、損でもある。隨分氣をつけたつもりだつたが、財布の中に通用しない錢

が、まだ大分残つてゐるといふ始末。ただこの一端、すでに人をして悚然たらしめるものがある。

泰山を過ぐる時、九日の清晨五時、夜雨はじめて霽れ、彩雲、山色、天光、蔚然たる奇觀。空前の眼福であつた。車行、江蘇境に入るまで、三省(山東、安徽、江蘇)沿途青葱、高粱の穂はすでに紅く、農夫は取入れに忙がしい。今年の旱災は、長江以北に及ばなかつたと見える。午後八時半浦口着、渡江、下關に入り一泊。十日朝太古洋行の「吳淞」號で溯江、十一日午後四時九江着、自動車蓮花洞まで二十二里(支那里、以下これに做ふ)、籐の轎に乗り替へて十八里、夜の十時に牯嶺着。

黃岡(委員)との會談

一月來の廬山が、人の注目を惹いたのは、華北政整會委員長、黃膺白(魯)先生が滞在してゐたといふことも、その原因の一つである。私は氏と會見六回、詳談二回。牯嶺特區二百三十一號の假邸(段祺瑞の隣家)で、十三日の午前第一回の會談をした。その時の氏の談。

中國の一般人は、黃某が天性の賤骨頭で、甘んじて賣國賊となつてゐると思つてゐる。外に對して、何事をもしてゐないのに、内に對して、種種辯解をしなければならぬ。苦しい。一年來、對内對外、腰のかがめ通しである。腰を延ばすことを知らぬではないが、その善後をどうする? 國家といふことを考へると、そんな冒險をするわけに行かぬ。私の現在の立場は、庭球のボール見たいなものだ。日本人は「黃先生、何も辦法がないのなら、早く罷めたらいいでせう。私等の邪魔にならないやうにナ」と、ラケットで私を南方に打ち出す。そこで南方にやつて来る。逢ふほどの要人が「膺白、いつ歸るのだい」といひまたラケットで私を北方に打ち返さうとする。それでは困るから、「何か辦法を」と話しはじめると、まるで、私が中央に、借金を催促するやうな形になる。こんな風でどうして成績が挙げられよう? 對手方の量は小さく、力は大きく慾は無窮である。國人の眼光は短く、調子は高く、しかも責任を負はうとはしない。私の困難は、これで御察し願ひたい。華北政整會の看板を掛けて、對日外交を辦理してゐると、北方各省の仕事は何でも私に持つて来る。舊直隸省の紙幣整理のやうなことまで、私に

相談がある。が、何にも出来るわけではないか！

陸奥宗光が三國干渉を接受したこと、及び小村壽太郎がポーツマス條約に調印した故事を引いて、慰めたところ、黄氏は「さうだ。私個人の計からいへば、もう北方に歸る理由はない。五十五歳にもなり、小官も大官もやつて来た私である。役人がやりたいわけではない。ただ國家が私に、この芝居を演れと命ずる以上、個人を犠牲にする外ない。顔俊人（應慶）先生は、中國外交に三條の道路があるといつたが、これとて本錢がシツカリしてなくては駄目なのだ。（一）眼光を大きくし、（二）齒をシツカリと喰ひし（三）腹帯をしめる。皆がかうした覺悟をして後、國家の前途、はじめて希望を生ずるのだ」といつた。——總じていへば、一派悲憤の言。

八月二十四日の夜、第二回の詳談をした時に、氏の態度は、大分明るくなった。

「廬山に、大分長くなつたが、ここでは皆がたしかに努力してゐる。中國の前途の、一線の曙光かも知れない。」

黄氏はかういつたが、私もそれには同感であつた。二十三日の晩、楊暢卿（永泰）先生の招宴で、黄氏は私をからかつて、「いつも新聞記者から、裁判官もどきに訊問されるから今日は一つ、新聞記者を訊問してやらう。どうです、王先生。廬山の感想は？」私の回答は、「朝氣が多い」といふのだつた。

汪精衛（光緒）院長

汪精衛（光緒）院長とは、熊天翼（式輝）主席の宅で、八月十三日の晩會談した。先づ熊氏から江西の政況をきいた。政治頭腦あり言語沈着、態度誠懇、新らしい型の軍政家である。汪氏の態度きはめて和易、主として外交問題を談じた。私の「六十年來中國與日本」の編輯に關しても、種種便宜を謀つて呉れることを約した。汪氏の來山は、蔣氏と政務打合せの外、黄郛氏の北歸を促すのが主要目的であつた。その實、蔣氏の病氣で、深談は出来なかつたさうだ。

匡廬の段祺瑞氏

今年江南酷暑、段芝泉（式瑞）先生も、匡廬に暑を避けてゐる。八月十四日往訪。段宅は、牯嶺の高峰である半山に在つて、牯嶺正街から數百尺も高く轎に乗つて白雲を分けて行く氣持ちは、流石廬山だ。先づ梁衆異（鴻志）先生を訪うて紹介を頼み連れ立つて段宏綱先生を訪うた。段氏の甥である。その談に、段氏は上海で胃出血症に罹つたさうで、今は少しいが、大分弱つてゐると。梁氏が私の名刺を取次いで呉れ、やがて藍綢の長衫を着けた段氏が現はれた。先づ國事に對する感想を叩く。

「治國の道は、すこぶる簡單だ。「維持人民、提倡商業」の八字で澤山だ。現在の政令を見るに、一として人民を制取しないものはない。入超は年年増加し、平津一帶の商店の閉店するものが多く、閉店しないものも、損失ばかりしてゐる。これで、國が好くなるか？ 蔣介石先生がこの間手紙を寄越したので、私は「憂樂與好惡、願盡與民同。三章法定漢、民足國不窮。興邦用順守、世民竟全功。提倡興百業、四海揚仁風」といふ詩で答へた。先刻いつた八字と同じ意味だ。政は多言に在らず、力行如何を顧みるべきだ。現在の政府は議論倒れだ。それに人才も少い。第一等の人才は勿論、第二等も少い。蔣先生も二等の人だ。治軍を以て論ずれば、蔣先生は當然人才だが、時を歴る數年、將兵數十萬、尙未だ江西の匪を肅清することが出来ない。中國國事の難、知るべきである。」

そこへ、ボーイが、一籃の桃を持つて來た。蔣氏から送つて來たので、蔣氏の故郷である浙江奉化の桃だ。段氏は喜んで、皆で喰へよう。私も一個喰べた。北支那産のものに比べると小さいが、水が多く味もいい。私はまだ蔣邸で茶を飲まないのに、先づ段邸で奉化桃を喰つた。奇遇。

中國の事、一般人の我見はなほだ深きに因つて、二進も三進も行かなくなるのだ。上海で汪兆銘先生に會つたときかういつて置いた。治國、防水のごとし。大堤一たび決すれば、再び防堵に難い。民國九年曹錕を打つたとき、私は中央の紀綱失墜し以後收拾し難きを知つた。私の「追和徐友梅（徐世昌の弟、故人）自挽詩」の末二句に、「庚申大防決、十載海揚波」とあるのは、この事を指してゐるのだ。民國九年から今まで、十載どころぢやない。しかもなほこんなザマではないか？」

談は、私の「六十年來中國與日本」に轉じ、進んで外交問題、特に中日關係に入る。

「外交は坦白を賞び、詭詐を尙げない。對獨絶交前、獨逸公使がやつて来て、「絶交の噂があるが、本當か？」と尋ねた。私は坦白に「兩國關係からいへば、絶交の理由はない。我我兩人の私交からいつても、絶交以ての外だ。しかし中國は弱國で、今日もし貴國と絶交しなかつたならば、國家の存在が難かしいのだ」といつたら、彼は何もいはず、握手し、旗を捲いて歸國した。中日關係に至つては、一口に言ひにくい。中國はもと亡國の理なし。しかも目前の情形を見るに、亡國の途に向つてゐるやうだ。中國が失敗するのは、「大」の字に在る。日本は却つてその「小」と「窮」とに力を得てゐる。中國は「大」であるから、何も努力しない。日本は「小」且つ窮であるから、それを補ふべく一生懸命にやる。日本人は妄念はなほだ重い。當然失敗の一日があるであらうが、中國人も今のままで愚圖愚圖してゐたならば、前途は樂觀し難い。」

前後三十分以上になるので、老人の疲勞を恐れて、握手請辭した。段氏が内室に入つたので、梁鴻志、段安綱兩氏と閒談してゐたら、ボーイが「馬占山」の名刺を持つて來た。いい機會だから名乗り合ふ。瘦せた小柄な軍人である。——歸途、匡廬は雲に封ぜられてゐた。古人の「遠望寒山石徑斜、白雲深處有人家」の句を思ひ出した。

治河の専門家

牯嶺で、ゆくりなくも一人の佳士に邂逅した。湖南漢壽の人、游允白（養齋）先生である。湖南世家の出で、かつて外交部に服務し、民國十七年濟南五・三事件當時、總務司第一科長だつた。その「濟案備覽」は、正確な情報に根據した信史で、かつて公表しなかつたものだが、今度それを私に貸して呉れることになり、「六十年來中國與日本」の史料とすることを承諾されたのである。氏は現に訓練總監部秘書長の任に在り、朱部長と打合せのため牯嶺に來てゐるのである。十六日、氏の紹介で黃河水利委員會副委員長王芬庭（鳳樓）先生に面會した。廣東人、蔣介石氏と知ること久しく、東江の役には師長であつた。廣西無烟火砲廠の創立者で、工程を善くし、治河に精しくかつてそのために歐米各國を視察したこともある。蔣委員長に呈するのだといふ「治河意見書」を見せられたが立派なものであつた。

（譯者曰く。治河意見書の全文が原著に見えるが、都合に依り割愛した。原文を見たい人は「國聞周報」一一ノ三七「續行雜記」六一八頁を参照されたい。）

麓舎に纏る廬山の雲と雨

牯嶺の旅舎を「清涼飯店」といふ。山に沿ひ屋を築き、高下錯落。居室から長江の流れと、九江市を望見することが出来る。國內の名山のうちで、廬山は高い方ではない。しかし規模はすこぶる大で、北は揚子江に臨み、東は鄱陽湖に接し、嶺や、谷が重疊して、氣象萬千である。雲を以て勝り、水も亦著名。山上雲なきこと少く、東坡の詩にいほゆる「不識廬山眞面目、只緣身在此山中」——その實、山下で廬山を見ても、同じやうに要領を得ないのである。

廬山の奇觀として「雲海」は誰知らぬものもない。大抵、毎日午前には現れるが、半山に横はる白雲層層綿を積み重ねたやうで、長江も、九江市も、忽ち見えなくなる。

十五日の午後四時頃、游允白氏と廊下で立ち話しをしてゐた。話は官場中の清苦の状況であつた。游氏は少將銜の俸給で、月三百元、國難後は七掛、後その八掛になつたので、三百變じて百六十となつたさうだ。給料の滞ることはないさうだが、こんな始末で、貯金も何もなくなつた。などと話してゐると、一片の雲氣が山下から湧きのほり、見るうちに彼方の山、こなたの家を包み、忽ち眼前の花木が消える。それに伴うて、雨となり、二時間も降つた。「空山新雨後、天氣晚來秋」古人の句、我をあざむかずだ。

張群氏と王世杰氏

張岳軍（群）先生は、各省主席中の能力ある人物。王雪艇（世杰）先生は中央各部長中の錚錚。一日中、この二人に面會出來たのは嬉しかった。

張氏が何雪竹（成善）氏の後を繼いで、湖北省政府主席となるや、省人は張文襄（之洞）を以て相許した。張氏は事に任ずること勇

亦文襄を以て自から勉めてゐるといふ。十六日會つて湖北の政況をきいた。その談片。

「一切、前進の辦法を立てた。それに依つて、一步一步やつて行く積りだったが、今年は水災、旱害の打撃を受け、救済の功夫にかへらざるを得なくなつた。」

王雪艇氏が、教育部長となつて以來、中國の教育は、漸く整頓の路に上ることが出来た。氏と十六日午後會談、普通中學が多過ぎ、職業學校が少な過ぎる。かうした畸形状態を取除くことが、今年度の仕事だといふことだつた。

深木靈青中の林元首

林(靈)主席も避暑に來た。宅は、蘆林黃龍寺の後に在つて深叢木菁、きはめて幽勝である。楊永泰氏の紹介で、十七日朝請謁した。牯嶺から蘆林まで八里。沿途松竹が多い。宅に至れば、黃郛、張群、殷同諸氏在り。林廬壁上「鹿野山房」の四字を彫り、小樓一角、構造すこぶる簡單。ただ、門前を平かにし、石でたたんであるのは、廬山では珍らしい。黃、張、殷三氏の後で、二十分間會談した。藍布衫、靑布鞋。襟鬚霜髮、鬚眉半白、仙風道骨、儼として深山の隱士である。中央執行委員丁超五氏等が來たので、辭して歸る。林氏はわざわざ送つて、轎夫が草原の上に寝てゐるのを見て、「オイ、そこで寝るなよ。新らしく植ゑた草なんだからネ」と。我等の元首の平民的なことよ！

林宅を出て、林場といふところで雲霧茶といふのを買つた。それから黃龍寺に遊ぶ。廬山の名利だが、寺そのものは小さい。客室は清潔で、四壁に黨國名人の書畫をかけたつらねてゐる。寺前、大樹兩株、晋人の植うるところといふ。黃龍潭に廻る。今年は雨が少いため、水量が少い。龍潭路を経て歸路へ。

海 會 寺

海會寺は、廬山五大叢林の一。今は、軍官訓練團の所在地となつて居り、通行證がなければ行かれない。幸ひ手に入つたので、七月十八日の朝五時半牯嶺を發した。海會寺まで三十五里、中正路といふ新道が出来て、約五六里も短縮された。中正路に入つて

間もなく、前面の山嶺上に一片灰白色の雲氣が湧き動いてゐるのを見た。暫らく進むと、完全に雲氣の中に突入し、風勁く、麥稈帽は吹き飛ばされさうになり、氣候の冷たいこと深冬のやうである。長袴は濡つてしまつて、ピツタリと身體に喰附いてゐる——これが「朝氣」といふものであらう。

沿途一人も見ない。一個の人家もない。雲氣はまだ濃い、日出でて漸く高く周囲の景物を見るに差支へない。迎面、忽ち一片の巨山を見る。嵯峨勁拔、別に奇氣がある。五老峯だ。山裾を廻ると、忽ち浩渺たる大湖が展ける。鄱陽湖だ。五老・漢陽の兩峯ここに交會し、湖光雲氣相輝映してゐる。萬傾の碧波に、白鴨の浮ぶがごとく、幾點の舟帆を點綴してゐる。これから山勢ますます險しく、上は削壁、下は絶壁、その間を羊腸の小路が走るのだからその恐ろしさつたらない。やつとのことで「復興亭」までたどりついて、朝食にする。この附近、山花が時を得顔に咲いてゐる。桔梗、五爪龍(六瓣白色紅紫色の星點がある)などを取つて轎に挿し、復興亭を出て、獅子口まで下り坂、それからやや平坦になり、一小廟の前に出る。太極觀といふ。茂林修竹。白石寺を経て轎夫の指さす方、古木叢中に廟が見える。目指す海會寺だ。時に九時半。午後二時まで遊んで、同じ途を通つて牯嶺に歸りつたのが、六時だつた。

馬 占 山 將 軍

段邸で、偶然馬占山將軍に遇つてから、もう一遍ユツクリ話して見たいと思つた。大林寺の近くの、大林路三十三號、ちよつとした丘の上で百段からの石段を踏んで上る。八月十五日に訪問したが、留守だつたので大林寺を見た。ツマラヌ寺だが古いことは古く、中國佛教史上に有名だ。太平天國の亂に燒け民國十一年の重建だ。十七日にもう一度訪問したが、又留守。歸途、白樂天の詠桃花處といふのを見た。花徑茅亭、自づから平民詩人留連のところたるを想はしめる。午後再訪、矢張り不在。意地になつて、二十四日朝早く馬宅に飛び込んだら、みたみた。これで宿望を達したわけだ。馬將軍は語る。

「中國人の缺點は、團結し得ないといふ點に在る。もしほんとうに團結一致し得たならば、二人で、一人に當り、十人で一

人に當つても、決して負けない筈だ。日本人はよく團結する。どんな時でも、外に對しては一致してやる。日本人の中國侵略は鼠が牛を喰ふやうなもので、ちよつと見ると困難なやうだが、牛がいつまでも動かなければ、結局鼠に喰はれるやうなことになる兼ねない。」

張(曼良)副司令と(顧維鈞)公使

張漢卿(曼良)副司令は、二十七日午後一時に漢口から牯嶺にやつて來た。午後四時ちよつと訪問したが、張群氏と、熊式輝氏を訪問に出かけるところだったので、詳しく話す暇もなく、三十一日の朝、茶に呼ばれて細談した。同席者は賀衷寒、黎天才兩氏。張氏は外遊歸國以來、大いに健康を恢復し、二年前とは別人のやうで、四川を語り、當年の河南を語り、活潑爽快。

午後顧惠慶大使、顧維鈞公使が到着した。三十一日の朝、雨を肩して顧氏を訪ふ。談、十數分間。

「苦しいところがありますヨ。我々の仕事は、著音器です。レコードがなければ、何と致し方もありません。外交は一種の競争だし、大本營が戦略を決定せず、前線で勝手に戦ふとしたら、その害は不戦よりも甚だしい。今度歸國したのは、政府に方針をききに來たのです。同時に各地を視察し、國內の狀況を明らかにするつもりです。」

北山半日の遊

黃天行先生の作つて呉れたプログラムに依つて、九月二日、北山の半日遊を試みた。午後二時半出發、蘆林から金竹坪へ。路左に「恭親法師の墓」路右に千佛寺がある。寺を出て、牧馬廠を過ぎて數里、鐵船峯に至る。衆山の中に在つて、横伸、船のごとしいふので鐵船といふ。遙かに大天池に對し、石門洞の瀑布を見おろす。この瀧は廬山名泉の一つで、聲、數里に聞える。峰頭の觀亭に留連して、大觀をほしほしに、もとの道に引き返して大天池へと志す。牧馬廠から黃龍寺へ。それから神龍宮の故址、里餘にして大天池に達する。天池寺といふ寺があり、その庭に、水の眞黒い池がある。水は腐つてゐるらしい。これがいはゆる「天池」なのである。本尊は何を祀つてあるのか、見もしなかつた。文殊臺の一室に、明の太祖の畫像がかけられてあり、その前のガラス

の鉢に、「龍魚」が放つてある。やもりの一種である。文殊臺は唐生智の重修するところ。臺上から石洞門を見ると、井戸の底をのぞむがごとく、鐵船峯もごく小さくしか見えない。瀧の音だけはよく聞える。臺を下つて黎山老母亭、その前を捨身峯といふ。地を抜くこと千仞、下、絶壁に臨み、とても恐ろしい所である。それから清涼巖、王陽明の眞蹟がある。天心臺(林生智重修)、天池塔(唐生智重修)、圓佛殿(唐生智重修)、龍角石、眺翠樓、息肩亭、佛手巖、仙人洞(石乳あり、一源泉といふ)を経て御碑亭に出じ、揚千江、南潯鐵路を指點し、息肩亭に引返し、大林路から臨路に就いた。

蔣(介石)委員長の印象

蔣(介石)委員長には、二度會談した。八月二十三日と九月三日、合せて一時間半。私の氏に對する印象は、「虚懷、熱誠、苦幹」の六字を以て概括することが出来る。高位に居り、日に重機を理め、しかも知識を求むる心が盛んである。虚懷と謂ふべきである。國難以來、我等は彼の議論を聴くことが少い。黨國の要人は、由來宣傳に長じてゐる。中に在つて、蔣先生の静默は、責任の重大なるを痛感し、國難に對する熱誠を増加したからであらうと思ふ。彼の日日の工作時間は、十時間を越え、食事の際にも、客を延いて談話してゐる。彼が時時病氣になるのは辛勞に過ぐるの致すところである。張漢卿(曼良)副司令は、蔣氏の生活狀況に關し、「あまり苦し過ぎる。一日中嚴肅な態度で、人に會つたり、事務を執つたり、少しもノンビリしない。個人的興趣といつたやうなことは、念頭にないらしい。彼だからこそだ。外の人にはとても辛抱し切れるものぢやない」と云つた。蔣氏の日常生活の緊張さ加減は、これでも判るだらう。自から奉ずることも簡約、誰でも彼の御馳走になるときは、自宅で少し喰つて行くといふ。蔣氏の宴會といへば、ホンの二三菜が出るだけで、美ならず豊ならずといふ代物だからである。蔣の住宅は、規模が非常に小さく、もし門前に二名の衛士がなければ、要人の住居とは受取れないくらゐ。孔庸之(謙)部長の住宅に比ぶれば全くその十分の一くらゐしかない。孔宅は特區五十一號で、邸内一大松林を成してゐる。内院門前に達するまでに、すでに流汗淋漓たるものがあつた。蔣宅では、容易に升堂入室し得るのである。蔣氏は新生活運動の提唱者だが、住宅の一點から見ても、すでに簡單化を實行してゐる

のである。

彼は政務に對してはなほ熱心である。この點、たしかに天下を以て己が任とする領袖である。黨、政、軍各方面の事に、萬遍なく注意を向けてゐるし、殆んどすべての事を自分でやる。これに對しては、彼の精力消耗を憂ふるものがあり、さうまでしなくともといふ人がある。

しかしかうした「苦幹」の精神が大なる感召力を持つてゐることは疑ひない。張岳軍(群)主席が、廬山に來たのは、湖北省財政の苦況を訴へ、その救済のために、中央に金を要求するためであつた。が、蔣氏に會つて見ると、どうしても切り出せず「彼も苦しんでゐるんだ。自分で出来るだけやつて見よう」といふ氣になつたといつてゐた。黄(郛)委員長は内外の環境に苦しめられ、滿腹の牢騷を蔣に吐きかけるつもりで廬山にやつて來た。しかも、何度も會つたがたうと言ひ出せず、勇を鼓して北歸の決心をつけたのである。張漢卿(愚良)副司令も、會ふは會つたが、「彼を煩はすに忍びぬ」といつて、何も要求せずに歸つて行つた。——我が師陳鐸士先生の如きも、一月に六百元の舒適な生活を拋棄し、住み慣れた北平を離れ、來つて開墾に従事してゐる。師は六十歳に近い人である。この外、これに類した例が多いが、私はそれを偶然でないと考へる。その背後に大なる精神感召力があるからである。この力は、小にして個人を正し、大にして興邦建國すべきものである。我等の國家は、現在非常に艱難、嚴重な地位に立つてゐる。復興か? 滅亡か? 問題の回答は、遠からざる將來に於て、事實を以て説明しなければならぬ。誰か能く民族、國家の滅亡の危機を打開して、復興の途に上せ得るか? 我等は信ずる。この萬鈞の重擔は、これがある一個の領袖のみに期するは無理である。我等全體が彼の如く緊張し、奮闘する外ない。民族、國家の前途、かくてやや少しく希望を生じ得るのであらう。

牯 嶺 雜 觀

牯嶺商店櫛比、路人の往來多く、二三等の城市であり、山の上とは想へない。しかし石階の多いこと、籐の橋の多いことは流石である。

廬山の巡査は大抵二十歳の青年で、夏だつたから白色の制服、白色の帽子、キチンとしてゐて、しかも和順である。路を問うても、丁寧に教へて呉れる。天津租界の巡捕に比べると、天淵の別がある。女の巡査もあるが、内勤専門である。私は、廬山の警察は全國の模範としてもいいと思つた。

廬山は新生活運動の策源地なので煙、酒、賭、娼は大分跡をひそめてゐる。ただ應酬場裏には、まだ煙、酒を絶つに至らない。公開の賭はない。娼は絶無である。巡査は一面新生活運動の糾正者で、(一)ボタンを正しくはめること、帽子を直すにかぶること、(二)煙草を吸つてはならぬこと、(三)左側通行、の三つを八釜しくいふ。

役所に人が少くて、仕事が多い。電報局、郵政局などに行つて見ると、朝十時に私の電報を受附けた人が、午後二時に行つても夜の十時に行つてもやつぱり仕事をやつてゐる。休む時間など、ありさうにない。

郵電検査の嚴密苛細なこと、新聞記者には第一の苦手だ。前述した顧大使の談を打電したとき、「我我は蓄音機みたいなものだ。レコードがなければ唱へない」との一句が刪られた。馬鹿らしくて御話にならない。牯嶺の電報局で通つたものが、漢口電報局で抑へられたことも二度ばかりあつた。交渉の末、やつと許して貰つたが、何と、天津まで三日かかつた。その一つは黄郛氏の談話で、政府のための有利な宣傳を内容としたものであつた。それを抑へるのだ。まるで追ひはぎみたいなやり口だ。

元來避暑地だつたが、今では政治の中心地となり、人口も三四萬になり、輻夫だけでも四千人あるといふ。もとはキレイな土地だつたのだらうが、今はとても汚くなつた。金蠅が出て來るのだ。殊に夜字を書いてゐると、群を成して襲つて來る。テンド防ぐ方法がない。

歸 路

九月三日に、仕事が大體終つた。三日ばかりユツタリして、見残したところを廻るつもりであると、天津の本社から歸れといふ電報が來た。残念だが割愛して、四日午後二時、雨を肩して下山の途に就き、蓮花洞で自動車に乗り換へ、四時九江着、一泊。汚

ない町で、冷落しかも雑沓な舊城市だ。九江大戲院といふので「漢調」の芝居を聞いた。二簧に近く、調子がそれより高い。一元で小花瓶一つ買つて来た。

五日太古洋行の「武昌」號で出渡、六日午後一時漢口着、大公報支社で休息の後、漢陽に遊んだ。もとは煙突林立のところだったが、今はまるで煙を見ない。市街民舎、簡陋の至。商店らしきものなく、ところどころ茶館を見るだけ。龜山から歸元寺へ、乞食の一大群に會ふ。院内一大池に無數の龜がゐる。

夜、長樂大戲院で漢調を聴く。吳天保と云ふ役者の「振海歸北」。唱もしくさもなかなかいい。漢調は、前にもちよつと云つた通り、二簧より音が高く、二個音階以上高い。唱ひにくいことだらう。夜陶陶旅社に泊。

七日武昌に遊び、蛇山に登つた。三鎮の形勝、雄偉。黃鶴樓は、今では一個のツマラヌ茶館と、没趣味きはまる新建の樓があるだけ。下りて武昌の市街を漫歩した。街市整齊、空氣恬靜。

漢口は人多、車多、花様多。現代化した輕薄な街。漢陽は破産に近き中古農村社會。武昌は中流の令嬢みたいな街。七日夜十一時平漢鐵路で北上。夜中に大風が出て来て、顔をひつかいたのには驚いた。八日夜十時頃黃河鐵橋を過ぎた。九日晚七時北平着、東車站で「平榆車」に乗り換へ、夜十二時天津に歸りつた。(支那一九三五・一)

廖仲愷の暗殺者

孫文が、晩年親近したのが、朱執信と廖仲愷。中にも廖は、孫の最後の政策であつた「聯俄容共」政策遂行のために、目覺しい活躍を試み、いはゆる『ヨッフエ、廖仲愷熱海會談』で、永久に黨史に残るであらうと思はれるし、——孫文歿後、汪兆銘、共に國民政府を背負つて起ち、生きてゐたら今日行政院長は動かぬところと思はれるのだが、不幸、孫歿後五ヶ月で、暗殺された。使喚したのが胡漢民。當時國民黨右派の御大。暗殺に當つたのが、ここに私が述べようとする朱卓文である。

どうして今頃、こんなことを書く氣になつたかといふと、その朱卓文が、去る五月上旬に捕まつて、陳濟棠に銃殺されたからである。その後間もなく、胡漢民が外遊したし、鄒魯が辭職したし、西南政局への影響が、案外少くないらしいのと、朱が廖仲愷暗殺者として、世間に知られてゐながら、中山縣の土地、建設兩局長に納まつてゐたり、秘密結社をこさへて、その「山長」(葉主といふがごとし)になつたりしてゐたといふ、流石に支那だと思はれる面白さが感ぜられるからである。一九三五年五月十七日の「大公報」に、「朱卓文案の詳情」といふのが掲載せられ、「國聞周報」(週刊)や「老實話」(旬刊)にも、朱案についての興味ある解説が載つてゐるので、それらに據つて、本文を綴ることにしたのである。

朱卓文は廣東中山縣の出身で、アメリカに出稼ぎし、それからホノルルに渡り、そこではじめて孫文と知り、およそ孫の起した革命の役には一として従はざるはなかつた。この點では、今生き残つてゐる國民黨の連中のうちでは、ほとんど比肩するものがない。しかしその人と爲りが爽直ではあるが、浮躁であり、よく人と衝突するので、孫は、彼の膽力を賞しながら、一面いつも叱り飛ばしてゐた。民國になつてからは、中山縣長、兵工廠長、旅長、航空局長、東路討賊軍總司令などをやつた。飛行家としては、隨分古く、その娘の慕非嬢も、女流飛行家の第一人者であつたが、今は故人である。朱は又民軍を編成すること三十餘回といふレコードを持つてゐる。

一九二五年の八月、彼は胡漢民に煽動され、左派の首領廖仲愷を暗殺した。自分の部下の軍隊を率ゐて、廖を銃殺したといふのだから凄い。國民政府はこれに對し、五萬元の賞金を懸けて通緝令を發したので、流石の彼もやり切れず、逃げ廻つてゐるうちに運悪く、大盜雷公全に捕まつた。

雷公全は廣東第一の大盜で、閩匪王といはれた悪黨である。朱卓文ほどの男も、彼にかかつてはまるで無力で、アハヤ殺されやうとしたのであるが、そこへ救ひの女神が現はれた。卓文の娘の慕非（一に飛につくる。）で、身代金五萬元のうち二萬元を工面し雷のところへやつて来た。慕非は前述した通り女流飛行家であるが、一面非常な美人だったので、雷公全は垂涎三丈、金は二萬元で我慢するといつて、彼女を寨中に留むること一ヶ月餘、そこで父娘を釋放した。

その後六年ばかりは、香港、澳門に隠れてゐたが、一九三一年になつて、もう餘熱はさめたらうと、石岐に歸つて来た。もともと廣東の綠林とは、往來があつたので、再び彼等と聯絡し中山縣長をねらつたが、西南元老の第一人たる唐紹儀が、縣長をやつてゐたので、齒が立たなかつた。そのうち唐が何かで失敗し、縣長を民選することになり、彼も公然出馬したが、第二位に落ち、梁鴻光が當選した。しかし梁も、朱の實力を無視することが出来ないで、朱に同縣の土地局長と建設局長の職を與へた。世間周知の暗殺犯人が、役人になるなど、ちよつと珍らしい事例である。

中山縣に覇を稱した朱卓文は、ここを根據として、西南の政界に活躍を開始しようとした。その計畫の大様は、もとの緣故をたどつて、胡漢民一派の元老派をかつぎ、秘密結社及び土匪軍をつくつて、先づ陳濟棠を倒さうといふのである。陳濟棠は廣東の實力者であり、陽には胡漢民等の元老派を敬してゐるが、陰ではこれを遠ざけて居り、西南派が完全に一致出来ないのは、全く陳の態度に因るのであるから、朱は先づ陳を除かうといふのである。この計畫には胡漢民、鄒魯が關係してゐるとまで噂された。

朱はこのために南海、番禺その他の地方の土匪と聯絡し、香港、澳門、廣東各地に聯絡機關を設け、石岐を大本營とし、本年三月、各地の領袖を香港に會して、幹部會議を開催し、その結果朱が山長（義主）に公選され、その下に仁、義、禮、智、信の五組を

設け、各組に正副組長を置いた。彼自づから仁組正組長となり（程天國が副組長）袁帶が智組正組長になつた。袁は綠林出身で中山縣がその繩張りである。武器がなくては、といふので、鄒魯から金を貰ひ、袁の手で、香港、澳門から中山縣に密輸した。それから別動隊として、大同救國軍といふのをつくつたが、その本據が廣東公安局に手入れされ、それに依つて、朱等の計畫が、スツカリ陳濟棠の耳に入つた。「疑へば必ずこれを殺す」といはれてゐる陳のことで、聲色を動かさず、ひそかに教導師のうちの梁公福團を石岐に派し、朱を監視させてゐた。さうして何か陰謀の證據はないかと探してゐるうちに、廣東安良里の鄧法記といふ店で、朱が、亭の形をした徽章一萬個を注文したことが、密偵の報告で判つた。その徽章の正面に「仁義禮智信」の五字が刻してあり、洪門五子（後述）の流れを酌むものであることが明白なので、ここでいよいよ朱を捕縛することになつた。先づ公安局長何榮が、徽章の注文に當つた李烈（永安人壽保險公司の事務員）を捕へて詰問すると、百個十五元の約束で、朱から依頼されてつくつたといふ答へ、何は、そこで朱にこのことを尋ねてやつたところが、「これは合法團體の徽章で、他の意味はない。いづれ自分で廣東に出掛けて、詳しく申上げるが、取り敢へず鄧法記の主人を釋放して貰ひたいといふ」朱からの返事であつた。そんなアマイ言葉でたまされるやうな陳ではない。「いよいよ斷行！」の密令が、時を移さず梁公福に向つて發せられた。

五月六日、梁公福は、何喰はぬ顔して、朱を、石岐第一の料理店である張添記酒店に招待した。正客が朱で、相客が中山縣財政局長吳志強、公安局長李紹欽、紳士鄧仲楚の三人である。朱は夕方の六時頃やつて来た。さうして、暫らく飲んでゐるうちに、ボーイが下から上つて来て、「朱先生、電話です。」と呼び出し、階下に降りたところを、ピストルを持った兵士が出て来て、拘引狀を示して捕縛した。梁は知らぬ顔して、「朱君は急用が出来て歸つた。」と報告し、宴會を終つた。吳等はアトて朱の捕縛を知り、梁のところへ貰ひ下げに行つたが、「上からの命令だから、仕方がない。」の一點張りで、要領を得ずに歸つた。

朱の副將である袁帶は、長堤の永樂酒店に宿つてゐたが、ここには副團長の張等が、一中隊の兵を引連れて押しかけ、袁の護衛兵十餘人の反抗を物ともせず、袁を捕縛して仲愷に連行した、いひし落たが、朱捕縛のために同艦を石岐に差し廻して置いたの

である。皮肉にも、朱は、自分の暗殺した廖仲愷の名を取つて命名された軍艦に乗せられて、廣東に護送されたのであつた。

朱・袁の外、海軍司令部上校參議大鵬陸戰隊主任蔡騰輝も、同日捕縛された。彼も綠林出身の男で、朱の一味であつた。

朱捕縛の報を聞いて驚いたのは、廣東にゐる元老派、特に鄒魯（中山大學校長）である。胡漢民と電話で打合せた上、即日陳濟棠の許にかけつけて、極力生命乞ひをした。陳は閉口して、「何聲（公安局長）に任せてあるから、ソツチへ行つて貰ひたい。」と、鄒を送り出し、電話で梁公福に命じ、停車場附近で銃殺させてしまつた。時に五月七日夜九時。

袁帯は殺さないで、口を割らせた。その結果、林樹巍、梁泛舟等三十餘人が捕縛され、元老派の下級幹部は相率ひて香港に遁れ豫想外の大クーデターとなつた。袁の白狀したところに據ると、事態は、胡漢民の新國民黨と、李濟深の生産黨とが、一緒になつて陳濟棠を打倒し、廣東に救國政府を建て、胡が政治を、李が軍事を、主宰するといふやうな、陳に取つてきはめて恐るべきものがあつたのだといふ。話半分としても、數年來同床異夢の關係にあつた陳濟棠と元老派は、今回の朱卓文事件を契機として、完全に分離したといへる。何よりの證據は、胡漢民の外遊、鄒魯の辭職である。

元老派の廣東からの退却は、陳濟棠の勢力を絶對ならしめ、白崇禧、李宗仁等廣西派の勢力にも多大の影響があると見られる。陳濟棠の本音は、廣東さへ保全出来れば、他は措いて問はないのであるから、條件さへよければ、蒋介石と妥協でも何でもやるだらうし、蔣もそこにつけ込むだらうし、當分西南派の反蔣旗擧げのごときは、夢物語となるであらう。

謝興堯といふ人は、近着の「國聞周報」誌上で、「由朱案、談到洪門、及其五子」と題し、朱卓文事件を面白く解説してゐる。なかなかうまく書いてあるが、長文なので、ここには譯載せぬ。好事の士は、原文（同誌六月三日號）に就いて見られたい。ただ謝君が、その中で、

「朱卓文の殺されたのは、彼が秘密結社を組織し、自づから洪門を稱したからである。これは清朝中葉の三合會、三點會、天地會の遺傳であるが、——想はざりき、太平天國及び辛亥革命を經過した今日、此種水滸傳的集團の思想が、まだ盛んであつて夢へな

いのであらうとは。見るべし秘密結社の組織の、現在社會に於ける、裏面の潛勢力甚だ大であり、且存在價值あることを。これは政治問題であるばかりでなく、一個の重大社會問題である。」

と、述べてゐるのには、私は全然同感である。青帮、紅帮の活動はいはずもがな、目前蒋介石の藍衣社あり、朱卓文が洪門を夢想する、また故あるかなである。畢竟水滸の魄力、古今を貫ぬいて衰へざること、支那社會の實情であり「藍衣社は、日本人がつくり出したものだ。」などいふ通説は、窮するところありと覺るべきである。朱卓文一案、當面支那時局の絶好脚註、筆墨を浪擲した所以である。（支那一九三五）

張學良行狀記

突如拘引

今夕は何の夕ぞ！

群星、依然、申江を照す。

林雪懷、恨として往事を述ぶ。

故京を轟動せる「大華影星案」の前後後果。

胡蝶と情縁未だ盡きず、未婚の名義猶ほ存す。

一九三二年八月八日の上海「時事新報」は、四段抜きの大みだしで、北平の情魔王を敵役とし、男明星林雪懷を主人公に、女明星吳素馨を女主人公に、その他大華影片公司に屬する男女優、それと競争相手の明星影片公司の女優「支那の栗島すみ子」胡蝶等を陳ねた、一棒の公案を暴露した。「今夕は何の夕ぞ。」と横に一號活字の輪廓入り。群星とは、大華公司のスター連のことだし、申江は、いふまでもなく上海を指すので、「依然」の二字に、フアンを持つ無限の愛着を表はし、「林雪懷、恨述往事。」の初號活字の組合せもよく、流石は、文字の邦である、支那新聞の標題満點いかなるスクヤンドルの掲發かと、讀者の眼をみはらせたのであつた。以下「時事新報」に現はれた、林雪懷の自述である。

私達、大華影片公司専屬の男女優、すなはち女優では蘆翠蘭、吳素馨、范雪朋、趙靜霞、男優では朱飛、陳秋風、秦哈哈、それに私、六十餘人の一行が、座頭蘆翠蘭嬢に率ゐられて、上海を出發したのは、去る六月十四日のことでした。例の「啼笑因縁」ですネ。あれの外景攝取といふわけで、それに、無價行つたんぢや馬鹿馬鹿しいといふので、同じ劇を舞臺でもやつたんです。何しろもう大分買り込んだ脚本で、腕利き捕ひの一座のことで、天津の光明電影院などでは、とても凄いい人氣でしたよ。

北平に乗込んだのは、忘れもせぬ六月の十八日でした。宿は、東長安街の東安飯店。御存知の通りチャチな宿屋ですが、北平飯店といふやうな贅澤もいへず。まあこれで我慢しろといふのでその二十室を占領し、ひとまづ落付きました。支關に一等近い二室を事務室にし、蘆翠蘭と顧寶蓮、吳素馨と吳素素姉妹、秦哈哈、張雙宜、陳野禪の三組の夫婦づれが各一室づつ、文漁民、范雪朋夫婦が一室、陳秋風と私が一室、朱飛がボーイを連れて、事務室に近い一室、といふ工合ひに室割を定め、出入とも事務室に届け客人も先づ事務室に通すといふことにしました。エタイの知れぬ人間を出入させないやうに、一通り手筈はして置いたのですが、北平飯店のやうにフランスの治外法權の下に在るわけではなし、支那官憲の手の直接届く東安飯店などに宿つたことは、返す返すも失策だつたと、今では思へるのです。

十九日に班主蘆翠蘭の名で、各方面の名流を、飯店に招待しました。盛會でした。新聞なども、大分提燈を持つて呉れました。さうして二十三日から二十九日まで、東安門外の眞光大戲院で、書夜二回「啼笑因縁」を演り、大當りを取りました。つづいて三十日から七月六日まで、中央大戲院で續演することになり、これも好成績で、七月三日までは滞りなく打ちつづけました。その晩、恐るべき事態が持ちあがつたのです。

ここでちよつと申上げて置きたいことは、北平着以來、どうしたわけか、他のスター連に立ち超えて、ひとり私の名と、私の動靜とが、北平人士の注目的になつてゐたといふ、その事實です。あとから考へると、ははあ成程と思ひ當るわけで、北平人士が私を注目してゐたのは、實は手に汗にぎつてハラハラしてゐたのかも知れません。それを、「大分人氣があるな。」と、いささか得意になつてゐたことは、我ながらハガユイ次第です。

しかし、得意になつたといつても、決して思ひ上がつたわけではなく、悪い遊びもせず、北平での有名な撮影の大家、樂元可君と、カメラをいぢつて暮してゐたやうなことでした。すると或晩、君は林子宜ぢやないか。」といつて訪ねて來た男がありました。王紹亭といふ、ミニチュア・ゴルフをやつてゐる男で、弟の小亭（中報のカメラマン）の紹介状を持つてゐるので、信用しないわけに

も行かず、二度ばかり、彼の経営するゴルフ場に行つて、閉つぶしをやりました。が、この王君が、實はスパイだったので。七月三日の晩、中央から歸つて來ると、王君が追つかけて訪問して來た。見ると一人の女を連れてゐる。賈素珍といつて一座の吳素馨の知人だといふことでした。朱飛の室(前につた通り、支那から一等近く、事務室の隣りにあるのです)で、二三十分も雑談した後、急用があるからといつて慌だしく歸つて行きましたが、賈は、早素馨に會ふのだといつて残つてゐる。と、五分も経たないうちに、偵緝隊が二十人も列をつくつて闖入し、アツといふ間に私達を縛りあげてしまつた。吳素馨は入浴中でしたが、衣服を着ける間もそこ／＼に、引張つて來られました。さうして有無をいはず自動車に乗せられ、東城の報房胡同に在る偵緝隊第三分隊に連れて行かれた。私と吳。それに朱飛、陳秋風、秦哈哈、飯店の會計李晉礎、ボーイ善成の七人です。奇怪なのは、賈素珍で私達の捕まへられたのを平氣で見てゐたばかりでなく、冷笑さへ浮べてゐました。王紹亭としめし合せて、私達をヒドイ目にあはせた女スパイ。上海の姉御連の口癖ぢやないが、「殺千刀」なのです。

分隊部では、しかし思つたほど虐待を受けませんでした。吳素馨と蘆翠蘭(四日捕縛)が一堂。私と朱飛、秦哈哈、陳秋風の四人は梁班長が室を空けて呉れ、最上等の室に起臥することになりました。梁は温厚な男で、氣の毒だ、大したことはない見込みだからさう心配するなといひひひ、色々斡旋をして呉れました。

その原因は不明

翌くれば四日、皆の在命二十五六元を梁班長にわたして、色んなものを買つて貰ふことにする。午後隊長の前に呼び出される。張といふ、五十がらみの老人で、梁班長にもまさつて温厚な人柄。

上からの命令で、暫らく諸君を御預かりします。小さな荷門で、不行届きの段は、我慢して貰ひたい。出來るだけのことはするから、あまり心配しないやうに。若しかすると、ここにゐた方が、外にゐるより危険が少いのぢやないかと思ふ。私はこの隊に三十年も關係してゐるものだから、決して悪いやうにはせぬ。隊は強盜や土匪を捕へる機關で、諸君のやうな知識階級は、はじめて

の御客様だが、これには深いわけがある。時世時節ぢや。まあ氣を落さずに暫らく辛棒して貰ひたい。

といふ話。地獄に佛とはこのこと。私達はサッカー隊長に心服してしまつて、泣かんばかりになつた。十五日間も留置されて、少しの苦痛も感じなかつたのは、全く隊長の賜物で、今でも遙かに張隊長に厚い感謝を捧げたく思つてゐるのです。

かうして拘囚生活がはじまつた。しかし張隊長の聲明通り、私達の行動は、きはめて自由であつた。ただ庭に出ると、兵士が跟いて來るだけのことでした。閉つぶしに、兵士等と拳術の試合をやつたりした。この方は子供のときから私の自慢で、兵士三人ぐらゐは、一度に對手が出來た。塀を越えて逃げるくらゐ、朝飯前であるが、一人だけ逃げて仕方はなし、それに張隊長の厚意を思へばそれなら、毎日ボヤボヤしながら、六日間を送つた。はじめの二十何元かは、それで無くなり、一文なしになつたが、アトは張隊長が、全部支辨して呉れたとのことでした。知人の少い北平の獄内で一文の金もなくなつたときの心細さは、全くお話にならないものでしたよ。

張隊長の言葉

第八日、すなはち七月の十日に、蘆翠蘭と吳素馨が釋放され、やや愁眉を開いたが、それからかへつて出獄したい念が募り、妄念に悩まされましたよ。一體何のために捕まつたのか。張隊長に尋ねると、

「君等が北平に着いた日に、匿名の告發狀が五六通あつた。二三日経つと、公然出頭して告訴したものがあつた。上からも逮捕の命令があつた。しかし君等は藝術團體であり、團員は皆知識階級だから、即時逮捕を差控へ、ただ探偵をつづけて置いただけだ。探偵の報告で見ても、君等が法律に背いてゐるものではないことは判る。それで逮捕の念を一先づ打消したのだが、上からの命令はますます急。やむを得ず逮捕したことまで打ち明けたら、大抵分りさうなものだ。原因を外にだけ求めず君等自身の中求めて見たらどうか判りはせぬかと、私は思ふのだが。」

と答へるだけで、アトは笑ひに紛ぎらしてしまふ。どうも解せない。その晩も寢ずに考へたが、或はと思つたのは、明星と大轟

の繫争問題になつてゐる「啼笑因縁」の撮影権の問題、それと、婚約のことで裁判沙汰になつてゐる私と胡蝶女史との問題、この二つだつた。しかし撮影権の問題は、いづれ法律の判決が下されるのだし、胡蝶とて、まだ未婚の夫婦である以上、私をこんな殘酷な目に合はせるわけもないし、結局、何か外に、私の想ひもかけない原因があるのだらうと、思ひあきらめたことでした。かうした煩悶のうちに、又一週間はかり経つて、十八日、私と陳秋風、秦哈哈の三人が釋放されました。朱飛だけは何故か數日遅れるといふことでした。釋放には間違ひないといふので、三人だけ先きに歸り、飯店に残つてゐた四五人の者と一緒に、十九日ケチのついた北平を後に、二十二日に歸郷したやうなわけです。イヤ、ヒドイ目に遭ひましたよ。黒暗北平といふことは、噂にも聞いてゐましたが、南無阿彌陀佛、わが身の上とは、想ひもかけませんでした。

事件の真相をあばく

林雪懷の自述はこれで終つてゐる。スキヤンダルの輪廓は、これでも判らぬことはないが、結局、何で彼等が捕縛されたか、その點チツトも現はれて來ない。林雪懷は人氣商賣、その談話を載せる「時事新報」は、人も知る通り蔣介石の機關新聞。これ以上のことの書けるわけがない。北平、天津の新聞に至つては、なほさらのこと。そこへ來ると、廣東の新聞は強い。「小張誘姦吳素馨不遂」と直書して、北平の情魔王、張學良の面の皮をヒン剃いでゐる。筆致をそのままに「廣州民國日報」(七月二十八日附)を左に譯して見る。

あまり前のことではない。北平、天津の諸新聞は大華影片会社の演員吳素馨、林雪懷、盧素蘭、朱飛の捕縛を報じたが、逮捕の原因については、張學良の勢力に阻まれて、その真相を暴露したものは、一つもなかつた。その實、この事件こそは、「江山を愛せず、美人を愛す劇の主人公たる張學良の、二の替りの悪作劇であつたのだ！」

張の財を貪り色を好むことは、狗肉將軍張宗昌とともに、第一洗人物を以て稱すべきものがある。好色度なき彼は、滿身の梅毒で、注射の跡だらけだといふ。彼の情婦として、朱五小姐(袁世凱時代の國務卿、朱啓鈞の娘)趙四小姐のあることは、誰でも知つてゐるが、映畫スターの楊西梅、胡蝶なども、北平に行つたとき、順承王府に連れて行かれ、呂布貂蟬鳳儀亭の濡れ場を演じたことも、知る人ぞ知る。馬君武の詩に「趙四は風流、朱五は狂、翩翩たる胡蝶は最も當行、溫柔郷、是れ英雄の塚、那の管りかあらん、東師の滯陽に入るに。」とあるは、けだし紀實で、一字を替へる必要もないのである。就中胡蝶誘姦案は、國內の新聞紙の記載するもの最も多く、その後胡蝶が新聞に正誤廣告を出したに拘はらず、誰もそれを信するものがない。けだし、順承王府では、張が、巨額の金を胡蝶に使つて、彼女の温情を謝したと明言してゐるからである。

最近大華影片会社の男女優が北平に行つたが、その中の女優吳素馨は、支那の映畫界では、第二の椅子に据わる流行ッ兒、學良の食指忽ち動き、先づ順承王府の宴會に招待したが、楊西梅や胡蝶の先例を知つてゐる吳は、碌なことはあるまいと思つて應じない。さらばと、萬金を以て意のあるところを示したが、吳はます／＼恐れて出ない。「好不識擡學的吳素馨」と、支那芝居の敵役もどきの臺詞を唸つてゐるところへ、上海の胡蝶から、一通の電報が張の許に届いた。それには、不白の冤あり、林雪懷を懲らしていただきたいとあつたといふ。

名女優胡蝶と學良

ここで、胡蝶のことを、ちよつと補つて置く。彼女は支那最初の有聲影片「歌女紅牡丹」の完成に依つて劃期的な成功と人氣とを獲得し、一躍銀幕の女王と讃へられた女優である。今は新進スター陳玉梅の人氣に押され、栗島すみ子格となつてゐるが、ともかく支那の代表的映畫女優であり、はじめ明星会社に屬し、今は自から胡蝶プロダクションをつくつてゐる。林雪懷はその未婚の夫だが、林には他に愛人が出來て當時離婚訴訟が起つてゐた。さうして學良と彼女との關係は、正に前述した通りであつたのだ。吳素馨のことがあり、胡蝶の電報があり、その上、明星会社の總理張石川から、大華公司演員に依る「啼笑因縁」の北平での開演を阻止していただきたいといふ電報もあつた。これは、林雪懷の自述にもあつた通り、「啼笑因縁」の撮影、上映権は、明星、大華兩公司をめぐつて、法廷で繫争中であつたからである。張には、張石川の依頼を、相當聽いてやらねばならぬ理由があつた。とい

ふのは、胡蝶事件のとき、張石川は學良のために辯護し、胡蝶にはそんなことはなかつたと、辯明大いにつとめたからである。もうこれだけで充分だが、まだある。大華会社の總理顧無爲は、胡蝶事件をアテ込んで、「江山を愛せず、美人を愛す。」といふ劇を演じ、盧翠蘭を女主人公に、學良の胡蝶誘惑を如實に表現した。學良弱つてしまつて、大金を顧に送つて停演を求めたところ意地の悪い顧は、金を受取つて置きながら、藝題を「不愛江山」と改めただけで、同じ内容の芝居を、オメズ隨せずつづけたといふ事件がある。その主人公に扮した盧翠蘭が、今、班主として來てゐるのだ！ 學良の肝臓玉は破裂した。そこで公安局に命じて風化を傷つくといふ罪名で、林雪懷、吳素馨、盧翠蘭はじめ、一行十數人を一網打盡に及んだのであつた。

學良強弱して釋放

かうした経緯は、新聞にこそ出ないが、誰にも推測出来る。林の自述にどういふものか自分が北平人士の注目的になつてゐたといつてゐるが、それは取りも直さず、學良が、色んな恨みのあるスター連を、どう處置するかと、手に汗にぎつて看つめてゐたことを意味する。いよいよ捕まつたとなると、これ亦口こそ出さないが、無言の非難が學良に集中する。新聞も同情的に書き立てる。學良を露骨に、非難しないが、ともかく事を大きく書き立てる。公安局の役人にしてからが、脇銃砲ややきもちの尻拭ひは氣が進まない。林の自述にある張隊長の氣持ちが、程度の差こそあれ、偵緝の任に當るものに共通となる。馬鹿でない學良、やり過ぎたかかと、すこし後悔してゐるところへ、上海青帮の大親分、杜月笙から、即時釋放の依頼電報が來た。青帮といへば、上海の裏面に暗躍する、支那第一の大ギャングで、事實上上海を支配してゐる暗の帝王だ。蒋介石だらうが誰だらうが、上海を手に入れるには、どうしても、青帮の助力に待たねばならぬ。その首領「支那のアル・カポネ」杜月笙からの電報だ。

「顧無爲の運動のためと思ふが、青帮と日本には勝てぬ。」といつたかどうかは、聞き洩らしたが、杜の電報を見るなり、あわてて釋放を命令したとは、學良このころ、少なからず器量を下げた形である。

正に彼はジールとハイド

かうして、さしも一世を轟動した「大華影屋案」も、廣州民國日報の直言直書を唯一の産物として、すべてが有耶無耶の間に葬り去られたのであつた。

ロケエションに出て來た映畫女優を口説いて、脇銃砲を喰つた口惜しきまぎれに一座十何人かを引つくり、十五日間も未決にはうり込むといふやうなことが、文明國で考へ得られるだらうか。それが一九三二年に起つたのだ！ 七月といへば、リットン調査團も、北平あたりにゐた筈。こんな大それた人権蹂躙事件を見落すとは、宜なるかな認識不足の稱あることや。支那なればこそといとも簡単に片附ければそれまでだが、いかに支那なればとて、こんな懲當をやつて退けるのは恐らく學良くらゐのものであらう。勿論、蒋介石の白色テロル、共産軍A B團(アンチ・ボリシェヴィキ)斬殺、同じく、赤色テロルの一例である顧順章一家暗殺事件など、慘酷な例は多いが、一女優のためにあんな騒ぎをしでかすなどは、學良ならではの出来ぬ懲當だ。一方こんな悪作劇を演じつつ、他方リットン調査團を手玉に取り、日本の大陸政策から説き起し、中村少佐事件、萬寶山事件などに独自の解釋を附し、九・一八事件に對する措置など、いかにも自己に有利なやうに説明づけ、リットン卿をして、「自分の會つた支那の政治家では、張學良が第一人だ。」と叫ばしめたとは、薄氣味の悪いやうな頭腦の牙えだ。二重人格ジール博士とハイド氏、それを私は想ひ出す。

秋刀村正の切味

北平西城の宏大な一廓、それが順承王府である。規模は紫禁城に及ぶべくもないが、それを除いては、二と下らぬ大邸宅。父、作霖が大元帥として、死の直前まで住んでゐたこの記念の地に、情魔王張學良が、もう二年半も頭張つてゐる。起床が午後の五時夜の十二時に晝飯、朝四時が夕飯といふ、まるで土鼠のやうな生活。その間に、一日八十本のモヒ注射、ダンス、麻雀、女色といふ放埒な生活振りをつづけてゐて、疲れないのは不思議である。夏本草二氏に據れば、時には朝の五時に起きて、寒風をきつて南苑や通州まで出掛け、軍隊の檢閲をやるといふ。時局が切迫すれば、飛行機で漢口あたりまで飛ばすといふ。夏本氏は今北平に住んでゐる人であるから、嘘ぢやないと思ふ。現に、我々が知つてゐることだが、先日南京に飛行機を飛ばせ、蒋介石と何か相談

をやつて、又北平に歸つたといふ事實がある。かうした元氣はどこから出るか？ モヒと女である。

モヒがいかなる影響を人體に與へるか、醫者でないからよくは知らぬが、普通人には判らぬ働きを、頭腦に與へるに相違ない。彼の病的に鋭い頭腦の牙は、たしかに鴉片やモヒに負ふところが多い。麻雀に事よせて、作霖歿後復の天下をねらふ大伴の黒主楊宇霆を、有無をいはず銃殺したことや蔣と閻、馮の間を操つて、半歳あまりもデラせた末、突如として武裝調停の通電を發し、一兵に輒らずして北支那の地盤を得たことや、九・一八事件後の難局に處し、敗殘の東北軍閥を收拾し、今日は落ちるか、明日は逃げ出すかの世評を裏切つて、泰然として順承王府に頑張り通し、十五萬の直參軍隊を擁し、數千萬の現ナマをシツカと握りテコでも動かぬ風を見せてゐることや、さきにはラムブソン、後にはリットン、會ふほどの外人にテキパキと應酬し、二なき者と惚れ込ませたことや、これ皆鴉片モヒの常用に因る。彼の精神生活の昂揚状態を示すものに外ならず、冷酷、明敏、辛辣、まさに村正の名刀の凄味がある。

もしそれ美女の血を吸ふことは、正に彼の動物的精氣に培ふ所以であるかも知れぬ。父、作霖は、無論、一人前や二人前はやつて退けたであらうが、女色には割合ひに淡泊であつたといはれてゐる。晩年、順承王府にゐるときは、もつぱら初物喰ひをやつてゐたといふ評判であつたが、そんなことは支那ブルジョアの誰もがやつてゐることとて、取立てて非難するものもなかつた。支那人の道德標準から見ても、特にヒドかつたといふやうなことはない。ところが學良になると、かうしたルーズな道德標準から觀た上で、尙且つ「あれはヒドイ。特別だ。」と、異口同音、衆口一致だから恐れ入る。人妻、處女、玄女、女優、ダンサー、女學生、何でも御座れの箸豆主義者である。少しく、彼の穢史を拾つて見よう。正人君子は、以下、讀み給ふべからず。

淫蕩の極致

馬君武の詩に、「趙四は風流、朱五は狂一」と謳はれた朱五小姐、北平がまだ北京であつた時分、いはゆる摩登小姐の、北京に於ける翹楚として、中央公園や城南遊藝園に、彼女の艶姿は都人士の注目の的となつてゐたものだ。姉妹三人、その頃は、朱三小姐の

方が有名であつた。父は交通系の三尊として、梁士詒、周自齊と並び稱せられた朱啓鈴、學良と五小姐の馴れ染めは、果していついかなる機會であつたか、聞き洩らしたが、ともかく彼女の處女性は、學良に奪はれたことは周知の事實、それを知つてか、知らずにか、朱光○といふ男は彼女と結婚し、その縁に依つて學良四天王の一人にノシ上つてゐるといふ。尤もこんなことは前清時代にはザラにあつたことで、支那では立身出世の一手段であるが、朱はこれを以て足れりとせず、順承王府の選女係を引受けてゐるといふことだ。五小姐の姉、三小姐と四小姐も、今では順承王府にゐるさうで、このところ、時代を唐にかへして、玄宗皇帝と楊貴妃、その姉の何國夫人とかいふ二人の關係に彷彿たるものがある。おまけに、この三人の弟で朱鐵○、これも學良と關係があるといふ。水陸ともに達者なものだ。ところがこの朱副官、餘程の美貌と見え、學良第一夫人于鳳至の眼にとまり、寵愛一方ならず朱光○ともども、両手に花とシヤレてゐるとは、この夫にしてこの婦ありといふべく、この邊も支那のエロ本にソツクリである。沈能○、吳家○、劉鳴○、これらの連中は、朱光○にならつて、○や妾、妹などを献上し、祕書長、祕書、財政局長、實業廳長にして貰つたといふことだ。その他鄭尙○、周○等は北平天津での選女係として誰知らぬものもない。

しかしこれらは、いはば彼の一黨の關係だから、ヒドイといつても、まあ眼をつぶつてをれる。だが例の王○○の妹の一件は、一九二九年末の易幟問題南北合作の生贄となつたもので、これを承諾した王も王、強制した蔣も蔣で、王が何人であるか、世間にもチヨイ／＼洩れてゐるが、あまり氣の毒だからいふまい。

學良の實弟の學銘が、北支那政局の裏面に活躍し、いつも反學良的態度を取るのには、これまた彼の夫人が、學良の毒牙にかつたためであるといはれてゐる。もと奉天省長をやつてゐた翟文○の愛○も、その一だといふ噂があつた。

北支の空に陰雲漠漠

五百年前、天上の金童と玉女との、廣寒宮の私語をきこし召された玉皇は、「李三郎、又來るか。」と仰せあつて、たちどころに謫世の御沙汰を賜はり、漂蕩周遊四百餘年、人間採花二十餘年なるべしと命ぜられた。唯見る、一陣の鷗風、金童玉女を包んでいづ

こともなく浮み去つたが、さて説く、金童は、漂蕩四百餘年の後、大清國奉天省、海城縣の一部落なる、張姓の綠林豪客の家に轉生した。玉女は蘇州吳門のほとりなる一白屋に轉生し、長じて胡蝶と呼ぶ影星となつた。金童は發跡でて、一度は陸海空軍副司令となり、今は北平軍事委員會委員長として、兵馬を控制すること數年に及んでゐる。天上の金童玉女、人間の漢卿胡蝶は、年前かつて一夜は合したが、いまだ夙縁を悟るに至らず、各天の一方に離れ去つた。時しもあれ、人間採花二十餘年の期盡きて、公元一九三三年といふに、金童先づ昇天の象いやちこに、北支那の空、陰雲漠漠として、東より、西より、われこそ金童を載せ歸らんと、ヒシヒシと押し包んでゐる。胡蝶は、人間の情縁いまだ盡きず、歌舞の生涯、なほ幾年かの華やかさをのこしてゐるのである。(『世界知識』一九三三・三)

近代支那美少年傳

梅蘭芳傳

北京は、「近代のソドム」であります。

この都のはじめに創られたのは、遼の時代だといふことになつてゐますが、都城としての規模が確立されたのは元です。それから明、それから清と、三ツのダイナステイに亘つて、世界に比類なく腐敗し爛熟した支那オフィシャルドムの、亂舞のステイジとなつたことが、北京をして「近代のソドム」たらしめた最も大きい原因です。これを支那流に形容すると、湯用彬の著はした「香夢影」に「晚清同治光緒以來、貴胄の奢侈、貪吏の暴肆、外洋技巧の輸入、貧士の失職怨望、往往にして歌樓妓館の中に發揚し、鬢影衣香憧憧として來る。康熙乾隆の盛時といへども及ばざる也」といつてあります。貴胄の奢侈といふのは主として皇族達の豪華を指さしたのです。「清朝秘史」などいふ野史をひもといて見ますと、花柳病に罹つて薨じた皇族などもある始末です。皇族中の不良少年が、時の皇帝を引張り出して、花柳の巷に豪遊するところなど、次ぎ次ぎに現はれて來ます。貪吏の暴肆、明の嚴嵩、清の和坤のやうな奸相のことは、歴史に名高いところで、説明する迄ありませんが、和坤籍没のときの目録などを見ると、文字通り、「富一國に敵す」です。小嚴嵩、小和坤は、枚擧にいとまがない。小役人ではあつても、皇家の財政を掌る内務府の役人などは、賄賂は取る、公金はクスネる、さうしたアブク銭は皆湯水のやうに花街柳巷に投げ棄てられるのです。けれどもかやうなことはどの國でも有り勝ちなことで、主人の金をクスネた御店者が芳原で豪遊するといつたやうな、珍らしくもない徑路です。がそれにも拘はらず北京をソドムといふのは、貴胄の奢侈、貪吏の暴肆、貧士の失職怨望の對象となつた一種特異の存在があつたからです。すなはち像姑です。像姑とは像姑娘(類に似てる)の略で、これを美化して相公といふ。相公の本來の意味は、若様、若旦那といふところなのですが、像姑と音が似てゐるので轉用したのです。時代を元祿の昔にかへして、例の湯島にあつたといふ代

物です。餘談ですが、去年四月全日本麻雀規則制定委員会で、古くからある相公といふ術語を、イヤな言葉だからといふので廢して多牌及び少牌といふ術語を確定したことは、當日出席の委員諸君の記憶に新たなところでせうが、何故イヤな言葉かといふと、「蔭間」といふほどの意味だからです。不注意によつて持牌に過不足を來した度毎に、「蔭間」「蔭間」といはれたんぢや、麻雀人全くやりきれませんからネ。閑話休題、日本では元祿頃までで略々おしまひになつたこの公然たる男妓制度が、支那ではツイ十八年前まで存在してゐたのです。これを外にしても、有清一代の風尚は酒酒として變態性に傾き、かつて讀んだある隨筆の中に、義和團事件で有名な奸臣剛毅が、田舎からポツト出の美少年某が試験を受けるために紹介状を持つて訪ねて來たのを、有無をいはず手籠めにし、久しい間邸内の一室に幽閉して弄童にしてゐた、といふ話が載つてゐました。聖書にあるソドムの話と、多少似通つたところがあるではありませんか。

相公のゐるところを堂子或は下處といひ、文語できれいにいふと俗館です。顯秀堂とか、景和堂とか、雲和堂とかいふ屋號があることは勿論です。たまには琅琊王寓といふやうに、出身地名と姓を書いたものもあります。その所在地は、今北平前門外の花街である八大胡同のうち、陝西街、韓家潭、百順胡同の一帶でありました。堂子の經營者を主人といひ、その子を少主人といふ。主人は、たまには金持の道樂息子である場合もありますが、大抵は相公あがりの俳優で、まさか自分ではもう客は取らないでせうが、その子である少主人は、父の經營を助けるとともに、自分でも客に應ずるのです。何のことはない、自前の藝妓のやうなものです。一つの堂子に何人位の相公がゐるのか、詳しいことは記録がありませんが、數人乃至數十人といふところでせう。規模の大小によつて多少は違ふが、まづ黒漆を塗つた大門、横に眞鍮の標札、何何堂と書いてあるのを尻目につけて、これも眞鍮製の獸環をならしますと、内に應ふる聲あつて門は左右にギイと開かれ「客人來る」と吃驚するやうな大きな聲が健僕によつて叫ばれる。サアヴァント・タオオターを横に見て、垂花門(中門)を通ると正面が應接間、支那流にごくアツサリと小奇麗に裝飾されてあるその室で待つてゐると、やがて主人が出て挨拶する。つづいて相手の相公が出て來る。龍井茶をすすり煙草のみながら談話に時を移し、や

がて酒が出る、料理が出るといふ寸法。堂子、像姑の名詞は悪劣なれども、その人その地人をして流連措かざらしむるものがある
と「香夢影」の著者は書いてゐます。

宴會の席などにも、勿論相公を呼ぶことが出来る。私人の宅でも構はない。ただ相公の外出には馬車の御者の外に必ず一人のマ
ネチャア兼ボオイがゐて、相公に伺候し兼ねて監視をする。宴會の席などでは、このボオイは室外に立つてゐて、もう歸るべき時間
だと思ふと、手に持つてゐる胡桃をならす。支那に行かれた人は御存知でせうが、支那人の御隠居、イヤ若い人でも、閑人が手に
二つの恰色をした胡桃を握つて、一種きはめて靜かな音を出しつつ、道を歩いたり、又は閑談してゐるのを見受けるでせう。アノ胡
桃を鳴らすのです。さうすると室内の相公は、ボンとお客の肩でも叩きながら、もしその御客の字が子明だったら「子明、それで
は又アトでネ、吃度來て頂戴よ」ツてなことを甘つたれ聲でのべてサツサと歸つて行く。その間の訓練は全く行き届いたものだ。
御客様の字を呼ぶといふのは失禮なやうに考へられるが、これは相公と御客の親密なことを現はすもので、初對面の御客さんには
「大爺」だとか「張二爺」だとかいふのです。

相公はどうして出來上るか。北京には明かに二つの徑路があつた。一は世襲相公とでもいふべく、祖父も俳優兼相公だつた、父
も相公だつたといふ家柄で、それが反人道的なことだといふ自覺もなく、無我夢中で相公になるもの。北京では大部分この種の相
公でありました。二は、貧乏人の子供を買出したり、誘拐したりしたもの。支那美人の本場は、昔も今も、江蘇浙江ときまつてゐ
るが、男も御多分に洩れぬとあつて、北京の相公堂の主人は、恰度西瓜でも仕入れるやうに、江浙地方に仕入れに行つたものだ
といふ。まづ六七歳から十二歳までの美童で、高價いになると當時の金で五六百兩にも及んだといふ事です。かうして手に入れた
相公候補の少年に對し、堂の主人は種種訓練を施し、十三歳位になると一人前として客に出す。一人前になるまでの訓練について
は、北京方面の文獻が見當りませんから、かつて上海の支那新聞「時事新報」に掲載された「相公の黒幕」によつて大體を述べま
せう。さて、理想的の相公としては、まづ第一に容貌のきれいなこと、これは申すまでもありませんが、つづいて要求されるのは

姿のいいこと肌のいいことです。容貌はしかし堂主人がそれを第一の条件として選ぶのですから、すでに選に入つた上はただ磨きをかけてあげますが、肌と姿とは後天的に改造する方法があります。言傳へによるとまづ少年に一二服の粉薬を飲ませる。それがどんな薬だかは「黒幕」の記者も説明してないから判りませんが、漢薬を調べてこんないい薬があるといふことが判つたら、アモオルスキンそこ退けで、一儲け出来るでせう。この粉薬を飲むと發熱して身體中に吹き出ものが出来るが、しまひにはらみを持つてある程度まで身體が糜爛する。その頃を見計らつて又一種の粉薬をこんどは皮膚にぬりこめる。二三ヶ月経つとかさぶたがだんだんに取れて、キメの細いつるつるした白い皮膚になるといふ。姿をよくするために、まづ常に腰部を白布で緊縛する。それから絶へず肥り過ぎないやうに注意する。肥り過ぎるとすぐ下劑をかけるといふ調子。元來非人道的なところから出發してゐることだが、それにしても父母の遺體をまるでオモチャにしてゐるやうなものです。

皮膚の改造が済むと、それから歌の稽古をやらせる。これは客に出るのに必要なだけでなく、成年になつてから俳優として生きて行くためにも必要なのだ。俳優は全部相公ではないが、相公は全部俳優たるべくまづ養成されるのです。相公の習ふ役柄は、勿論花旦（色女形）青衣（立女形）が大部分で、これについて武旦（立廻りを主とする女形）小生（色男形）で、稀れに老生（立役もある。花臉（般役））を習ふ相公は流石になかつた。純粹の俳優は大部分科班といふ俳優學校を出て來たもので、相公を兼ねてゐる俳優を非常に輕んじ、藝名なども本名か、或はなるべく堅い名前をつけて相公と區別する。それは相公が王蕙芳、姜妙香、楊韻芳、姚佩蘭といつたやうな、まるで女のやうな艶名をつけてゐるからです。一説によると、北京の劇團には、純粹の俳優と、相公を兼ねてゐる俳優との合演が許されず、相公だけの小屋があつたといひますが、それは確かでないにしても、主として相公だけの、すなはち女形の芝居を主とした劇團があつたことは疑ひない。

俳優としての修業をするかたはら、媚術を習ふ。これはしかし特に教へ込まなくとも相公堂の中に住んでゐれば自然に女らしくなつて行くもので、一二年もすればまるで女の見みたいになつてしまふ。いよいよ一人前の相公として突き出される前になると、

房中術をも傳授される。この點については詳しい發表は出來兼ねるが、これは元祿時代のそれと大差はない。三田村鳶魚氏の領分です。ただ一つ、どうしても御客を取ることを肯んじない相公に對しては、特別の薬を使ふことがあるが、これは三田村氏も恐らく御存知ないでせう。この薬の名を髪泥といふさうです。

相公と御客の關係はどんなものか、前清の官場では、藝妓遊びが八釜しかつた、といふよりは相公遊びの方が一層高尚だとされてゐたので、交際上堂子入りをしたものも多かつたでせうが、これはいはば通り一遍の御客です。どうしても相公でなくては、といふ一種の性慾倒錯者が、眞の意味に於ける相公の御客です。勿論老人などで、シッコイ女色よりもきれいな少年の方がサツパリしていいといふやうなものもありませうし、またほんとうにうぶな、プラトニックな同性愛に出發したものもありませうが、結局は性慾倒錯といふところに落ちて行つたものらしい。「近世支那美少年録」とでもいふべき、有名な「品花寶鑑」は、わが西鶴の「男色大鑑」にも比すべきものでせうが、この書物には同性愛の正なるものと邪なるものとを書きわけてある。正なるものはいかにもプラトニックなやうに書いてあり、邪なるものは肉慾一點張りの描寫を試み、正邪顯然とわけてあるが、しかしそのいはゆる正なるものを叙するときにも、往往エロティックな色彩を帯びてゐることは見免がせません。この書は咸豐二年（一八五二年）の出版で、江蘇常州の人陳森書をつくるころ、書中の伶人及び才子には、皆モデルがあつたものらしいが、惜しいかな今となつてはもう分りません。其後この書に做つて相公社會を叙したものに「燕蘭小譜」「長安看花記」等がありますが、民國になつてから更に「香夢影」「清代聲色志」等を加へました。これらの書物によつて泣くべく歌ふべく、はた笑ふべく罵るべき性慾倒錯の世界をうつつて見ませう。

乾隆の未安徽生れの少年俳優胡么四といふがありました。色も藝も人並みすぐれ、明眸、秋の水のごとく、秋波一轉すれば座客みな消魂するといふ代物でしたが、ことに當時の人氣に投じたのは、少ひさいときから女子同様に纏足してゐたことで、舞臺に上るとどうしても女子としか見へなかつた。貴州人の某翰林に落籍され、後翰林が道臺となつて地方へ行つたときも、隨行して

オイになつたが、顔のきれいなのに似合はず腹黒い男で、翰林の幕僚孫某といふのが役所の實権を握つてゐるのを見て、翰林の眼を盗んで孫と情を通じ、二人でしこたま公金を着服し、翰林が父の喪に服して郷里に歸ると、彼はそこで翰林との關係を絶ち、北京へ歸つて何姓を名乗り、身分を偽つて金で役人の株を買ひ、江蘇兩淮地方の鹽役人になり、ここでも持前の狡猾でズルク立廻り、大分貯め込んだ。さうしてある日、その母の誕生日の御祝ひに役者を呼んで芝居をやらせたところが、悪いことは出来ないもので、そのとき演じた「長生殿」で李龜年に扮した役者が、偶然にも胡么四の舊師でありました。彼はもとの弟子である胡が、官服を着けて威張つてゐるのが癪に障つたと見へ、芝居を中止して胡の悪口を言ひはじめた。そして棒をもつて胡をなぐりつけました。胡の同僚には元來胡に快よからぬ連中が大部分を占めてゐたので、役者のいふままに胡の鞋をぬがせて見たらすがふ方なき纏足であつたので、身分を偽つた不届き者だといふので皆なして叩き出してしまひました。清朝の規則では俳優は身分最賤しいものとして、官吏になることを許されなかつたのです。

楊花は長安の俳優でした。十四歳のとき江蘇の徐某に三百兩で落籍されたが、前にのべた胡么四と違つてどこまでも主人に忠實でした。徐は長安の役人をしてゐて、あるとき兵糧を率領して鄧陽驛にさしかかると、白蓮教匪に圍まれました。楊花は逸早く主人を馬に乗せて宿の裏門から逃がし、自分は従容として賊を迎へた。賊の首領は長安で有名な楊花を知つて、歌を唱へと強ひます。楊花はこれを快諾し、かつ唱ひかつながし目を送つて首領を惑はせ、その夜首領が沈酔して寝入つたところを、隠し持つた匕首で殺したが、衆寡敵せず賊の亂刃の下に斃れました。鄧陽の人みな涙を揮ひ、碑を築いて「義伶楊花救主處」と題したといふことです。

江西の知事武子偉は、あるとき公用で北京に来て、友人に勧められてはじめて相公堂に行きましたが、そこで德春堂の少主人楊少榮を見て、世の中にはこんなきれいな子供があるかとボオツとなつてしまつた。小榮は色女形として有名であつた楊桂雲の息子で、王瑤卿（立女形、現存）、朱素雲（色男役、現存）とともに三美といはれた名相公です。役柄は父と同じ色女形で、妖艶たぐひなき毒婦型を以て鳴つてゐました。サア、武子偉はそれからといふものは毎日毎日德春堂に入りびたり、公金も費ひつくし無一文となつ

たが、それでも小榮の顔を見ないではゐられない。遂に自から志願して小榮の書記になつた。小榮は、もとは御客でも今はおれが食はせてやつてゐるのだからといふので、まるでボオイ同様にこきつかふのですが、武子偉はすこしもイヤな顔をせず、欣欣然として小榮の願使に従つてゐます。つひにはこのことが北京にある江西の同郷人の間に知れ亘り、同郷人の面汚しだといふので醜金して武を江西に逐ひかへしました。武はやむを得ず又知事になつたが、一杯飲むと友人を捕まへて、小榮のろ氣をきかせ、自分が一生で一番楽しかつたのは小榮の書記をしてゐたときだといひひしたといふことです。同性愛の至痴なるものでせう。

張蔭桓といへば日清戰爭當時戸部左侍郎（日本でいへば内務次官）で、李鴻章の來る前に清國全權委員として下ノ關にやつて來、全權委任狀が不完全だつたので講和談判に當ることが出來ず、手を空しうして歸つた人として、邦人にも名を知られてゐますが、後戸部だか兵部だかの尙書（大臣）になり、稚野尙書の名前を風流陣中に轟かせた人です。この人も相公好きで、少年俳優五九との情事は、咄咄怪事として世間に喧傳されたものです。五九は本名秦穉芬、稚野尙書は溺愛のあまり五九に婦人の装ひをさせ、邸内の一室を與へて寢寢に侍べらせ、召使ひどもには「少奶奶」と呼ばせたさうです。少奶奶とは若奥様といふ意味です。召使ひどもはじめはテレクさかつたが、しまひには馴れてしまつてほんとに若奥様のやうな氣がしたといふから不思議です。稚野尙書は五九に母日五十兩與へてゐたといふことです。五九は晩年氣が狂ひ、毎日前門大街（北京の銀座）をブラつきつつ、通りかかりの人間をつかまへては、「御前はおれの家内をとつたらう」とわめき散らしてゐたさうだ。

楊韻芳はかつて相公人氣投票に一等で當選した美少年でした。李鴻章の一族の李國杰がその保護者で、まだ西洋建築の珍らしかつた頃、李國杰に洋館を建てて貰つて住んでゐたといふ。まだ朱家胡同の如春堂にゐた頃、書生匡履福、張鳴岐（後兩廣總督、革命のとき一時都督となら）の二人が楊に迷ひ、貧乏書生のなりをして通つて來たが、楊は二人を讀書人として尊敬し、金錢のことなどは問題とせずよくもてなして歸してゐた。匡か肺病で死んだときには、自から白衣をつけて棺前に哭したといふので、當時仲仲感心だといふ評判でした。しかし李國杰との關係は、張稚野と五九のそれと同じで、寢處をともしたといふことでした。

この外前清時代の有名な相公としては果香齋、余玉琴、朱素雲、王瑤卿、王鳳卿、王琴儀、朱幼芬、姜妙香、姚佩秋兄弟（秋佩、冬佩、春佩）孟小如、王蕙芳、二荷、小鳳凰等がある。余玉琴は光緒帝の寵を受けてゐたので有名。又王蕙芳は張勳の寵見でした。宣統復辟の忠臣として有名な張勳は、はじめ粗豪を以て鳴つた遊俠で、楊立山、繆三文、慶小山、文田三等内務府員の後を繼いで、相公社會の有名なバトロンであつたのです。

——道光年間も末の頃、やがて來む長髮賊の亂のきざしは見えながら、世も人も太平の夢をむさぼつてゐたある年の春、安徽桐城の名家の子方朝觀、字は子觀、北京に試験を受けに行く途中、揚州に船がかりしてゐた。逆風に阻まれて船が出ず、旅愁を船窓にかこつてゐた折柄、故人葉茂林が五人の弟子を連れて、偶然にも同じ船に乗込んで來たので、いい連れが出来た哩と躍りあがつて喜びました。茂林はもと南京で鳴らした有名な俳優ですが、今はもう五十がらみの、トックに役者は廢めて師匠になつてゐるのです。子觀とは秦淮での識り合ひ、いいところで御目に掛かりましたといひながら語るを聞けば、北京福勝堂の主人楊三の依頼を受けて、蘇州へ子供の買入れに行き、五人だけ仕入れて來たところですよといふ。やがて五人の子供を連れて來て、子觀に叩頭させましたが、いづれも十二三歳から十四五歳の美少年揃ひ、中にも棋官と呼ぶ杜姓の少年と、雪芬といふ梅姓の少年はきはだつてきれいです。ことに梅雪芬は色が抜けるほど白く、銀盆のごとしと形容される圓顔で、したたるやうな愛嬌があり、丁度むかしの楊貴妃型、時世好みの尤物でした。子觀もこれまで南京あたりで、美人といはれた藝妓や相公も見ましたが、今眼前にゐる雪芬のやうなのは一人も見當りませんでした。子觀は、ただもうボオツとなつて、雪芬ばかり見詰めてゐる。雪芬も子觀の貴公子らしい、瀟洒たる風采に打たれて、顔を赤らめつつもチヨイチヨイ子觀をぬすみ見てゐます。——この社會では、情縁をさともすることも早い。「小鳥人に依る」。雪芬が取りも直さずその小鳥でした。

楽しい船旅がつづきました。名にし負ふ大運河を南から北へ、楊柳煙る兩岸の風光を賞でながら、船中から崑曲のしづかな調べが起ります。揚州から北京まで四ヶ月の船旅を無駄にはさせまじと葉茂林が五人の弟子に曲を教へてゐるのです。子觀も徒然なるままに茂林に手ほどきをして貰ひ、二ツ三ツはほんとに舞臺に立てる位手に入れました。雪芬との交情も日にまし濃くなり、卿卿我我、葉茂林の微笑を誘ふほどになつた頃、船もやうやく通州につきました。通州からは蒲鋒馬車であこがれの北京に着き、惜しい袂を分つて子觀は前門内の會館（同郷人の俱樂部で下宿することも出来る）へ、雪芬等の一行は前門外朱家胡同の福勝堂へと落ちつきました。

福勝堂私寓（言ひ忘れまじ相公堂子のことを私寓といふのです）主人楊三は、葉茂林の連れて歸つた五人の弟子が、いづれも相當の代物であるのに満足し、ことに梅雪芬の豊艶無比、富貴の相のあるのを見て、これこそ搖錢樹たと喜びました。そこで名前を巧玲字を豐仙とつけ、もともと江蘇泰州産れで崑曲の素養もあるので、しばらくするうちもう客にも應じ、たちまち堂第一の紅相公となつたばかりでなく、讀書の道にも明るかつたので、殊に讀書人の氣に入り、瞬く間に第一相公の名を得るに至りました。舞臺での人氣も素破らしく、「盤絲洞」では蜘蛛の精に扮し、ほとんど半裸體になる一幕があるが、肌膚の豐潤玉のごとく、人をして楊貴妃華清池沐浴の圖を想起せしめたといひます。この間子觀が毎日巧玲の許へ通ひつづけた事は申すまでもなく、巧玲が綱鑑易知録を卒業したのも、方の指導によることは勿論です。しかし巧玲の人氣のあがるのと反對に、子觀の文運はどうしたのかサツパリ振はず、試験にも落第し、故郷からの仕送りのも絶へてしまいましたが、巧玲のことはどうしても忘れられず、着物を質に置いては通つて來る始末。巧玲は、はじめ子觀を金持ちの息子と思つてゐたので、何にも氣に止めずにゐるのですが、どうも近頃様子が可笑しい。どうやら無理算段して通つて來るらしいので、子觀に向ひただした結果、着物を質入れしてゐることがわかつた。巧玲、そんなことなら早くわたしに言つて呉ればよかつたのにと、貯へを出して質を受け出し、なほ時時學費を贈つて子觀を勵ましたのでしほれかへつてゐた子觀もやつともにかへり、會館の一室に閉ぢこもつて勉強した結果、見事翌年の試験に及第しました。巧玲の喜びはまるで自分が試験に通つたやう。ところが不幸にも子觀は翰林になつてまた一月も経たないうちに急病で死んでしまつた。巧玲は白衣をつけて棺前に哭し、子觀に立替へた二千兩の借金證文を焼き、別に二百兩を香奠として子觀と同郷の友人に渡しまし

た。借金證文は巧玲は要らぬといふのに、義理堅い子親が無理に渡して置いたものなのです。サア、このことが北京中に知れ互り、「戲子無情」といはれてゐる芝居者には珍らしいといふので、義伶梅巧玲の名はいやが上にも高まりました。

子親の死後いくばくもなく巧玲は獨立して李鐵拐斜街に景和堂私寓を開き、數人の徒弟を置いて商賣をつづけましたが、情けは人のためならず、方子親の一件から都人士のひいきは彼の一身に集まり、稼業は繁昌する一方劇界に於ける地位も追追と高くなり、ついに崑曲の女形第一人といふ折紙がつき、さらに持つて生れた俠氣と親分肌を見込まれて、四大徽班の一である四喜班の班主に推戴された。徽班といふのは安徽の語調を以て劇を教へる俳優養成所の謂で、乾隆帝南巡の結果、三慶、四喜、春臺、和春の四班が北京に入り（二七六〇年頃）爾來この四班を以て北京の劇界を壟斷してゐたのです。この班主となることは、劇界の最大名譽で、その班に屬する數百人の俳優に君臨するほどの威勢を持つたものでした。三慶班の初代の班主は、現代支那劇の開山祖師といはれた立役の程長庚で、そのあとをこれも立役の楊月樓が繼いでゐる。巧玲が一女形を以て四喜班を率ゐてこれに對抗しようといふのだから仲困難な仕事です。しかも巧玲の材幹は、往くところとして可ならざるはなしで、三慶班と對抗して一寸も遜色ないばかりか、春臺、和春兩班が管理よろしきを得ないために、氣息えんえんたるを尻目につけて、四喜班だけは堅い結束を見せ、三慶班とともに北京の劇界を兩分するの壯觀を呈しました。

この梅巧玲こそ現代支那劇壇の明星梅蘭芳の祖父です。巧玲には二人の子があつた。長男大瓊は字を雨田といひ、父に似てデブブリ肥り（巧玲に胖巧玲の諱名ある）容貌は一向相公向きでないで、胡弓を弾くことを學ばせたがこの方には驚くべき天才を發揮し、梨園第一の琴師と稱へられた。二男二瓊、字は竹芬、性温婉にして處女のごとく容貌も可憐であつたので巧玲の死後、景和堂の商賣は主として竹芬によつて繼承されることになりました。雨田は別居したわけではありませんが、名人肌の男ではあり、家事一切は竹芬が取り計らつたものと見えます。巧玲をひいきにした名士樊增祥（號羨山）易順鼎（號哭庵）等は、竹芬が巧玲の子であるといふので、引きつづきひいきにして呉れ、商賣の方は相當繁昌しましたが、竹芬は生來蒲柳の質で、到底忙がしい堂子の商賣に堪へ

られず、とうとう病ひの床に臥すことになりました。醫師の診断によると肺病とのこと、雨田は大いに驚いて日夜看護につとめました。一向效目もなく、もはや死を待つばかりとなつた。竹芬も死期の近づいて來たことを覺つたと見へ、一日兄雨田を枕許に呼び、つくづく堂子商賣の非人道なことを嘆いた末、自分が死んだら景和堂の商賣はもう止めて呉れ、さうして伴の裙姉には讀書を教へて、もうこんないやな商賣はさせないで呉れと、涙を流して頼み込みました。雨田も元來この商賣を喜ばぬ男、勿論のことだ、裙姉のことは引き受けたから安心せよ。しかしお前もまだ若いのだから、これ位の病氣でどうのかうのといふことはあるまい。精出して療治するがいい。と答へたが、どうせ助かることはあるまいと思へばこれが兄弟の別れ、雨田は涙を笑ひにまぎらして引取りましたが、果して三日目に竹芬は十二歳になる裙姉を遺したまま不歸の客となりました。これが明治三十九年のこと、裙姉は三歳で母を失ひ、今又十二歳で父に死別しこれからは祖母巧玲未亡人と雨田夫婦の撫育に頼ることとなつたのであります。

さて雨田は、もと堂子商賣が嫌ひでもあつたし、弟竹芬の臨終の願ひもあつたりするので、竹芬の死後すぐに景和堂の門を閉め、自分は琴師として方々の芝居小屋に雇はれ、ヒツソリした暮らしを始めました。このまゝで行けば裙姉も、平々凡々な梨園世家の一子弟として終つたかも知れませんが、天の配劑はそれを許しません。雨田の細君といふのが御定まり通りのアバズレ者、折角あんなに繁昌してゐた景和堂の商賣を止めてしまつたのが、第一氣に喰はないところへ、雨田が弟竹芬の遺言を守つて裙姉を讀書人か何かにするつもりらしいのを見て、もう黙つては居られません。彼女に言はせれば、役者の子はどこまでも役者でいい筈だ。讀書人にしようつたつて第一試験さへ受けることの出來ない身分では仕方がないぢやないかといふのです。これも當然な言ひ分です。雨田とても裙姉の將來をハッキリどうしようといふ考があつたのではなくただ竹芬の臨終の願ひに深く打たれたために外ならないのです。さうかうするうちに雨田の暮しはだん／＼ひつそくして來ました。琴師としての収入は僅かなものだし、これまで派手な堂子商賣をして來たのだから、儉約といふことは少しも知らないで家も何も人手に渡してしまふ仕儀。そこへつけこんだ細君は、もうかうなつたら裙姉を私寓にやるより外ないと攻め立てる。雨田も死んだ竹芬には濟まぬと思つたが、別に妙案もない

ので細君の言に従ひ、韓家潭で當時第一の堂子だといふ評判のあつた雲和堂の弟子にすることになりました。雲和堂の主人朱小芬は、朱霞芬の子で、當時霞芬はもう死んでゐて、小芬は弟の幼芬と二人で雲和堂を經營してゐるのでした。小芬には經營の才があり、幼芬は立女形を學び、色藝双絶の譽れのあつた名相公であつたので、當時の雲和堂は正に全盛時代に在つたのです。

さて小芬は、もともと裙姉に眼を着けてゐたのでした。こいつは大した尤物だ、もしかしたら弟の幼芬以上になるかも知れないと見込んでゐたのですから、奇貨措くべしと雨田夫婦の申込みを納れ、吉日を選んで弟子入りをさせ、蘭芳といふ名と、曉華といふ字を與へました。後年名を瀾、號を蘭芳といふことに改めましたが、はじめは蘭芳が名だつたのです。

雲和堂でまづ相公としての修業をしたことは勿論です。しかし蘭芳は目鼻立ちのきれいなことは誰にも引けを取らないが、どうもあまり内氣過ぎて活潑が足りない。ものいへば顔赤らめるばかり。娘の子でも蘭芳ほど温しいのは珍らしい。その實かやうなこそ明僅の上選、すなはち理想的の相公なのですが、どうも俗受けがしません。小芬はこれを見て、或は見込み違ひではなかつたかと思ひましたがしかし蘭芳は見れば見るほどきれいな子供で、これが持て嘶されない理由はない。畢竟まだ運が向かないのだからとあきらめて、いつそ藝事の方に全力を盡させようと決心しそのころはじめて出来た喜連成科班の科外生に入りました。科班といふのは少年俳優養成所で、兼ねて毎日實演をするところなのです。本科生となるにはその中に住み込まなければならぬので、蘭芳のやうな私寓の子弟は、科外生として通學する外ないのです。喜連成には二百餘人の學生がゐましたが、容貌に於いて蘭芳の右に出るものはなかつた。まるで餓虎の群の中に羊をほうり込んだやうなもので、中にも武生（立廻りを主とする立役）の康喜壽、張喜福、吳喜年、敵役をならつてゐた侯喜瑞などの不良少年は蘭芳を稚兒さんしようといふので大變なさはぎ。家へ歸ると主人筋の幼芬が、競争意識から嫉妬的につらく當る。蘭芳たるもの全くやりきれませんが、藝事が好きで辛抱づよい蘭芳は、そんな苦勞をしながら徐に々技倆をあげ、もうかれこれ立女形として芝居が演れようといふところまで漕ぎつけました。

ある日ブラリと雲和堂を訪れた二人の客、一人は朱幼芬の御客で謝素生といふ浙江の名士、今は兵部の役人です。今一人は關召

南といふもう六十を越した北京生へ抜きのお名士、日本でいへば何とかの御前とでもいふべき大通です。梅巧玲とは昔馴染。巧玲の孫が雲和堂から出てゐるといふ噂をきき、どんな子供か見たいといふので、今日しも謝素生を誘つて来たわけです。堂主人の小芬はうどんげの花咲く思ひ、蘭芳にもとう／＼運が向いて来た哩とホク／＼もので蘭芳を呼んで来ました。大通召南は、淡藍色の長袍（ワンスイス的のものです）に、青磁色の鶯黄のへりを取つた袖無しを羽織つて、青い絹鞋をはいた蘭芳をつくづく眺め、ハタと膝を打ちました。巧玲より竹芬にもつとよく似、可憐であるとともに斌媚人を動かすものがある。これは掘り出し物だ哩、これほどの名花をホツて置くとは、さてもめくらの多いことだと、義憤に似た感じをも懐いたくらゐ。蘭芳の方も眼が高い。一座にただよふ斯文の氣を見がしません。御客さんたちはただ馬鹿さはぎを喜ぶ不良見ではないと安心することにも、今まで隠れてゐた持前の愛嬌が、思はず知らず流れ出し、ふだんのハニカミ屋の蘭芳とはまるで違つた持てなした方。召南の満足つたらありません。その日はそのまま歸りましたがその翌々日改めて雲和堂に席を設け、蘭芳紹介のために五六人の親友を招くことになりました。不運な蘭芳に取つては、これがはじめての御客らしい御客なのです。恰度何年も續いて落第した讀書人が、はじめて試験に通つたやうな喜び方。いよいよ定期になると御客さんは皆集まりましたが、最後に来たのが本編の副主人公である馮幼薇です。その頃まだ三十位的美丈夫廣東の富豪の子で保定の軍官校學を卒業し、今は督練處に勤めてゐる。なか／＼惻巧な男で、金ばなれはよし、花柳界では六爺といはれた通人です。ほんとうからいへば召南とは肌合ひが違ひますが、幼薇は軍人に似氣なく文筆のたしなみもあるの、今日もアレならよからうといふわけで招いたので。幼薇は座につくなり、「召翁、早く御自慢の蘭芳を見せて呉れ。」と、才人なかなか氣短かです。召南苦笑しながら蘭芳を呼びましたが、そのときの幼薇と蘭芳の會見が、歴史的のものにならうとは、神ならぬ召南はじめ誰にも氣附きませんでした。

幼薇はすつかり自信を失ひました。自分は通へだ。随分花柳の巷を泳ぎ廻つて、美しいといふ藝妓、きれいだといはれる相公も見したが、かつて心を動かされたことはなかつた。召南爺いの掘り出し物だつて、老眼に何がわかる。そこいらにいくつもころがつて

ある西瓜相公だらうと多寡を括つて出て来たのですが、いま眼前に現はれた蘭芳を見て、しまつたと思ひました。もう無我夢中です。それから宴の終るまで、彼の眼は蘭芳の顔ばかり追つてゐる始末。あたり前の客ならば嫉妬さはぎを起すところですが、そこは大通であり、老人でもある召南のこと、これはイツソ幼薇に譲つた方がいいと、かしこくも考へつきましたので、席定まるやまづ蘭芳譲り渡しのことを聲明しました。自分はもう老年であり、さう度度堂子へ来ることもない。自分が蘭芳を独占することは、却つて蘭芳の不幸にならぬとも限らぬ自分は無意識のうちに蘭芳のやうな美玉を掘り出したことに満足し、これからの蘭芳の世話には幼薇に御願ひしたい。相客がみなこの言分に賛成したことは申すまでもありません。幼薇は天にも登つた心地、恰度宋の太祖が陳橋驛で、臣下のために無理矢理に黄袍を着せられたと同じ気持ちで口ではそれでは召翁に済まぬ済まぬと言ひながら、手では蘭芳を引きつけてゐます。いやもうだらしないつたらない。かくて蘭芳は完全に幼薇のものとなり、數日後改めて幼薇が主人となり、雲和堂で披露の宴を張りました。

呂布貂蟬鳳儀亭の濡れ場の密畫を畫いた瓷燈の物やはらかい光りが、室内をボンヤリ照らしてゐます。瓷燈といふのはうすでの磁器で出来た燭臺で、矢張り磁器の細長いシェイドがついてゐる。鳳儀亭の畫はそのシェイドの上にかいてあるのです。室の奥、右手の壁寄りに紅木のダブルベッドが見える。カーテンは青磁色だ。正面にはこれも紅木の細長い琴卓が置いてあつて、白梅の盆が三ツ並べてある。その香りが室の隅の火盆によつて適度に温められたこの「暖閣」の温氣にこもつてムツとするほど媚めかしい。青磁のカーテン半ば開いて、スナナリした肢體が見える。腰には白布を捲いて陰陽を混同し、罪の胡蝶の戯れるままに力なく喘いでゐます。胡蝶は現實の胡蝶でない。莊子が夢の胡蝶です。人は——白梅の精でもありません。雲和堂の夜は、うちに一幅「春宮秘戯圖」を秘めて、深沈とふけて行きます。

蘭芳の才華は一時に煥發しました。雪に蔽はれてゐた高原の春です。ペトロンが出来たといふことが、どれだけ蘭芳の精神に影響したか想像の外でした。幼薇との歴史的會見の後二月も経つと、蘭芳はもう立女形として芝居をやるやうになつた。不完全なが

ら一人前の藝になつたといふわけです。幼薇等が毎日廣徳樓に出掛けて聲援したことは勿論です。それにしてもいつまでも科班にゐたのではウダツはあがないといふので、幼薇等の盡力で喜連成を退學し暫らく中和園で唱つた後、梨園の遊俠俞振庭の經營する文明園に移りました。俞振庭は名優俞菊笙の子で、武生を業とし、相當上手でもありますが、親分肌の男で、金もあるし押しも利く、俞五といつたら劇界に知らぬものもない位な顔役です。従つて俳優としてよりは經營者として早くから立ち、西珠市口に文明園といふハイカラな劇場を建てて新人振りを發揮してゐましたが、蘭芳の名前が高くなり、その背後に馮幼薇の一派がついてゐるのを知つて、奇貨措くべしと引張つたわけです。果して計略圖に當り、文明園は毎日満員の盛況。従つて蘭芳の名も益々揚る一方です。

世家の子に郭三湘といふがあつた。容貌俊美好女のごとく、いはゆる翻々たる濁世の佳公子です。にも拘はらず品行方正で、かつて花柳の巷に入つたこともなかつたが、ある日文明園で蘭芳の「女起解」を見てから、スツカリ魅せられてしまひ、それからといふもの毎日毎日小屋通ひです。どうかして近づきになりたいと思つたが、まだ十七八歳の少年とて相公堂子の内幕も何も知らないので、いたし方なく毎日早くから劇場に詰めかけ、いつも同じ席を占めて一度でもいいから蘭芳に眼をつけて貰ひたいといふ殊勝といへば殊勝な、馬鹿けてゐるといへば馬鹿げた希望を懷いて通ひ詰めました。餘談ですが私の友人で民國元年頃北京に留學してゐた男がある。これが大の蘭芳びいきで、丁度郭生と同じやうなことを考へつき毎日舞臺のまん前に座を占め、蘭芳が出て來ると根氣よく突拍子もない聲で「好」「好」を連呼したが、蘭芳は一度も見なかつたといふので、「馬鹿野郎だ」といつて行くのを止めたさうです。ところが郭生の場合には反應があつた。といふのは郭生がきれいな少年であつたのと、毎日同じ場所に同じ服装で座つてゐたからです。役者といふものは大膽なもので、芝居をしながら、ハア誰さんはあそこに來てゐるなといふことが判るのだから。蘭芳は郭生を見て、この人は自分のために來てゐるなと思ふものだから、芝居を演りながらツイ郭生を見る。郭は大喜びで身體をゾク／＼させる。しかし考へて見ればそれだけのこと、この上は今一步を進めて、モット有效な手段を取らなくてはとい

ふので、毎日雲和堂の前に行つて蘭芳の出で来るのを待ち、蘭芳が俥に乗つて行くと自分も抱へ俥で後をつけて文明園に行き、芝居がハネると同じやうに送つて行く。これが郭生の目録、何と變つた目録もあつたものです。ところがこれが又反應があつたのだから、犬も歩けば棒に當る筈です。十一月の大雪の日でした。雲和堂の門口で、頭から雪をかぶつて待つてみると、出て来た蘭芳はこれを見て、可笑しいやら氣の毒なやらで、はじめて言葉をかけました。郭はそこで自分の名前を名乗り、ふだんからあなたの芝居ばかり見てゐるといふ話をしたから、蘭芳も郭生の誠心を感じ入り、それではいつか長巷二條胡同の自分の家に来て呉れと約束しました。雨田は大分前からこゝに引越してゐたので、蘭芳も近頃は時々自宅へ歸つてゐたのです。かうして郭生は蘭芳の入幕の賓となつたのですが、馮幼薇に對しては三分の鬼胎をいづく蘭芳も、郭とは同年輩で、且つは金錢關係も何もない間柄ですから、日にまし親しくなつて、三湘から書物を教はつたり、字を習つたり、楽しい日がつゞきました。

蘭芳と郭三湘との關係を知つた馮幼薇は、一寸不快には感じましたが、嫉妬のほむらをもやすには、あまり優越感があり過ぎた。相手は白面の一少年であり、自分も許す蘭芳の老斗（ベトロン）である。テンデ勝負にならないぢやないかと。さうして事實は全く彼の豪語の通りで、郭は結局馮のために逐はれてしまつた。これはしかしズットあとの話です。

宣統三年は十七歳の蘭芳に取つて記念すべき歳でありました。その春、父竹芬の死後わが子のやうに可愛がつて育てて呉れた雨田が死んだ。葬儀の費用萬端は、一切幼薇が引き受けたことはいふまでもありません。秋に入ると武昌に革命軍が起り、つづいて各省の獨立騒ぎで、清朝御蔭元の北京は人心洶々、相公堂も芝居もあつたものではありません。雲和堂の主人朱小芬は、この形勢を見てもう一刻もヂツとして居れません。いよいよ馮幼薇にせまつて蘭芳落籍のことも持ち出しました。幼薇はもとからそのつもり、吉日を選んで出師の禮を執り行ひました。この出師といふことは、相公にとつて一生の大事で、それもその筈、半奴隷の境遇から自由の境涯に移るのですから。ただしベトロンに對しては、依然として頭は上らないのですが。幼薇は蘭芳を出師させたものの、流石は男子、革命の騒動に乗じて一ツ端し功名を建てようといふ氣があるので、長巷二條胡同の蘭芳の宅へもあまり寄りつき

ません。蘭召南も滿洲人のことですから、尙更やつて來ません。郭三湘が欠かさず遊びに來るだけです。

年が改まつて宣統四年、その二月に清朝が滅びて民國元年となり、南方では臨時大總統孫文が辭職して袁世凱を後任に推し、南京に來て就任せんことを要求したが、袁は自分の勢力範圍である北京を離れて、革命の勢力下に在る南京に行くことを欲せず、二月二十七日夜股肱の第三師團長曹錕に旨を含め、官許の掠奪をやらせました。袁が北京を離れるとこんなことになるぞといふ示威運動です。兵變の結果は南方の讓歩となり、北京は依然首都として認められることになりました。この記念すべき二月二十七日の夕蘭芳は郭生とともに前門外煤街の致美樓で食事をしてゐましたが、兵變のために外にも出られず、二人の少年は相擁して一夜を致美樓の一室に泣き明した。そのことが益々幼薇の機嫌を損ねたのは是非もない次第です。

北京政變の結果政府は南遷しないことになり、袁大總統の下に國會も召集されようとし、時局も一段落ついたので今まで閉めてゐた芝居小屋も一時に開かれるやうになりました。蘭芳も家にヂツとしてゐても詰らないといふので、田際雲の招聘に應じ、鮮魚口の天樂園に出演した。田際雲は維名を想九霄といひ、昔は有名な色女形。康有爲梁啓超等の戊戌政變のときには、康梁等の依頼を受け、宮廷御出入りの俳優（これを内廷供奉といふ）である地位を利用して新學に關する書籍を光緒皇帝に奉獻する役をつとめたりしましたが、事敗れて康梁外國に亡命し、光緒帝幽閉され、譚嗣同、林旭等のいはゆる六君子が死刑に處せられると、彼も罪を恐れて上海に逃れたなどいふ逸話を持つてゐる。梨園中の政治家といはれ、民國になるとすぐ相公堂子の禁止を請願し、内務部の許可を経て六月十八日以後堂子營業罷りならぬといふことになりました。又正樂育化會といふ俳優團體を設立し、支那の團十郎である譚鑫培を會長に、自分が副會長になつたほどの男です。かくて蘭芳は際雲の經營する天樂園に出演したが、恰度いいことには各省から集まつた國會議員連中の御上りさん、旅居のつれづれに花柳の巷に走るか芝居を見るかより外なかつたが、天樂園で蘭芳を見てからは、天下の美人蘭芳の外になしと宣傳しはじめたので、一しほの人氣を煽り立てました。大總統選舉のとき、蘭芳に投票したものが二三ゐるといふ、嘘のやうな本當の話もあります。それから今まで極端に壓迫されてゐた言論の自由が恢復され、何十とい

ふ新聞が創立され、そのうちのあるものは社會記事に着眼し、劇評をのせるやうになりましたが、これが蘭芳には非常な宣傳になつた。すなはち幼薇等は金錢を惜まず劇評家を買収し、毎日蘭芳を褒める文を掲げるし、郭三湘は自分一人の立場から長篇の劇評を投稿する。まるで蘭芳一人が役者で、外の連中は皆馬の脚だといはんばかり。かやうな梅黨の跋扈に對して反感も相當大きかつた。黄鐘日報の主筆劉鶴、國華報の記者穆辰公等は、前者は劇評で、後者は「名伶外史」といふ小説で、ともに蘭芳を罵倒し、殊に後者は馮幼薇との關係に言及し、痛烈骨を刺すほどにやつつてきました。一帆風順の蘭芳に取つて、これは一大痛棒でありました。思ひは同じ幼薇も、梅黨の名士に依頼して、外の新聞に據つて筆陣を張りましたが、どういふものか旗色が悪い。そこで幼薇は黄鐘日報の社長王印川が幼薇と同じ參議院議員であり國華報社長烏澤聲が衆議院議員であるのを利用し、からめ手から劉穆二人を壓迫し、やつと沈黙させることが出来ました。この穆辰公は其後奉天に行つて盛京時報の記者になり、レ・ミゼラブルやモン・クリストなどを譯して名聲を揚げた儒巧先生です。

幼薇の盡力で反對黨の新聞は征服する。北蘆草園には幼薇に買つて貰つた新宅が出来る。祖父巧玲以來ひきにして呉れる名士易順鼎の「萬古愁曲」が發表されて、一笑萬古の春、一啼萬古の愁といふその一句が、恰度一九三二年の東京行進曲のやうに、北京人士の口の端に上る。つづいて武生王毓樓の妹を娶つて北蘆草園の春色は益々濃かとなる。長巷二條胡同の丁姓の娘が、蘭芳に戀煩ひの末逆上し、東安市場の吉祥園に出演してゐる蘭芳を訪ね、蘭芳のボオイがこれを拒絶すると、「わたし蘭芳の許嫁よ、わたしの許嫁に會ふのに何を邪魔する。」とばかりボオイの頬けたを叩きつけて樂屋に闖入し、蘭芳が眞赤になつて逃げ廻つたといふ話や、むかし巧玲や竹芬をひきにした王姓の醫者が、今は落ちぶれてゐるが昔は、といふわけで蘭芳に交際をせまり拒絶されたので天樂園の門前に待ち受け、蘭芳の俾が人混みで動けない隙を見計つて無理に接吻しようとし、蘭芳にイヤといふほど頬ペタを打たれ怒るところが嬉しい嬉しいといつた話や、時の駐支日本公使館書記官小幡西吉氏が、支那人の宴會で梅の芝居を見せられ、歸つてから「今日は梅蘭芳といふ美しい女優を見た。」と語つて館員に笑はれた話が、都人士の微笑を誘つたのもこの頃でした。韓家

潭でオド／＼しながら酒をすすめてゐたときから、まだ幾年も経たないのに、運命は彼にかくも好意を示して來てゐます。しかし運命の好意はまだつづくのです。民國二年彼十九歳のとき、終に上海丹桂園からの招聘が來たのです。

一體支那劇は北京が本場です。梨園の先輩も殆んど北京に土着してゐるし、上海その他の土地へは落伍者が行くものと相場が定まつてゐましたにも拘はらず上海が事實上の登龍門だったので、それは何と云つても地理的關係から、全國的に名を知られるために上海が便宜を占めてゐるし、それに劇場の組織も北京とは比較にならぬ程度に大きかつたからです。上海では、北京からの名優だといふので大々的に宣傳する。北京では上海へ行つて大いに歓迎されたといふので益々人氣が高まる。持ちつ持たれつといふ關係があるのです。だから北京で名を成した俳優は機會さへあれば上海に出かけて名聲と金錢とを滿載して歸ることを忘れません。今その機會が蘭芳を訪れたのです。どうしてこれを掴まずにゐられませう。彼は王鳳卿（立役）と共に丹桂園の聘に應じ、四十餘日間連演しました。當時上海劇場の牛耳を握つてゐたのは、河南生れの色女形寶璧雲でしたが、もう大部年を取つてゐて、到底綺年玉貌の蘭芳に敵すべくもなかつた。上は名士から下、野鷄（娼妓）に至るまで顛倒傾覆狂するがごとくでありました。巧玲の入幕の賓であつた老名士樊增祥がつくつた「梅郎曲」に「沈醉予江南士女の心、衣襟總べて帯ぶ梅花の譜。」の一句がありますが、けだし紀實です。ここで一寸當時に於ける蘭芳の眞實の藝術のことを述べて置きます。蘭芳の習つた役柄は、青衣すなはち立女形で貞女節婦烈女に扮する役柄で、啓蒙の師を吳菱仙といひ、後現存青衣の泰斗である陳德霖の門に入つたのですが、資質聰明な蘭芳のこととて進歩も早く、上達してゐたに違ひはありません。しかし彼が人氣を得たのは、主としてその水際立つた美貌（李福麟氏の「蘭芳小傳」に「民國二三年間、善乃大進、色亦愈麗、容光煥發、俯仰如神」と形容してゐる）に依るものであり、その眞實の藝術は、専攻の青衣として完成せられてゐなかつたことは争はれません。この點は幼薇及び梅黨といへども皆氣附いてゐたのです。そこで蘭芳が上海から空前の聲譽を荷つて歸つて來ると、幼薇は梅黨を召集して、蘭芳の藝術を大成させるにはどういふ方法を取つたらいいかといふ事を相談しました。この時集まつたのが幼薇をはじめ李福麟、許伯明、舒石父、吳震脩、胡伯平及び新たに幼薇の友人に加はつた

齊如山、張聊子等でした。幼薇の發言に對して、李繩齋が先づ起つて、これまで通り宣傳に全力を傾注するが一等いい方法であるが、それには我々同志の結束を堅めなければならぬ。樊樊山、易哭庵のやうな老名士は、チト迷惑かも知れないが、我々だけでも結束して綴玉軒同志とならうではないかと提議しました。綴玉軒とは蘭芳の書齋の名で、綴玉軒主人といへば蘭芳のことなのです。これには衆もこより異議のあらう筈なく、ただちに一決、ついで本題に入つて、蘭芳の藝術をいかにして大成させるかといふ問題になると、甲論乙駁容易に決しなかつたが、結局この中で劇學に造詣最深い齊如山の意見が採用されました。齊如山は本名宗康、直隸高陽の人で北京同文館の卒業生です。彼の意見といふのは、一體青衣といふ役柄は、もはや行詰りつつある。女形は女としての種々相を具現しなければならぬものなのにこの善良な一面のみを演ずる役柄として「青衣」なる型をつくり、それを範疇として一步もその外に出てはならないなどいふ制限を附するのは、俳優の能力を局限するものである。我々は蘭芳をその狭い籠の中に閉ぢ込めることに不安を持つ。よろしく古いところで余紫雲、近いところで王瑤卿の例に倣ひ、青衣（立女形）花旦（色女形）の區別を超越した新式女形として蘭芳を發達させなければならぬといふのでした。これが滿場一致で採擇され、その實行方法については齊及び李繩齋の二人に一任されました。齊李二人は相談の結果、新脚本を提供することになり、詩人の羅瘦公を應援に頼んで、まづ「嫦娥奔月」を上演し、次いで民國四年に入つて有名な「黛玉葬花」を提供した。前者はむしろ失敗の作だつたが、後者は大成功だつた。紅樓夢第二十三回「西廂記妙詞通戲語、牡丹亭艷曲警芳心」の一段を脚色したもので、林黛玉が蘭芳の役。劇界第一の羊貌を以て、支那理想の美人に扮するのだから悪からう筈がない。賈寶玉は姜妙香が扮する。姜は蘭芳より先輩の青衣で、前清時代有名相公だつたことは、前述した通りです。略血してから青衣を止め、役柄を小生（色男役）に改めたのです。腰元紫娟は新たに蘭芳の弟子となつた姚玉美がやることになりました。姚は廣東生れ、子供のとき誘拐されたといふ例の第二種相公で、客に對していつも母のことをいつて泣いたといふので、老伶阿順（阿順は姚の少名）の名が高かつた。後袁世凱の懷刃趙秉鈞に落籍され、米人經營のミツシヨンスクール滙文書院に學んでゐたのですが、趙の死後退學し、劇界の返り新參として蘭芳の弟子になつたのです。

いよいよ脚本讀みも済んだので、吉日を選んで吉祥園で開演しましたが、果して大入り満員の盛況。ことに蘭芳の服裝がこれまでの型を破り、支那古代婦人の服裝であつたことが人氣に投じ、北京の劇界は暫らくはこの劇の評判で持ち切りでした。例の樊樊山は「葬花曲、爲梅郎蘭芳作」をつくり、「……當年黛玉悲秋の曲、同治の初年、時に一たび聞けり。桂宮紫稼（共に俳優の名）おこすべからざりしも巧玲（蘭芳の祖名）約略よく神を傳ふ。自からいふ環肥、燕瘦に輪すと、苦竹瀟湘微かに眞を失ふ。嬌孫（蘭芳をいふ）天與蓮花の面、藕作玲瓏心一片。身をもつて寫し入る葬花の圖、彩蝶よりも瘦せ、燕よりも輕し。……眼前一角沁芳亭、隔簾隱約たり梨香院。簾中誰か麗娘（牡丹亭の女主人公）の詞を唱ふ、麗娘の詞は花に比してまた艶なり。是れ誰か歌曲才緒簾の旁ら、四十年前の喬鄭香（有名な麗曲女形）洛下の璧人今老大、霸城の金狄幾煙霜ぞ。端なく來り顧みる梅郎の曲、一曲の臨川（牡丹亭の著者）よく腸を斷つ。吾が家の孟光今六十、髻年かつて聴く悲秋の笛。今舞榭に來つて蘭芳を看れば、香祖依稀としてよく記憶す。」と唱ひ、唱和する作も澤山出來ました。樊山のやうな詩人を宣傳係に持つてゐる俳優がどこにありませうか。彼は蘭芳の一劇が出るごとに、かやうな長詩をつくつて吹聴してやるのです。蘭芳が有名になるのはあたりまへです。「黛玉葬花」の次に出來たのが有名な「天女散花」です。先年蘭芳が日本に來たとき、帝劇で五日間この劇を演じたから、日本の讀者諸君にも御馴染だらうと思ひますが、いはゆる古裝歌舞劇の絶唱で、蘭芳の劇界に於ける地位を確立させたものです。今日蘭芳の名劇として知られてゐる、「西施」「洛神」「太眞外傳」等、皆この劇の脈を引いて居り、「霸王別姬」「紅線盜盒」等も多少趣きは違ふが矢張りこの系統です。

綴軒同志は玉裝歌舞劇の外崑曲の研究を蘭芳に勧めました。これは民國六年頃直隸の田舎から北京に復活して來た韓世昌一派（先年來朝、新編演舞場に出演）の崑曲班の影響もあるのですが、元來蘭芳は崑曲の本場である江蘇の出身、この新學にも可成りの成績を示し、民國八年わが帝劇に出演した折、「琴挑」「思凡」等を演じたことは、我々の記憶に新たなところです。

綴玉軒同志ほど堅い結束を持つた後援團體を、どこに發見出來ませう。勿論時々内輪もめはあるやうですが、馮幼薇の財力と統制力、及び蘭芳の調和力でどうにか納まつて行くやうです。さうして今度はたうとうアメリカ行とまで進んだやうですが、羨しい

限りです。蘭芳が或意味に於いて近代最大の支那人として認識されるとともに、綴玉軒同志の名も歴史に残ることになります。それだけのメリットはたしかにあります。

さて古裝歌舞劇の新聲を以て、一世を風靡した蘭芳は、民國六年更にいいチャンスに恵まれました。支那の市川團十郎として語られた名優譚鑫培が死んだのです。彼は久しい間劇界大王の名譽を擅まにしていたのですが彼が死んだとなると誰がその後を継ぐか。武生としての楊小樓、譚と同じ役柄の老生としての余叔岩、同じく劉鴻昇、女形としての梅蘭芳、この四人が先づ王位を継ぐ資格があると見られたのですが、有名な支那劇通辻聴花氏を記者に持つ日本人経営の順天時報では、これを機として劇界人氣投票を行いました。楊小樓や余叔岩は大してこれに興味を持ちませんでした。梅一派は眼の色を變へました。これに當選すれば名實ともに劇界の第一人になれるといふので、幼薇をはじめ血眼になつて運動した結果、同年十一月、二十三萬餘票で蘭芳が劇界大王に當選、次點の余叔岩が四萬二千餘票、楊小樓が一萬九千餘票でした。

つづいて民國八年五月の東京帝國公演、十一年にはじめて香港に出演し、彼地人士の熱狂的歡迎を受けました。民國十二年には上海に出演しましたが、この時の給料は月一萬五千元（旅費及び滞在費先方持）で、支那劇界空前の高給でした。十三年五月には大倉男爵（喜八郎）の米壽の祝のため帝劇に出演し、歸途資塚でも演じました。その後上海と香港に一度つつ行き、昭和五年に米國行の壯舉を決行した外、あまり北京を離れず（時々天津には出演しますが）、無量大人胡同の善美をつくした邸宅に納まり、私財十數萬を擁して豪奢な生活をつづけてゐます。

蘭芳の家庭には今雨田未亡人と、正夫人福芝芳、第二夫人孟小多がある。正夫人王氏は昨年病歿、前に述べた通り武生王毓樓の妹で、蘭芳がやつと一人前になつたばかりのとき、雨田未亡人の眼鏡に叶つて貰つた細君です。あまり美しい御亭主を持つて、絶へず心配したせいか強度のヒステリイで、生前四五年ズット病床にゐた。夫婦の間に子のないことも、ヒステリイの一原因だつたでせう。今第一夫人になつてゐる福芝芳は、女優青衣として第二流の筆頭くらゐのころだつたが、王氏に子供がないので馮幼薇

の盡力で第二夫人に納れた。王氏はじめ大分反對したが、何しろ「梅魂久しく馮家の有に屬す。」（梅蘭芳の夢）で、馮の主張は結局通りました。福芝芳は大柄な美人で、蘭芳ほどきれいではないが現代的な顔。もう子供が三人かある。正夫人王氏の死後第一夫人になつたのです。第二夫人の孟小多は女優老生で有名だつた。これは小作りの、福芝芳よりは數等美人、まだ結婚しない前、ある御邸に呼ばれて「梅龍鎮」といふ芝居を演つたが、小多が女優でありながらその劇の立役たる明の正徳皇帝になり、蘭芳は男優でありながら劇では女の李鳳姐といふ田舎の掛茶屋の娘になり、男女顛倒で大喝采を博したことがあります。それが縁となつたかどうか知りませんが、先年たうとう結婚しました。恐らく蘭芳が愛を感じた最初の人かも知れません。——巧玲未亡人は大正十三年日本再遊前に病歿しました。

蘭芳の私的生活はきはめて平凡です。大抵午後二時頃起き（夜が通ひで恐ろしい騒坊です）朝食といはうか晝食といはうか、とにかく第一食を済ませるとすぐ客間に出る色々な御客さんが詰めかけてゐる。外交家政治家新聞記者役者寫眞屋千客萬來である。外國の觀光團などは蘭芳を北京名物の一ツ位に心得て、遠慮なしにドシドシ押しかける。蘭芳が又それを愛想よくもてなすものだから、益々評判がよくなる。三時頃になると崑曲の師匠と武戲の師匠が来る。梅の演る芝居の中に武劇がかつたものも澤山あつて、「金山寺」、「蓮元盆」等）絶へずこの方の練習もして置かなければならないのです。四時から五時頃になると馮幼薇、李釋戡、齊如山等の綴玉軒同志が揃ふ。蘭芳のマネチャア格の姚玉芙も毎日来る。これらの連中は木戸御免で、自分の家同様にしてゐる。客間は外支折衷で、家具なんかも紫檀づくめで立派なものだが、綴玉軒同志はそよりも書齋の方が好きで、大抵その方に集まる。書齋には大の木製の馬鹿に大きいデスクが据へてあり、家具なんかも平凡な洋家具だが、連中にはそれが懐かしらしい。何となればそれは幼薇が買つてやつた北蘆草園の舊宅にあつたものだからだ。これらの連中が集まつて、芝居の方の用談が済むと、御多分に洩れず麻雀。夜は大抵宴會があり、十一時頃やつと舞臺に出る。大抵一時間位で済み、夜中の零時半位にハネる。又應酬がある。寢るのは大概三時頃になる。いつか勘彌や嘉久子が北京に來たとき、「某日午前一時半深澤候教」といふ招待狀を蘭芳から買つて、邦

人の大部分は面喰つてしまつたが、ナニ、綴玉軒の連中に取つては、午前一時半は普通人、午前九時位なところなのだ。

「芝草醜泉、固より必ずしもこれを士大夫に求めざるべき也。」と、綴玉軒同志の一人李釋載は、その「蘭芳小傳」を結んでゐますが、私もこれに同意です。近代支那に於いて、孫文の名は疑ひもなく第一位に置かるべきでせうが、蔣介石に至つてはまだ試験時代です。それに引きかへ梅蘭芳が、三十五歳の今日までの業績は、ともあれ歴史に残るだらうと思はれます。私は蘭芳の業績を認めるとともに、蘭芳をして今日あるを得しめ、その酬ひとして逆に蘭芳に依つて歴史に残るであらうところの馮幼薇の遺産を羨ますにはあられません。幼薇本名は耿光、さきの中國銀行總裁その人です。(同仁一九三二・一一)

迷途的羔羊

——最近の支那映畫——

十七年振りに見る上海、期待に胸を躍らせ浮々と甲板に立ちつくしたが、黄浦江に入つて暫らくは目立つた變化はなかつた。蘇州楊柳、小さい流れ、——十七年前とは勿論、はじめて上海に行つた二十八年前と較べても、依然たる大陸の風物に變りはなかつた。ただ、遡るに連れ、兩岸に、工場の建物が多くなつたのを除いては。しかし、やがて、いよいよ上海に近づいて、左岸に巨大な城壘風の近代建築を望見したときには、流石に十七年の隔たりを認めないわけに行かなかつた。

「プロオドウェイ・メンション」といつてネ、二十何階あるアパートですよ。サツスンといつたか何でも猶太系の資本家が、土地建物の投資を研究しつくして、上海が一等有利だといふんで、あんなデツカイのを建てたんです。最新式の建築で、どの室にも光線がファンダンに入り、暗い室は一つもないといふんで、もうみんな満員になつてゐます。味を占めて、同型のアパートを、もう三つづつくる豫定だそうです。」

同船した、上海D.P.公司のH氏が説明して呉れた。

上海日報の友人が紹介して呉れた公ホテル——二流だが、靶子路からちよつと引込んだところに在つて、涼しいのが取柄。主人は上海事件の犠牲者になつたとかで、今の經營者はその未亡人。——に落附くと、T・Hがやつて来て、色々プログラムを立てて呉れた。上海には十五年もある顔役で、隅から隅まで知つてゐる。私とは十年そこそこの交際だが、支那研究の方向を同じくしてゐるのと、「解衣寬膊」の氣稟の一致とで、随分親しくしてゐる。翌日から、彼の東道で方々見て、廻つたり、資料集めをやつたりした。金融資本閥の根城で、二十何階のパーク・ホテルに登つて、ネオンに輪廓附けられて、クリスマス菓子の子のやうに見える建物を眺めたり、東洋一のダンスホールといはれる「メトロポール」(大都會舞廳)で、朝鮮人のダンサーのシツクリあつた支那服を好

もしく見たり、ハイライ(回力)を見物に行つて、頽廢支那の一部をのぞいたり、十仙出すと、芝居、漫才、講談、落語、レボウ等々を盛澤山に見られる先施樂園、永安樂園(これも同名のデパートの経営)に感心したり、時にはK、Oなどの舊知を誘つて、猫と鼠の花牌を入れた、上海ルールの麻雀をやつたり(猫も鼠も、ともに一騎だが、鼠を先にさらすと、猫を持つてゐる人は、上家、下家、對家に「吃」といつてそれを取ることが出来るのだ)すべてTの引き廻すままだったが、ただ私のリードしたのは、支那劇見物だった。四川の劇團を一度(唱は北京劇の皮黄と秦腔との中間的のもので、嚙子方が併唱に助唱するのが特徴)麒麟童、小楊月樓、金少山一派の北京系統の劇を二度見たが、いづれも物足りなかつた。一體上海の劇は、もともと北京系統のは駄目で、新作劇の全盛地だったが、近年はことに衰へ、新作劇も純粹の新劇に取つて代られ、それも最近では映畫におされてしまつてゐる。新聞の廣告などを見ても、映畫の方がはるかに優勢なことが肯づける。畢竟北京系統の舊劇などは、日本の文藝見たやうになつて行くのだらうと感ぜられた。

實際上海の映畫熱の盛んなことは、私の豫想だになかつたところで、耻づかしかつた。映畫館にしてからが、私の見たグラウンド・シアタなどは、廣さはさほどでもないが、内部裝飾の清楚で、且つユッタリしてゐる點では、斷然東京以上である。東京のは日本人流に寸分の餘地も剩さないやうに、利用し切れるだけ利用してゐるので、コチャコチャした感じだが、上海のは充分の餘地を存し、鷹揚なところが氣持がいい。だが、館はどうでもいい。私の驚いたのは、僅かに二十年そこそこの歴史しか持たない支那映畫の發達振りだつた。

「あなたは、最近の支那映畫を知らないから、さういふんでせう。だまされたと思つて、一度見て下さい。何しろ資本の缺乏で、全上海で、年に入九本の製作しか出来ぬ状態ですが、それだけ眞剣にやつてゐます。足りない金を集めてやるんだから、失敗が何よりコワイ。出来るだけ慎重にやる。『窮愁、書を著はす』といふ支那の言葉があるが、濫作からいいものは産れませんかネ。」

「……。」

「だから最近のものは、よく現實を把握し、上映の結果は、絶對的に大衆の支持を受けます。蔡楚生導演の『漁光曲』などは、八十

二日間續映のレコードをつくつたくらゐです。どうです？ 幸ひ蔡の監督のが、二三日中に金城大戲院で封切りされるさうですから是非見て下さい。」

T・Hの讒合ひの支那人Cは、かういつて勧めるのだ。題目は「迷途的羔羊」(ロスト・シープ)。新聞の廣告を見ると、全面に「轟動！ 轟動全市！ 明日之上海、千萬影迷、如醉如狂！」(影迷はファン、影は電影映畫のこと)とか、「空前未有、二十年來、中國電影最大成功。」とか、盛んに出てゐる。面白さうだと思つたので、T・Hと三人で見ることにした。

——結果は、少なからぬ感銘を受けたことを自白してもいい。その翌翌日、國民同盟のK代議士が来て、農村問題を研究したいといふ話だつたので、T・Hと私は早速金城に案内した。

「築地小劇場のやうだナア。」と、賞嘆してゐたが、翌日會つたら、「大朝から倫敦に行くK君が来たから、今日は僕が案内して、アノ活動を見たよ。ホントウの支那を見た、てんで、大いに喜んでたよ。」こんなわけで、K代議士もT・Hも、私も、同じ映畫を二度見たのだ。素人の眼だけれども、三人寄れば、そんなに棄てたものでもなからうと、ここに紹介する氣になつたのである。

どこか判らない。作者も明示もしてゐないが、要するに支那の農村到るところに展開される場面である。貧乏小作人(濠洲——俳優名、以下同じ)の子供の小三子(寫佐也)は、それでも熱に通つてゐるが、頑固教師に頭をなぐられたり、仲よしの女の子翠兒(陳順々)遊んだり、村中の子供を兩軍に分け、彼が一方の大將になり、村のこはれた土塀を長城に見立てて、戦争ゴツコをやつて、敵の大將を降参させたり、無邪氣な村童の一日一日を送つてゐる。貧しいが、まづ平和な農村。月の夜である。村中の老弱男女は、大樹の蔭に涼みながら、唱の上手な翠兒の聲に和して、單調な悲しい歌を唱つてゐる。

月光光、照村莊。村莊破落炊無糧。租稅重重稻麥荒。

月圓圓、照籬邊。籬邊狗吠不能眠。饑寒交迫淚漣漣！

迷途的羔羊

月朗朗、照池塘。池塘水乾種田難。他鄉流落哭道旁！
 月亮亮、照他鄉。他鄉兒郎望斷腸。何時歸去補新秧？
 月依依、照河堤。河堤水決如山移。家家冲散死別離？
 月黯黯、照荒場。荒場屍骨白如霜。又聽戰鼓起四方！
 月涼涼、照羔羊。羔羊迷途受災殃。天涯何處覓爹娘？
 月明明、照天心。天心不知兒漂零。風吹雨打任欺凌！
 月微微、照海水。海水奔流水不回。苦兒無家不得歸！
 月淒淒、照破衣。破衣單薄碎離離。凍死道旁無人理！
 月茫茫、照高房。高房歡笑如顛狂。苦兒饑饉正彷徨！
 月慘慘、照海灘。海灘無人夜漫漫。苦兒血淚已流乾！

忽ち静寂を破つて馬蹄の音がする。土匪の襲來だ。掠奪、××、さうして血氣盛んな百姓は、土匪の荷物を荷ふ人夫として強制的に徴發される。小三子の父も、翠兒のも、その中であつた。後に殘された小三子は、祖母を頼りに一日一日を送るが、やがて早害がやつて來た。土匪が又やつて來る（小三子の父は、逃走をはかつて銃殺される）、それに劣らぬ亂暴な討伐軍がやつて來る。土匪を追ひ散らしたのはいいが、飛行機からの爆彈投下で、村中はメチャメチャになる。

ちやうどその時、上海の慈善家沈慈航（元百粵）が、汽船を持つて村の救済に來てゐたので、村のものは沈の船、又はその他の民船で上海に逃げる。祖母の死を見送つた小三子は、翠兒とは離れ離れに、沈の老僕（舊君里）の好意で、沈の船で上海に送られる。

上海に着いた小三子は、人力車の後押しをしたり盲目の按摩の杖引きをしたりするが、最後には乞食になつてしまふ。カッ拂ひこそまだやらないが、ゴミ箱をあさつたり、沈家の老僕に殘飯を貰つたり、天涯流落の苦兒となつて、この港都を彷徨する。風雨

の夜死んだ雀を懷ろにして、野原に葬つてやるほどの、でも彼はやさしい少年であつた。たうとう彼は行倒れた。紳士がそれを見ている。

「こんな手合ひは、よく死んだ眞似をするもんだ！」

彼を救つたのは、上海生へ抜ききの街の子である。小ルムベン隊の一人である。小三子も終にこの一隊のルムベンになつて、唇拾ひをはじめた。

又、月の夜である。小ルムベン隊は、上海のバンドに集まつて、月光曲を唱つてゐる。（前編七以下）その中に、小三子は翠兒を發見する。

「上海に來てから、御母さんが死んだのよ！」

「やつぱり御前もそんなに苦しい目にあつたのか！」

二人は相擁して哭く。——深夜の黄浦江に故意か、過まつてか、身を投げた紳士があつた。大慈善家沈慈航である。妻子に先立たれた彼が迎へた後妻（黎約約）は、美人だが名打ての不良ママで、若き燕（劉堪）を連れて内を外に出歩いてゐる。自暴から酒びたりになつてゐる沈だつた。小ルムベン隊が沈を救ひ上げる。その翌日、沈家の老僕を尋ねた小三子が、沈の子供の古洋服を買つて沈家の庭を通りかかると、沈はそのあまり自分の死んだ子に似てゐるのに心を惹かれ、イヤがる沈夫人をダイヤで説き伏せ、終に小三子を養子にする。さうして學校に通はせるが、素性がバレて級友に馬鹿にされる。紛失ものがあつたりすると、皆小三子のせゐにされる。一方沈夫人は、若き燕との關係を小三子に知られてから積極的に小三子を邪魔にし出しダイヤの指環を若き燕にやつて置きながら、小三子が盗んだのだといひ立て、たうとう小三子を逐ひ出す。老僕が小三子をかばつたといふので彼も一緒に出される。

老僕と小三子は、小さい家を借りて住む。翠兒等のルムベン隊がやつて來て、共同生活をはじめめる。それから種々の情節があつ

て、最後に老僕の死。小三子を首領とするルムベン隊は、いよいよ極つ拂ひになる。沈慈航の救済隊が、上海の埠頭に食物を集めて、今や船にのせよとしてゐる。ルムベン隊がそれを掠奪する。忽ち號外の鈴の音沈慈航の不正事件が発覚したのだ。警官隊が走つて来る。沈と夫人は眞青になつて自動車で逃げる。ルムベン隊はルムベン隊で、自分等を捕まへに来たのだと思つて、われ先きにと上海の街々を逃げ廻る。彌次馬が追つかける警官が迫る。追ひ詰められた小三子等は、終に作業工中の大ビルディングの絶頂にのぼる。そこは二十數階の高さで路行く人が蟻のやうに見える。天涯流落の一群の苦兒が、欄に倚つて見おろす下には、薄暮の大都會が霧のやうにひろがつてゐる。……

技術的にいへば、素人眼にも難がある。録音の不完全も蔽ひ切れぬ。とても日本物にはまだ及ばぬが、一生懸命にやつてゐることは門外漢にも理解出来た。

主役の小三子に扮する葛佐治は、當年十三歳の一少年である。上海のある富豪の子ださうで、はじめてこの映畫に出演したアマチュアださうだが、その表情のうまさ、氣品のある美貌と相待つて、非常な効果をあげてゐる。金持ちの子である彼が、どうして乞食や、街の子をアレまでに表現し得たか？たしかに天才であると思ふ。ロケーションのとき上海のフランス租界であつたが、支那人巡查かそれと知らず、ホントウの乞食と思つて、棒でなぐつたといふエピソードが傳へられてゐるくらゐだ。

葛佐治に次いで老僕になる鄭君里、これは當年二十三歳の大學生ださうだ。眞摯な藝風である。沈百寧、黎灼灼等はすでに定評のある連中で、配役であるし、評するほどのことはない。ただルムベン隊の少年どもの仕草は、上海の街の子ソックリで、T.H.顔役も「實にうやく演つてる！」と感嘆これを久しうしたから、よほどうまいのであらう。主題歌のうち「一六は農村の場で七一二は上海埠頭で唱はれる。譜は昨年頃全支那を風靡した「漁光曲」(矢張り蔡楚生の監督に成る映畫主題歌)のそれと同じだといふことだ。歌の文句は、漁光曲以上の沈痛なもので、支那の現状にピッタリ當嵌つてゐる。日本映畫の主題歌とは、面白い對照であらう。

要するに、「支那のルムベンが、いかにして出來上るか？」といふ問題を、寫實手法を用ひて我々に提供したものであつて、ことに我等外國人には「これが支那の現實であらう？」と、考へさせられる點、一見の價值充分だと思ふ。八月創刊の「現世界」誌の中で、王達夫といふ人が「支那映畫の質的改良は、甚だ遅々たるものであつて、落後せる階層に媚びることしか知らぬ類廢映畫が大部分を占めてゐるが、蔡楚生が新寫實主義を標榜し、「漁光曲」を出すに及んで、新興映畫は質的に一變した。「迷途的羔羊」は、より一層嚴密に社會の現實を把握して居り、導演手法も一段の進歩を示してゐる。かくてこそ、はじめて我等の映畫である。」と、評してゐるが適評である。

支那のことは、新聞電報だけでは決してわからぬ。その他の手段が必要であるとすれば、映畫などは最切要な手段ではあるまいか？日支文化提携の聲ばかり高くて、まだ支那映畫の輸入せられたことを聞かぬが(新聞かも知れぬが)遺憾である。差當り本映畫でも輸入して見てはどうかと、無骨な、臍の尾切つてはじめての映畫批評をやつたのである。二三不穩當なところをカットすれば、輸入は必ずしも不可能ではないと思ふ(改造一九三六・二二)

支那惡童物語

—支那版・いたづら小僧日記—

一 小坡とその妹

兄貴は、御父さんが大坡で支那雜貨店をやつてたときに生れたから、それで大坡といふんだ。小坡は？ 御父さんの店が小坡に引越した後に生れたからだ。小坡より大坡の方がいいが、ともかく、レッキとした來歴のある名前だから、この上文句はいはん。

だが、妹は、やはり小坡で生れたのに、小坡ともいはず、小小坡、二小坡でもなしに、仙坡といふのはどういふわけだらう。新嘉坡には、仙坡といふ町はないんだ。新嘉坡の町々は、はばかりながら小坡の繩張りで知らぬ町などないんだが、仙坡なんていふ町はどこにもない。どうして妹が仙坡なんだ？ 兄貴も小坡も娘の子ぢやないのに、仙坡だけどうして娘の子なんだ？

御母さんは、兄貴に大坡の溝から拾つて來たんだといふし、さうして小坡は、小坡の電信柱のところから拾つて來たんだといふし、仙坡は、バナナの林の葉の中から抱いて來たんだといふ。何だかわけが判らん。

御父にさん聞けつて？ 飛んでもない。天の下、地の上で一等恐ろしい人が御父さんだ。何をきいても、首を振るばかりで、返事もして呉れん。ウルサクいふとひつばたかれる。

「五月蠅い！ 口を縫つてしまへ！」

かうとなるんだ。口を縫はれたら、歌が唱へないぢやないか？ バナナが喰へられないぢやないか？

兄貴にきくと繪本をみんな隠してしまふし、仙坡にきくと、

「御母さん！ 又兄さんが、どうして仙坡つていふんだつてきくのよ！」

と御母さんに告げ口する。さうすると御母さんは、もう仙坡と遊ばせて呉れん。これが一等困る。御父さんは仙坡を可愛がるし御母さんも兄貴もさうだし、それより餘計可愛がりたいのが小坡の心意氣なんだから。

結局御母さんにきく外ない。御母さんの話は、きく度びに變るんだが、いつだつたか、問ひ詰められて、あのやさしい眼をくるくるさせながら、

「それはネ、夜にネ、白髯の仙人が、かかへて來て呉れたんだよ！」

小坡は、これはいいいことをきいた哩、とテーブルの下の蜜柑を指していつた。

「御母さん、僕も昨夕白髯の仙人に遇つたよ。さうしたらネ、仙人はネ、小坡や、お前にこの蜜柑をやるよつてネ、テーブルの下に置いて行つたよ。」

御母さん、仕方がないもんだから、蜜柑の籠をあけて、みんなで喰べることにした。それからといふものは、白髯の仙人の話をしなくなつた。だから妹がどうして仙坡といふのか、矢張り分らないんだ。

兄貴の大坡は、御父さん御母さんを喜ばせようと思つて學校に行く。小坡も學校に行くが、——それは名ばかりで、毎日エスケープするために行くやうなものだ。頭痛がするといつて家の中に寝轉んでたことがあるが、一べんでこりこりした。御母さんたら、何度でも見に来るんだもの。落着いて遊べないぢやないか。御母さんが來るたびに、頭痛の風をしたり、空せきをしたり、たうとうしまひには、可笑しくなつて吹き出したら、御母さんは怒つてイヤといふ程なぐつた。それだけならいいが、御父さんにそれをいひつけられたのは閉口した。誰が恐はいつたつて、御父さんくらぬ恐い人はない！ うちの門番の印度人は小坡の崇拜する「偉人」だが、この偉人でも、時々御父さんに小ツビドクなぐられるんだ！ だから、もし假病して學校に行かぬことが判つたら大變だ。あの大きな掌で、八回は打たれる覺悟をせねばならん。金の指環をはめてるから、それが頭に當つたらことだ。橄欖の實くらゐな實ぶくれが出来るんだ！ だから兄貴と一緒に學校に行くのが、先づは上分別。さうして、先生がゐるねむりしてゐるとき

か、机の上で一生懸命調べものをしてゐるときに、コソコソ抜け出して、街で遊んだり海岸で遊んだりするんだ。時刻を見計らつて、又コソコソ教室に歸り、知らぬ顔して兄貴と一緒に歸つて来る。兄貴とは組が違ふから、彼は何も知らん。彼が知らねば、御母さんも知らず御父さんも知らぬ。一體、一軒の家の中といふものは、塔のやうなものだ。御父さんなんて、塔のスタッツペンにすはつてゐる馬鹿坊主見たいなもので、一番下で何をやつてるか、何も知らないんだ！可笑なものさ！

ただ妹だけは、巧くごまかさんとアブない。小坡から色んなことをきいちゃ、それを御母さんに告げ口するんだからね。しかし細工はりうりう。白墨だとか、鉛筆の端とかを賄賂につかふ。さうすると彼女は、完全に祕密を守つて呉れる。しまひには、今日もエスケープしたといつても、仙坡はそれを信じないやうになる。勿論、賄賂は絶やしてはかんが。

「妹を可愛がつとけば、エスケープしても危険はない！」

小坡は友達に、いつもかういつて教へてゐる。

小坡には二つの望みがある。仙坡といつてもこれについて語り合ふのだが、——それは印度人の門番と、馬來巡査になりたいといふことである。

印度人の門番は、大きな白い布で頭を包み、黒紅い大きな顔、長いひげ、高い鼻。くぼんだ眼。立派で、いかにも福相だ。大きな白いシャツ、それにはたくさんのポケットがついてゐて、落花生、檳榔、カステラなどが入れてある——と、小坡は信じてゐる。きれいなズボンを穿いて、その下から黒くてツヤのある大きな脚がニユツと出てゐる。朝から晩まで、大した仕事もなく、門のところに腰かけて、にぎやかな町を眺めてゐる。夜になると室の中に這入つて寝なくてもいいんで、門の前に寝て、商賣屋の蓄音器を聞いてゐればいいんだ。こんないい商賣はないと、小坡は思ふのだ。だから彼はいつも仙坡にいふ。

「仙や、お前が大きくなつて店を開いたら、僕が門番の印度人になつてやるよ！」

馬來人の巡査も、小坡の大好きな商賣だ。脊中に、簾でつくつた大きな板見たいなものを背負つてゐる。その両端が一尺くらゐ

身體からはみ出してゐる。ちやうど十字架のやうだ。彼が南を向くと、南北に通つ自動車、馬車、電車、人力車、牛車、みんなとまつてしまひ、東西に通るすべての車が馳せ去る。東を向くと、その反対になる。町の司令官だ。仙坡も、小坡が馬來巡査になるのには大賛成だといつた。

「小さい兄さんが、馬來巡査になつたら、あたゝい見に行くよ！」

二人種問題

小坡は、自分が福建人なのか、廣東人なのか、印度人か、馬來人か、白色人種か、日本人か、ハッキリ判らないのだ。近頃になつて、彼は、少くも日本人ではないと思ふやうになつた。新嘉坡でも、皆が「打倒日本」、「日本貨をボイコットせよ！」といひはじめたからだ。支那雜貨店を開いてゐるお父さんなんか、特別に聲高く「打倒日本」を叫ぶ一人だ。日本人はどうしてこんなに嫌はれるんだらう？ 不思議に思つてゐるが、兄貴の地理書で、はじめて日本の圖を見たとき、彼も日本が嫌ひになつた。油條(油で揚げた細長い食べ物)見たいな國ぢやないか！ こんなカツコウをした國だから、嫌はれるのはあたりまへだ。

小坡は一つの寶物をもつてゐる。彼の一番大切なものだ！ どこからそれを持つて來たのか、誰も知らないのだが——一枚の紅いシユスだ。長さが四尺、巾が五寸くらゐ。彼はそれをいつでも肌身はなさず持つてゐる。いつかこれを學校に忘れたときは、大さはぎだつた。あをくなくなつて取りに行つたが門はもうしまつてゐた。門番の印度人は、どうしても開けて呉れん。わんわん泣いてゐたら、残つてゐた事務員や、學校に住んでゐる先生達が吃驚して飛んで來て、門をあけて呉れた。そこで彼は教室からそれを取り出して來たが、あまり癪にさはつたので、矢庭に印度門番を蹴りつけて置いて、ブンブンしながら歸つて來た。しかし印度人を蹴つたのは悪かつたと氣附いたので、その晩御父さんから貰つた落花生のうちから、小さいのや蟲のくつてるのを喰べないで残して置いて次ぎの朝印度人にやつてあやまりをいつた。印度人は、こんな變な落花生を受取らなかつたばかりか、蜜柑を一つ呉れた。酸ッばい奴だつたが。

小坡の寶物は、何にでも使へる。頭にまくと印度人になるし、腰にまくと馬來人になる。御母さんの口紅を盗んで来てそれを口に塗ると、檳榔を喰つて赤くなつたやうに見える。そこで馬來人の風を眞似て、地ベタに坐つて、手でカレイスを喰べる眞似をする。時によると、仙坡の針を借りて来て小さい丸帽子に縫ひ上げる。さうして二つの小さいヨシカケを持つて来て、一臺に色んな品物を並べ、一臺に自分でこしかける。これはアラビヤ人の商賣人なんだ。

「仙や、お前は御婆さんになつて、何か買ひに来るんだ。ネギらなくちや駄目だよ！」

仙坡も腰をかがめて御婆さんになり、兄貴のカバンを提げて来て、タバコの空きかんや、壊れた鐵皿やを買ひに来る。

同じ支那人のうちでも、どんなのが廣東人だか、福建人、上海人だか、小坡はよく知らないんだ。しかし何とか見當をつけることは出来る。皆が、御父さんを廣東人だといふから廣東人てのは、御父さんに似た人だらうと思ふんだ。福建人は？ 隣りの信和洋貨店の主人が福建人だ。御父さんの福建人嫌ひと來たら、トテモ大變で林さんを憎むこと日本人と同じだ。

「福建人は、愛國といふことを知らん！」

御父さんはいつもかういつてる。だが、小坡の見るころでは、林さんは肥つてニコニコしてゐて、至極いい人だし、賣つてる品物だつて、綺麗で氣が利いてる。人形だつて——仙坡は御嫁に行くときには、眼玉のクルクル廻る人形を、林さんの店から買つて行くといつてゐるくらゐだ。

林さんのやうなのが福建人だとすれば、福建人は金齒が一つしかないのだらう。小坡は金齒はいつでも入れられることを知らないで、御父さんや、その他の廣東人が、全部金齒なのに、福建人だけは一つしかないのだと思つてゐる。林さんは整つた脚裝をしてゐて、言葉付きもていねいで、御父さんのやうにドナらないし、イヤなシガーものまない。夏になると、長い、膝のかくれるくらの着物を着る。だから小坡が福建人の眞似をするときは、例の寶物の紅い巾を背中にかけ、黄色い紙で一つの齒を金齒にし氣取つて歩くことにしてゐる。御母さんは、

「廣東語も福建語も分らないで、キチンとした洋服を着てるのが上海人だ」

といふ。そこで小坡が上海人の眞似をするときは、着物をキチンと着て、妹と二人で、一種特別の言葉でものをいふ。それが上海語のつもりなんだ。

外國人はよく分る。顔色、鼻、髪、眼、みんな特色があるからだ。外國の軍人も多い。そこで小坡は、例の寶物の紅い巾を小さくたたんで、腰に捲きつけ、それで軍服のバンドのつもりにしてゐる。

ともかく小坡の人種學によると、顔色の黄いなのは、黄色が好きなためである。黒色の好きなものは、顔色が黒くなるのださうだ。それから、街で遊ぶ子供等は、皆馬來語を話すので、人間の源は、皆馬來人だと思ふのである。

三 新 年

全世界の小さき友よ！ 諸君は小坡の年賀状を受取つたか？ 或はまだ着いてゐないかも知れないが、小坡は決して諸君を忘れたのではない。

御父さんは、年末に年賀状を出した。紅い紙に金字で印刷した奴で、紅い封筒に入れてある。小坡は仙坡に頼んで一枚貰つて來た。さうして御父さんの名前を消して「小坡」と大きく書いた。書くときに墨がこぼれたので、それを利用して兎と龜の畫を描いた。封筒は兄貴に書いて貰つた。

「全世界の小さき友へ」

この「全世界」といふのは、新嘉坡のことである。小坡のつもりでは。さて、全世界の小さき友よ！ 諸君は小坡のこの年賀状を受取つただらうか？ 實は大變覺えないのである。たつた一枚の年賀状で、全世界の子供のところへ一々廻つて行かうといふのだから、なかなか廻れないのだ。アイルランドへ行つたかも知れん。メキシコかも知れん。それから、もう一つ困つたことには、小坡の年賀状には、郵便切手が貼つてなくて、煙草に入つてゐた小さい繪が貼つてあつたからだ。

小坡の住んで新嘉坡といふところは、春夏秋冬の區別がなく、一年中暑いところである。常盤樹も何もない。一年中葉は青い。花は不斷に咲いてゐる。蟲はいつでも鳴いてゐる。小坡の脚はいつでもまる出しである。皆、毎日アイスクリームを喰へてゐる。こんな土地だから、小坡が新年の御祝ひをするときは、矢張り暑くて、花も咲いてゐるし、蝶々も飛んでゐる。全世界の小さき友よ！ 小坡に御年玉を呉れるなら、雪の罐詰めが一等いい。彼は生れてからまだ雪を見たことがないんだ！ 彼は雪は紅いかも知れんと思つてゐるんだ！ といふのは、いつか結婚式を見たときに、紅い小さく切つた紙を二階から散らしたツケ。

「これが雪なんだらう！」

と、彼が思へば、仙坡もさう思つてゐる。御母さんも廣東人だから、雪が白いか紅いかハッキリ知らぬ。彼女も雪を見たことがないんだ。可愛想な小坡！ と、諸君は思ふだらうが、全世界の小さき友よ！ さうではない！ 小坡が知つてゐて、諸君の知らないものも澤山あるんだ。諸君はバナナの樹を見たことがないだらう。小坡のうちの裏庭には、十何本もある。長くて香ひのいいバナナが枝もたわわになつてゐる。皆青いんだよ！ 蓮のわかい葉よりもつと青いバナナだ！ バナナついていふものは、黄色いんだよ！ 脊中に山のある白牛を見たことがあるか？ さざえより大きいかたつむりを見たことがあるか？ 全世界の小さき友よ！ もし小坡に御年玉を贈るならば、彼はこの大かたつむり二匹を、返禮として贈るであらう。彼の機嫌のいい時だつたら、その外に藍色のバナナや、三脚の牛の繪などを描いて贈るかも知れん。

新嘉坡には色々な人種がある。紅、黄、黒、白と、顔色の違ひはあるが、皆新年の御祝ひをする。紅い支那鞋を穿いた纏足の御婆さん、洋服の娘、頭に小さい辮子を結んだ御爺さん、足をむき出しの子供、皆喜んで新年を迎へる。基督教の教會から鐘が聞へるかと思ふと、支那の和尚廟でも支那音楽の音がする。蟲は朝から新年の歌を唱ふし、花は香ばしく咲いてゐるし、靑空には太陽が笑つてゐるし、——街には、色取り取りの國旗がひるがへつてゐる。一個の錦繡世界！ それが新嘉坡の新年だ。

小坡は？ 忙しくてたまらないのだ。朝、鳥の聲と一緒に起き、裏庭で蟲に歌を唱つてきかせ、室に歸つて仙坡を起して御目出たうといひ、「二喜」に湯をつかつてやる。「二喜」は小さい白猫で、頭に二つ黄色いまだらがある。それから御母さんに附いて、市場に買物に行く。新嘉坡は暑いので、食物を買つて置けないから、新年でも買物に行くのだ。小坡は買物が上手だ。馬來語がうまいし、懸引きも心得てゐるし、負けぬ時には、商人どもの麥ワラ帽を隠したり、腋の下をクスクツたりするので、商人はかなはんといつてる。

大籠一杯買物をして、印度人のやうにそれを頭にのせ、玉のやうな汗をかきながら、小坡が歸つて來ると、下女の陳婆さんが、ニコニコしながらそれを受取る。陳婆さんは一日十八時間眠る女だが、今日は眠くないやうな眼をしてゐる。

御父さんも店に行かないで、花や草をイチヂつてゐる。一たばのバナナを取つて來て、室の中をかけ、五色の紙を張り廻す。兄貴はありつたけの金を出して爆竹を買つて、門口でボンボンやつてゐる。仙坡は耳をおさへてそれをきいてゐる。小坡は臺所へ行つたり、庭へ出たり、爆竹のところへ行つたり、もし彼が靴を穿いてゐたら、靴はきつと破れただらう。幸ひ彼はむき出しの足だ！ 朝食だ。澤山皿が並んでゐる。御父さんから御年玉を貰ふ。仙坡は小さいコーヒー・セット。小坡のはステーションヤレールの附いてゐる汽車だつた。

「やつぱり新年はいいなア。」

小坡はかう思つた。

朝食の残つたのは、乞食にやる。小坡と仙坡は門口に立つてゐて、乞食の來るのを見張つてゐる。御父さんはいい加減酔つたと見えて、藤椅子に寝ころんでゐる。兄貴は喰べ過ぎてグツタリしてゐる。二喜は魚を一匹もらつて、裏庭で喰べる。小坡と仙坡は、門口で乞食を待ちながら、新しいオモチャで遊んでゐるが、くたびれたと見えて、門に倚りかゝつてゐねわりはしめた。静かな晝、何も音がしない。鳥も、緑葉の蔭にかくれて眠つてゐる。トンボも葉のさきへとまり、靜かに羽根を動かしてゐる。椰子の大きな青い葉が、上下に動いてゐる。ただひとり忙がしいのは蜂だ！ プンブンいふその聲は、ますます人を眠りに誘ふ。

街では馬車も牛車も動いてゐない。——おう、聲を出してはいけない！ 小坡がよく眠つてゐる。仙坡も眠つてゐる。黒い髪の毛に花びらが三ツ四ツ……

四 花 園 に て

新年は、ほんたうに面白かつた。だが、残念なことには、新年もふだんの日とおなじで、すぐたつて行くのだ。御父さんは店に歸つて行つたし、御母さんはもう御馳走をつくつて呉れんし、陳ばあさんも又十八時間眠るやうになつた。御父さんの呉れたおもちゃにもあいて了つた。仙坡のコーヒー・セットは、碗が一個なくなつた。小坡の汽車のレールもこはれた。

御母さんと兄貴は家にゐない。陳ばあさんは眠つてゐる。小坡は汽車とレールとステーションを持つて、花園に出て行つた。急行列車を走らせようといふのだ。仙坡が垣根のところまで淡黄色の花を並べて、なにかやつてゐる。

「仙や、何をしてるの？」

「二喜に頸飾を編んでやるのよ。」

「やめろよ！ その花を汽車にのせて運ばうよ。」

「いいわ、でもどこへ運ぶの？」

「吉隆坡さ。」

御父さんは用事でいつも吉隆坡へ行く。汽車に乗つて行くだから小坡は、汽車は皆吉隆坡へ行くんだと思つてゐる。

「ぢや、早くのせうよ。」

二人で花を一つ一つのせた。小坡はレールをうまくつくつた。汽車をアッチへ動かしたり、コッチへ動かしたり、花をのせたり卸したり、花はしなびてしまつたし、レールも悪くなつて、度々脱線する。

「ツマラないア。」

「何か外の事をして遊ばうよ。」

「南星と三多を呼んで来よう。」

「御母さんに叱られてよ。」

「今ゐないから大丈夫だ。ちよつと待つてろよ。」

小坡は横ッ飛びに走つて行つたが、しばらくすると一小隊ほど友達を連れて来た。馬來人の姉妹。三人の印度人の子供、二人が男で一人が女の子。福建人の男の子と女の子。廣東人のふとつた子。

馬來人の姉妹は、白い上衣に、模様のあるスカート、金の腕環をはめてゐるが、足はむき出しだ。雙生兒なので、どつちが姉か妹か分らぬ。おとしなしい子供だ。

印度人の子供は何も着てゐない。腰に赤いパンツをつけてゐるだけである。

皆集つた。南星(廣東人の子供)はすぐ小坡の汽車を見附けた。

「汽車ゴッコをやらう。おれが運轉するんだ！」

彼は汽車に飛びついて離さない。小坡は、仕方がないから南星に譲歩した。といふのは、彼等のうちで、ほんたうに汽車に乗つたことのあるのは、南星だけだつたからだ。汽車に乗つただけでなく、南星は、汽車の中でカレーライスを喰つたことさへあるのだ！

印度人の子供の親爺は、ステーションの切符賣りである。そこで、彼等は呼び出した。

「切符はここで賣るんだよ！」

(彼等の話は、皆馬來語——南洋の「世界語」——なのだ。皆、何かしら草を持つて来て、それを紙幣の代りにした。「かう、人が多くちや困る。おれが巡査になつてやる。女の子が先きに買ふんだ！」)

小坡が、巡查の役を買って出た。女の子を先きに立てて、草を渡すと、印度人の子供が木の葉を一枚づつ呉れる。それが切符なんだ。

南星が腰を高くあげ、汽車を推すと、そのアトから、皆が二列になつて、同じやうにして喰附いて行く。口の中で、絶えず、

「ゴットン、ゴットン。」

と呼びつづけながら、花園を一廻りした。

「カレーライスを喰べるんだ！ カレーライスを喰べねば汽車に乗つたとはいへないんだ。」

南星の命令一下、汽車をとめて、手でカレーライスを喰ふ眞似をする。

元氣一杯の南星が先頭に立つて行くので、女の子たちは汗だくになつてしまつた。馬來姉妹が一等弱つて、

「いつ、吉隆坡につくの？」

小坡が勿體ぶつて、

「まだまだ遠いよ。着いたら僕が知らせるさ。」

その實、小坡はまだ吉隆坡に行つたことがないので、どこで汽車をとめたらいいか知らないんだ。花園を七八回も廻つたとき、南星が偶然小坡の玩具のステーションが垣根のそばにあるのを見附けた。

「着いた！」

と、地面にころがる。流石の彼もくたびれたのだ。

「こんなにくたびれるんなら、汽車なんてもう乗らないわよ。」

——馬來姉妹が眞赤な顔をして嚙きながらいつた。

汽車ゴッコにあいた彼等は、それから御はなしをしたり、大人のやる演説會の眞似をしたり、しまひにはころびつまるびつもの摺

み合ひをやつたりして、南國の一日を遊び暮らすのであつた。

五 學 校

學校が一年中休みだつたら、何と愉快なことであらう。新年の休暇がタツタ一ヶ月、まだ遊び足りないのに、もう又學校に行かねばならん。先生といふものは、どうしてあんな「書物を教へたがるのか知ら？ 先生は遊びたくないのか知ら？ もう二三ヶ月休暇にして欲しいナ。一月でもいい！」

小坡はかう思ふのだけれど、しかし學校に行くのが面白くないのではない。學校は學校で別に遊ぶ趣向があらうといふものだ。

彼は御父さんの店から七八本の筆を盗み出して來た。それから眞鍮の大きな墨つぼも、この墨つぼには、しかし墨は入れない。

空ツボにして置いて、彼の色んなものを入れるんだ。白墨だとか、檳榔樹の實とか、なつめの種とか。御父さんが新しい教科書を買つて呉れた。仙坡と二人が、繪だけ見た。仙坡は、

「もとの方がいい。こんどは繪が少ししかない。」

といつた。小坡も同感だつた。彼は先生が字ばかり好きで繪のいいことを認めないのを慨嘆した。

家から學校までは十何分くらゐで行ける。八時始まりなので、兄貴は七時半頃から出掛けるが、小坡は六時半頃家を出る。とい

ふのは、仙坡が毎日街角まで送つて呉れるからだ。街角まで行くと、こんどは小坡が家まで送つて行く。又仙坡が街角まで送る。

こんなことを七八回もやるんだから、成程六時半でなければ駄目なわけさ。おまけに、時には仙坡と一緒に南星や三多(福建人の子供)

や、馬來姉妹のところへ遊びに行つたりするんだもの。

彼等の學校が、みんな違ふことは、小坡の煩悶の種であつた。みんな同じ學校に行くんだつたら、さぞよからう。南星の學校は月に一回行けばいいんださうだ。毎月一日に、學費を持って行くだけで、アトは遊び放題だ。いい學校だなア馬來姉妹の行く馬來

學校は、十一時始まりで、しかも毎日行くには行くが、十二時になるともう歸つていいんださうだ。印度人の子供の行く英文學校

はもつといい。先生は顔の白い鼻の高い、眼玉の青いアメリカの女の先生なんだ。生徒も、白いのも黒いのも、黄色いのもある。もし學校を換へるんだつたら、英文學校にあがるんだ。しかし駄目だ。御父さんは、

「廣東人は廣東學校に行くもんだ！」

ツて、頭から受附けないんだもの。

だが、三多に比べたら、どれだけいいか分らん。三多は學校に行かない。大きな眼鏡をかけた、長いあごひげの、齒の抜けた老人がゐて、朝から晩まで大ツかしい本を教へてる。唱歌もなけりや、體操もない。本には繪が一つもなく、黒い小さい字がギツシリつまつてる。だから字は一ばん餘計知つてるが、それだけのことで、あんなに苦しんぢや間尺にあはん。

小坡の學校は、しかし本當は一ばんいいんだ。男女二百人の學生に、何十人かの先生があつて、主任の先生の聲なんかトテも大きいんだ！

六時半だ！ カバンに色んなものをつめて、例の紅いきれも詰めて、仙坡と一緒に門を出る。

「南星のどこへいつて来よう。」

南星の家は、隣りの街だから、すぐ着いた。

「南星、學校に行かないの？」

「まだ一日ぢやないから、行かんでもいいんだ。」

「三多のどこへ行かうか？」

「駄目だよ！ 三多は昨日暗誦が出来なかつたんで、門口に立たされた。可愛さうだから、バナナの葉を持つてつて、帽子にしろつて呉れてやつたら、老ぼれ先生、見てみてキセルでイヤといふほど殴られた。これ見ろ！ こんな大きな瘤が出来た。」
威程、南星の頭に大きな瘤が出来てる。青くふくれている。サア、小坡が怒つちやつた。

「あした老いぼれを殴り倒してやらう。」

「アイツのキセルは長いよ。おれツちが行つたつて駄目だよ。わきに寄ることも出来やせん。」

「キセルをソツと盗み出しときやいいぢやないか。」

「駄目々々。ピストルを持つてるんださうだから。」

その癖、南星も小坡も、ピストルつてどんなものか知らないんだ。

「ピストルつてどんなもの？ 兄さん。」

仙坡がきく。

「小さい狗らしい。トテモよくかみつくんだったつて。」

「おおこわい！」

仙坡が泣き出しさうな顔をする。老いぼれ先生だが、到底齒の立ちさうもない對手なので、小坡も三多も、仇討を断念した。

六 小 英 雄

學校での小坡の第一の仕事は喧嘩である。しかしかういへばとて彼を手を負へぬ亂暴者と思はれては困る。彼が喧嘩をするのは十中八九は悪い奴をこらすためなんだ。ことに小さい女の子のために起つことが多い。彼女だちは、悪い兒にイヂめられると、先生にはいいはないで、小坡のところへ頼みに来る。すると小坡は、

「ヨシ、引受けた。」

てんで、對手が上級生だらうが何だらうが構はないで、やつつけに行くんだ。

彼が一生懸命になつて、ぶつつかつて行くときの勢ひは、たしかに物凄。兩手を水車のやうに廻すので、相手がそれに氣を取られてゐると、頭を下げて、牛見たいに、まつしぐらに相手の腹をつく。この頭突きは、十回試みて三四回しか命中せんが命中し

たら最期の介、相手は三日くらゐバナナを喰ふわけに行かんのだ！

彼の頭の堅いのは、やはり練習の結果なんだ。毎朝御母さんについてマーケットに買物に行くとき、品物を籠にのせて持つて歸ることは、前いつた通りである。この外、垣根のところ、頭で逆立をやる。十分くらゐ頭で立つてゐるから凄いや。この石頭を突ツ立てて全身の力量をこめて突ツかるんだから、相手はたまらん。

但し小坡がこの石頭を使ふのは、強い相手に限る。同じくらゐの力の奴に對しては、矢張り拳で戦ふのである。弱い奴とは戦はぬことにしてゐるが、弱い癖に人をイヂめる奴があると、彼は一拳御見舞申すことを忘れぬ。こんな奴に限つてすぐ先生にいつつける。先生は小坡を罰するが、小坡は喜んでその罰を受ける。

「アレ丈けやつつけといたから、二三日くらゐは大人しくするだらう。」

と、小坡は心で思つてゐる。面白い少年だ。

彼のスローガンは、

「グラウンドの森とここで會はう！」

といふんだ。これが彼の挑戦の言葉だ。グラウンドの東に灌木の生垣見たいなものがある。その外側、大木に圍まれたちよつとした廣場がある。ここが彼等の戰場だ。見物人も先生にいつつけないことになつてゐる。ここで一對の小將軍が戦ふ。勝つた方が

「濟んだ！御氣の毒様！」

と先づ叫ぶと、敗けた方も、

「濟んだ！御氣の氣様！」

と答へる。勝負はここ限りのこと、外へは持ち越さぬことになつてゐる。

小坡は、こんな氣持ちのいい少年だが、打明けていふと、彼も賄賂を受けて、人のために喧嘩をしてやることもある。あるとき、

煙草の中に入つてゐる綺麗な繪五枚の約束で、王牛兒と試合をしたことがあつた。その實、王牛兒に悪いところはないのであるが繪が欲しいために戦つたのだが、こんなとき、彼は實に弱かつた。王牛兒の打つて來る拳は、一つ毎に彼の良心を打つた。

「濟んだよ！御氣の毒様！」

先づかう呼んだのは、小坡でなく、王牛兒だつた。このことがあつて以來、彼はもう賄賂に依つて無名の師を起すことをしなかつた。

さて、話は歸る。仙坡に別れて校門に入つた小坡は、同級の女の子、小英が泣いてゐるのを見た。

「どうしたんだ？小英。」

「張禿子が打つたのよ、さうして私の船を取つたのよ。」

「ヨシ、おれが取り返してやる。」

「取返すだけやイヤ。張を打つて頂戴。私を打つたんだもの。」

小坡が小英を連れて教場に入らうとすると、張か向うからやつて來た。彼は好漢だ。小坡と小英が一緒に來るのを見て、

「小坡！グラウンドの森とここで會はう。」

「いつだ？」

「たつた今さ！來るか？」

「先へ行つて待つてろ！」

新らしい、いい服だつたので、彼はそれを脱いで椅子の上に掛け、例の赤いきれを腰に捲きつけた。

「小英、どうだこの赤いきれは！」

「ほんとにいいわね。」

小英は手を打つて喜んでゐる。

大木を洩れる陽の光が、張禿子のはげを照してゐる。小坡より脊が少し高く、力も強かつた。しかし、小坡はちよつとも恐れぬ。

「禿子、小英の船をかへしてやれ。」

禿子は問題の小船を樹の根ツコに置いた。

「御前が勝つたら小英にかへすよ。おれが勝つたら船はおれのもんだ。」

いつたかと思ふと、まつしぐらに飛びかかつて来た。

小坡は例の頭突きで行く。禿子は、小坡の石頭を知つてゐるから、イキを吸うて腹を引ッ込ませ、ツト横に逸らす。さうして逆襲に轉じ小坡の脊中を五ツばかりなぐつた。小坡は、頭突きをやるときは、脊中は犠牲に供してゐるのだ。

機を見、後退し、陣形を立直して、距離をはかつて再び突いて出る。今度も失敗。しかし、今度は禿子の脚にかちりついた。禿子は得たりと、ますます急に小坡の脊をなぐる。

「小坡がやられるやられる！」

見物人は手に汗を握つてる。小坡、

「何の！」

と、手を放して、敵の背後に廻る。禿子が向き直つた瞬間、

「小坡の石頭！」

と思つたが、もう遅かつた。フットボールのやうな、それよりも堅い奴が、グサと腹にはいたと見る、彼の禿頭は、灌木の茂みの中に入つてゐた。完全にノサレちやつたんだ！

「済んだ！御氣の毒様！」

小坡が叫んだ。

「済んだ！御氣の毒様！」

禿子が灌木の中に入つたまま答へた。

見物人が禿子を扶け起した。

小坡は木の根ツコから小船を拾ひあげて、グラウンドに出て小英に渡した。

「小坡！ 小坡！ 見てゐたよ！ 禿子が散々負けちやつたのネ、氣持がよかつたわ！」

小英が雀躍してる。

「船をよくしまつとけよ。人に取られんやうにネ。」

やさしくいひながら、小英はサツサウと教室に歩いて行つた。禿子に打たれた脊中の痛いのをこらへながら。(老舎作「小坡の生目」)

創作文庫本、生活書店一九三四年版(「南北」一九三六・五—六)

春城深草香妃怨

一 乾隆帝と紀曉嵐

臥房の外は、しとど降る春雨が、微かな音を立てて、方瓷を濡らしてゐる。圓窓を透して、楊の風に亂れるのが見える。——京城・翠花胡同の、とある屋敷の一室。

「大夢、誰か先づ覺めたる？——おう、雨だな。いはゆる春意蘭珊といふ奴。」

と、紅木作りの、寢臺から下りた、三十七八の魁偉な男。この家の主人、翰林院編修・紀曉嵐である。萬里の長城、大運河と並んで、それにも劣らぬ大きな業績である四庫全書の編纂官として、後世に名を轟かした彼だが、この時はまだ全書編纂もはじまつてゐず、平の翰林院編修で、帝の起居を注する官であつた。だがその滑稽善才は、深く帝の寵をあつめ、輕口冗談の應酬に、君臣兼ね得たり好談敵、でもあつた。方面大耳、いかつい顔のどこかに、ひやうきんなところの見える彼は、今、室の中を歩きつ戻りつ、時々、想ひ出し笑ひをしながら、ノソリノソリと歩き廻つてゐる。

——昨日のことである。彼は、翰林院で、同僚と一緒にゐた。金石骨董から、傳伶妓女の品さだめ、話の下がかつた頃、先觸れもなく、帝がやつて來たのである。一體、乾隆帝は、好學といふのか、話好きといふのか、一日に三度も四度も、翰林院に來られるのである。そのたびに、衣冠を正して、かしこまり奉つるのは、いささか迷惑でないこともない。面倒臭くなると、野人・紀曉嵐は、よく隣りの室から逃げ出すが、前觸れもない、突然の御出ましなので、逃げる暇がない。突嗟の間に彼は、大書案の下に潜り込んだ。そんなことと知らぬ帝は、翰林連をつかまへて、四方八方の話をやつてゐる。話ごとぎれて、ちよつと靜かになる（間）。突然、書案の下から、頓狂な叫びが起つた。

「老頭子去了嗎？」（おやち、歸つたか？）

聲と同時に、紀の大きな頭が、書案の下から、ヌツと出た。

「誰だ？ そんなところにゐるのは！」

と、帝に一喝されて、

（しまった！）

と思つたが、仕方がないので、ゴソゴソ這ひ出して、叩頭叩頭した。

「老頭子とは、一體、誰のことだ？」

「陛下のことです。」

「そのわけをいへ。」

「老は天下の大老、頭は元首、子は天子、すなはち老——頭——子であります。」

流石の帝も破顔一笑、

「汝の口才、まことに才の急なるものだ。」

と、——それで納まつたのであるが、

（なかなか放つては置かれぬ方だ。今日は、うんと油をしぼられるかも知れぬ。）

と、彼は、今、微苦笑してゐるのだつた。

彼の豫感に、間違ひはなかつた。輕い朝餐を取つた後、雨の都大路を、轎子にゆられて參内した彼は、帝の猛烈なる追撃戰に、タチタチとなる外はなかつた。

「曉嵐、卿は詩が上手だね。」

起し得て唐突、何のことやらと、堅くなつて、

「さうでもありません。近頃とんと吟興が起りませんので。」

「嘘をいへ。ソラ、讀んできかせるぞ。」

紛紛たる蠻觸、争ひ、やむことなく、

干戈擾擾たるも、我獨り閑なり。

河山を收拾して、吟管に入るれば、

墨花、雨のごとく、雲箋に洒ぐ。

これあ、卿の詩ではないか？」

「さやうでございます。」

「怪しからん詩だ。」

「そんな筈はありませんが。」

「大言不慚は文士の常、河山を收拾して吟管に入れるの、墨花、雨のごとく雲箋に洒ぐのと、生意氣千萬だが、それはいいとして紛紛たる蠻觸、争ひ、やむことなく、干戈擾擾たるも、我獨り閑なりとは、聽、捨てならん。この太平の世の中に蠻觸の争ひなどあるもんか。カシガルあたりで回回ともが蠢動してるやうだが、兆惠を將軍にして、征伐させてをるし、猛牛のやうな富徳も附いてをるし、何も心配することではないぞ。もし又、本當に、遍地みな干戈、といふやうな事態だつたら、卿だつて安閑とはしてをられまい。我獨り閑なり、とはいへまいがナ。」

「さやうでございます。」

「まだ、もう一つある。」

帝は、なかなか鋒先をユルメなかつた、

「かういふ詩を拾つたよ。」

江湖に飄泊して、久しく家なく、

無袖破衫、歳華を慶す。

江山を斷送して、呼べども醒めず、

香夢沈酣、梨花を繞る。

これも卿の詩だらう？」

「さやうでございます。」

「妓女が、馴染の傷俗に贈るやうな詩だナ。香夢の一句はややいいが、江山の句は斷じていかん。」

「どうしてでございます？」

「朕に聲色の好みがあることを、諷刺したものであらうがナ。呼べども醒めずなどと、あまりほんたうのことをいつてはいかん。」

「どうも、つい、考へのない詩をつくりまして。おゆるしを願ひます。」

「まあいいわ、勘べんしてやらう。」

「ありがたう存じます。」

「時に兆惠だが、今度は勝てるだらうな。」

「大丈夫勝てると思ひます。この前は、功を貪つて、深入りした傾きがありました。急進して不毛に入るのは、兵家の戒しむるところ、それを犯したのみか、兵力が四千と二萬、これちや勝味がありません。ところが、今度はその反對に、兵數はこちらが斷然多いし、富徳などいふ猛者もゐますから、問題はありません。」

「さうありがたいものぢや。」

「追つつけ、勝利の報が参りませう。それに……多分……お楽しみでございませう。」

「これこれ、又さやうなことを申す。どうも卿は本當のことをいひ過ぎるよ。アツハツハ……。」

上々の首尾だつた。ことに、

「本當のことをいひ過ぎるよ。」

が、彼を微笑させた。カシユガリアの亂を平げに行くとき、將軍兆惠が参内すると、

「途中、氣を附けて、顔色を損しないやうに。」

と、これは、滿朝の文武の間に、誰知らぬものもないくらゐの噂であつた。

叛軍の首領、小コージャ・オーヂチエンの妃は、三國に名だたる艶色で、漏體の香氣、「地の胸の香はしき女神」と讃へられたトルコ美人であつた。興隆途上の清朝が、叛軍を許して置けぬのは勿論だし、大功を喜ぶ乾隆帝が、版圖の擴大を欲するの、當然だが、その外に、美妃の獲得、これが用兵の一目的であることも、蔽ひ切れぬ事實であつた。

「キツイ御執心だナ。」

彼は、突嗟に、三十六宮の春風を想ひ起した。そこには、内地十八省の漢人の女、蒙古、朝鮮、南洋、印度、スペイン美人が、花のやうに咲き亂れてゐる……。

二 カシユガリアにて

「世界の屋根」といはれるパミイルを、東に下つたところに、紅柳胡桐、水草豐美の樂土、「地の胸」といはれてゐるカシユガリアがある。パミイルから流れ落ちる水は、葱嶺北河、南河の二河となり、この地を霧ほして、耕牧ともにその恵みを受けてゐるが、——同じやうに、パミイルの彼方に發源した文化の流れも、亦ここに注ぎ入る。先づ、その地を占めたのは、佛教であつた。古代

佛教の榮えた地として、その遺蹟は、今でも探検家の一目標であるが、やがて、優勢な回教徒軍が、パミイルを越えて殺到した。四半世紀に亘る宗教戦が、ここに展開されたが、勝利は回教徒軍の上に来、佛教寺院は、ことごとく取り毀され、代つて回教徒の禮拜寺院が起つた。その後、支配者には變遷があつたが、回教の法統は絶滅せず、今日に及んでゐる。

この樂土の首都ともいふべきカシガル城の南に、タスホンといふ大きな村がある。村長シャビリクは、土耳其種の回教徒で、慈善心が深く、村民の信望が厚かつた。妻の薩氏は、ボシクロム村の村長・サワヤルトの娘で、夫婦の間に五人の子があり、長男と次男は妻帯し、長男には孫があり、何一つ足らぬものなく、村人から沙大公と敬はれて、一家和氣霽々と暮してゐたが、回教徒の常として、かうなると、どうしても「朝汗」がしたくなる。沙も御多分に洩れなかつた。「朝汗」といふのは、回教の聖地・メッカ及びメヂナ詣でのことである。

教祖マホメットの生れたメツカのまん中に、クアルベがある。西洋人のいはゆるカアバ廟であるが、支那では、天闕又は天房と譯してゐる。天房に詣でて、「ハツヂ」の稱號を得て歸ることは、回教徒一生の念願である。一生汗水たらして貯めた金を、全部費つて惜まないし、二年かかつても苦にならぬし、參詣の途中で死んだら、そのまま天國に行けるのだと思ひ込んでゐるのだ。乞食をしながら、朝汗するものもあるくらゐだから、沙大公のやうな大金持が、朝汗を思ひ立たぬわけはないのだ。しかし、今と違つて、交通の不便な時代のこと、十中八九は生きて歸れぬ例なのに、妻の薩氏は、すでに四十五歳ではあるが、たまたま妊娠してゐたし、六十に近い大公を出してやるのは、いかにも心細かつたけれども、

(外ならぬ朝汗のことだ。留めては神罰が恐ろしい。)

と、思ひ切つて、納得した。

カシユガリアで、一二を争ふ金持の朝汗とて、その準備が大變である。金や銀を熔かし、ちやうど現在の銅錢の形にして、三萬兩ばかり用意する。牛が一千頭に、羊が二千頭、これは、途中で貧民に施すのである。その他食糧品乾飯のやうなもの、磚茶とい

つて、煉瓦のやうに堅めた茶、炊事具、天幕などを、四五十匹の駱駝に載せるといふ騒ぎ。
「沙大公が朝汗に行かつしやるさうな。わしも一つついて行かう。」

と、同行を申し出るものもあり、終に同勢二百餘人の大旅行隊になつてしまつた。

カシガルからメツカまで、今でも相當の日子を要するだらうが、沙大公の朝汗は、九ヶ月かかつたといふ。陰暦の八月に立つて翌年の四月、回教暦の十一月にメツカに着いた。五月、すなはち回暦の十二月八日から、「大朝」がはじまる。メツカ参詣の時期は、必ずしも十二月でなくてもいいのだが、十二月はツノ・ハンヂすなはち「觀月」と稱し、一年一回の節會なのであるから、教徒は大抵この頃を指すのである。

朝汗の儀式のことを、少し述べて置く。先づ、ジツダの港で、戒を受ける。齋戒沐浴して、精神を正しくし、平常着てゐる衣服を脱いで、イフラム戒衣をつける。一遍も洗濯したことのない、眞白な衣服、といつても、實は二枚の白布で、いづれも大巾五六尺、一枚で上半身を、他の一枚で下半身をくるむ。朝汗の終るまで、脱いではならぬのだ。この戒衣を着てゐる間は、冠り物をせず、靴を穿かない等の十二ヶ條の戒律を嚴重に守る。一條を犯す毎に、羊一頭を献上する。

かうしてメツカに到着すると、ただちに天房カアバ廟に朝謁せねばならぬ。その儀式、有名な黒石の箝められてある天房の東南隅を起點とし、經文を誦しつつ、天房を七匝りする。一匝り毎に黒石を撫で、撫でた掌に接吻する。終ると、天房の東二千歩ばかりのイブラヒム石のところで歇驛し、それからその南のゼムゼム泉の天水を飲み、正門を出で、メツカ城外に、二哩ばかりの間隔を保つて、對峙してゐるソファ、メルハ兩山の間を七度往復する。これは昔、イブラヒムの夫人ハガルが、その兒イスマエルを生んだときに、水を求めて歩いた苦行を偲ぶためのもので、それゆゑに、この儀式は、或は緩歩し、或は疾走し、或は立ち止まりなどして、何か物を探すやうなかつかうで行はれるのである。

朝謁を終つたものは、メツカ城東北二里ばかりのミイナ山下に宿る。ここには、數百戸の人家があるが、到底何十萬の参詣者を

收容し切れないので、皆天幕を張つて露營する。

いよいよ「大朝」のはじまりである。十二月の八日、ミイナで犠牲を準備する。九日、王は百官を随へ、壇に登つて参詣者に訓諭を發する。さうして、ただちにミイナを發し、衆を率ゐて、その東三里ばかりのアルファートに入る。メツカから約七里、そこに、白塔を持つメルシイ山がある。衆はこの山に登り、遙かにカアバ廟を望みつつ、

「ラツペーキ、ラー、サリカ、ラカ、ラツペーキ！」

と叫ぶ。

「我はここに在リ。主の外主なし。おお主よ。我はここに在リ！」

といふ意味である。

十日ムスタリフア山に向ひ、小石二十一個を拾ひ、ミイナに登り、十一、十二と三日間滞在する。さうして、谷間に設けられた白塔に向つて、一日七個宛の石を投げる。白塔は悪魔に象つたもので、これを悪魔打ち(デヴィル・ストーンング)といふ。十日は又犠牲節で、用意した牛羊駱駝の類を屠る。さうして、それが済めば戒衣を脱ぐのだ。十三日メツカに歸り、御禮参りのために、朝謁の時と同じ七匝りをやる。これで一通り朝汗の儀が終るのだが、ここに注意すべきは、回暦の一日は、日没から翌日の日没までをいふのであつて、我々太陽曆使用者の一日とは、ちよつと觀念が違ふのである。

——十二月十三日の夜であつた。ミイナ山下の天幕の中で、沙大公は、大朝を終つた安心から、グツスリ寝込んでゐた。

「シャビリック、起きよ！」

と、呼ぶ聲に、フト目をさますと、枕頭に一人の男が立つてゐる。二十四五歳の、宮廷の衛士らしい。秀麗な容貌に、肩しがたい威厳が具はつてゐる。

「何事でございますか？」

「神の御召しぢや。附いて参れ。」

吃驚した沙大公は、戒衣のままオツオツ附いて行くと、行手に壯麗な宮殿が見えた。宮門を入ると、兩側に衛士がズラリと並び白石でたんだ道、その正面に白玉の階段、恐る恐る上ると、一位の尊神が端座してゐる。教祖マホメットである。ひれ伏すと、教祖の聲で、

「シャピリク、汝の深信は、汝の後福を保障する。汝は、わが教を東土に擴むる、選ばれた一人だ。今、汝に賜ふものがある。持て。」

と、後ろを向くや、屏風の蔭から、宮女の服装をした一人の美女が現はれ、恭しく玉盤を雙手に捧げてゐる。盤には、十五個の玉を連ね、その端に、五色の錦繡でつくつた香囊が盛つてある。それから、とてもいい香ひが發し、麝香などの比でない。恍惚として、その香囊を受けたと見ら、忽ちグワンと背中を叩かれたので、驚いて振りかへると、——宮殿も何も消え失せて、身はミイナ山下の天幕に在つた。香囊も何處へ行つたか？ ただ餘香のみは、宛然として懷ろに残つてゐるやうな氣がするのである。

吉か？ 凶か？ ミイナの夢の疑問に、想ひ煩らひながら、やがて、彼は、カシユガリアへの歸途に就いた。往きと違つて、歸りは旅裝も軽く、十五ヶ月目に、懐かしいタスホン村に着いた。出迎へた家族に圍まれて、朝汗の話をし、やや久しく、薩氏の出で來ないのを、不思議に思つてゐると、女中が、

「奥様が、ただ今御嬢様が御産れでございます。」

と、駆け込んで來た。

（朝汗に出かけるとき、もう妊娠してゐたのに、十五ヶ月も経つて、今産れるなんて、一體どうしたんだ？）

と、寢室に行つて見ると、満室の香氣、——蘭でなし、麝でなし、どこかできた香ひである。

（ミイナの夢の香ひだ！ さては、十五の玉は、十五ヶ月といふことだつたか。）

女兒は天香と名づけられた。異香馥郁、人呼んで「香姑娘」といふ。五歳にして、言語舉動成人のごとく、七歳となるや、父沙大公は、漢族の言語文字に通ぜる回教の儒者を選んで、師傅とし、回文は勿論、漢文をも授け、十五六ともなれば、その美しさカシユガリアに比なく、しかも才あり、學あり、騎射にも精通し、香姑娘の名は、國內に隠れもなかつたが、乾隆十三年四月、獵場で出會したのが縁となり、小コーヂャ・オーヂチエンに見染められ、懇望されて、終にその妃となつた。コーヂャといふのは、マホメットの後裔の義で、君主を意味する。「汗」と譯してもいい。このとき、カシユガリアには、兄弟のコーヂャがあつた。兄が大コーヂャ・ブラニードで、弟が小コーヂャ・オーヂチエンである。兄は温厚篤實の長者であつたが、弟は英武、兄に過ぎ、熱心な回族獨立論者であつて、實にカシユガリアの大黒柱であつた。天香を獲て、ただその美色に沈迷するだけの凡器であつたならば、香妃も天年を完うしたであらうが、幸か不幸か、オーヂチエンは梟雄の資を具へてゐた。その回族獨立の主張は、興隆する清朝の勢力と、眞正面から衝突し、いはゆる大小コーヂャの亂（一七五八—一七六〇）を起し、香妃の生擒を見るに至つたのである。——話が、少し乾燥して來るが、この亂の叙述を省くわけには行かぬ。

三、大小コーヂャの亂

カシユガリアは、元の時代には、成吉思汗の次子、チャガタイの領土であつた。明初、タメルラン帝國起るや、チャガタイ汗國も、その旗幟の下に在つた。タメルラン帝國の都、サマルカンドには、回教の宣教師等が、雲のごとく集つてゐたが、その中に、カリエン、イサクの兄弟があつた。マホメットの子孫であるが、この二人がはじめてカシユガリアに入り、教を弘めた。明の嘉靖帝の時代、カシユガリアの汗、サイドは、稀に見る梟雄で、天山南北路を平定したが、その子孫に柔弱なものが多く、實權は白山宗に握られた。白山宗はカリエンの開祖とするもので、これに對する黒山宗は、イサクを開祖とし、兩兩相降らなかつた。支那の文獻に、「白朝回」、「黒朝回」とあるのは、この兩黨のことである。

清朝になつて、順治帝の時代、カシユガリアの汗、イスマイルは、黒山宗であつたので、位に即くや、白山宗に一大壓迫を加へ

た 白山宗のコージヤ・アバクは、イスマイルの壓迫に堪へ切れず、西藏に通れて、その援けを借り、一方ズンガリアの汗・ガルタンと結び、三角同盟の力を以てイスマイルを敗り自づからカシユガリアの汗となつた。ガルタンは、この時イスマイル及び黒山宗の首領をタルヂヤに還し、チャガタイ汗の血統は、ここに斷絶した。時に康熙十七年であつた。

大小コージヤの祖父と父とが、このときはじめて登場する。祖父はアブドシツド、父はマアムード。白山宗のコージヤである。イスマイル汗と、黒山宗の首領が、ガルタンに依つてタルヂヤに遷されたと言いたが、實に不思議にも、白山宗のアブトシツド父子も、この時やはりタルヂヤに囚はれ身となつたのである。これはどういふわけか？ 歴史家も明白な解答を與へてゐないし、流朝史の大家・稻葉君山氏のごときは、ガルタンが白山宗を支持し、アバクをヤルカンドに置きながら、今一人の同宗のコージヤたるアブドシツド父子を、タルヂヤに連れて行くとは、解しがたきことであると述べてゐる。で、私は、純然たる想像説に據り、ア父子は、コージヤの一族が、アバクの出奔中、同族の牛耳を執つたものであり、アバクト反對に、ズンガリアとの提携をよしとしなかつた人であらうと斷ずるのである。ともかく、ア父子は、これから約十八年間、タルヂヤで暮したのであるが、牢屋に入れられてゐたわけではなく、人質といふ程度であつたから、家族も一緒に住つてゐたのであり、ブラニード、オーヂチエンの兄弟も、ここで産れたのであらうと想像がつく。

康熙三十五年、ガルタンが康熙帝の親征を受け、庫倫近くのチャモドで、毒を仰いで自殺すると、アブドシツドは、タルヂヤを脱して康熙帝に謁し、舊領安堵を請ひ、清兵護衛の下にヤルカンドに歸つた。間もなくアブドシツド死し、マアムードがコージヤとなつたが、ガルタンを逐うてズンガリアの人となつたチワンアラブタンの白山宗排斥に堪へ切れず、獨立の旗を翻へした。がチワン死し、その子チーリン繼ぐや、輕騎五千を率ゐてヤルカンドを強襲し、マアムード父子三人は、再びタルヂヤに還された。チーリンの死後、家督争ひのために三人の兄弟が相争ひ、最後にダワチが汗となつたが、その謀臣格のアムルサナは、やがてダワチ汗と不和になり、清朝に投降してその先導となり、ダワチを亡ぼし、タルヂヤを占領した。彼の希望は、清朝の兵力を利用して、

自づからズンガリアの汗になるに在つたが、案に相違して、清朝は彼を親王に封じただけであつた。彼は無念やる方なく、オイラツト人を煽動して、清廷に反抗した。時に乾隆二十一年秋、しかし彼の威望は、全ズンガリアに撤せず、加ふるに兆惠等の名將の討伐するあり、翌二十二年には、アムルサナの勢全く盡き、ロシア領に走つて天然痘にかかり、病死した。

これより先、乾隆二十年ダワチ汗が減じると、大コージヤ・ブラニードは、釋放されて、ヤルカンドに歸り、小コージヤ・オーヂチエンは、タルヂヤで回民に關する事務を管掌させられた。一種の人質である。アムルサナ叛するや、オーヂチエンはこれに應じ、清兵と戦つたが敗北し、潛かにヤルカンドに通れて、兄の許に投じた。このとき清廷では、まだ兵をカシユガリアに加ふる意思はなかつたので、將軍兆惠に命じて、兩コージヤを招撫させた。濃厚なブラニードは、

「長いものには、捲かれる、だ。」

といつたが、オーヂチエンは、

「もう、人質生活は懲り懲りだ。三代もつづけて人質になるなんて、恥かしいことだ。北京のいふことを聞いた日にや、一人は北京に來い、一人はソツチに居れに、定まつてる。ナニ、ズンガリアをやつとモノにしたばかりで、もう餘力はないよ、自立するに限る。」

と、強硬に獨立論の音を揚げた。列席したものは、景氣のいいオーヂチエンに左袒した。さうして、乾隆二十三年、獨立の旗はヤルカンド城頭高くあがり、カシガル、コータン、アクス、バイ、クツチャの諸城これに響應し、回民數十萬皆靡くといふ、回疆未曾有の大動亂となつた。

同年五月、清廷の派遣した靖逆將軍ヤルカシヤンは、トルファンを發してクツチャ城を攻撃した。大小コージヤは報を聞き、萬餘の軍を率ゐてアクスから來援したが、清將アイルンアに邀撃され、大敗してクツチャ城に逃げ込んだ。圍城月餘、大小コージヤは四百騎を以てひそかに通れ、アクス、ウシの兩城に據らうとしたが、城主皆清軍に通じて納れず、やむを得ずブラニードはカシ

ガル城に、オーヂチエンはヤルカンド城に入り、南北相應して最後の一戦を準備した。ヤルカシヤンに代つて、名將兆惠が、軍を督することになったのは、この年八月である。彼はもとのクツチャ城主オドイをコータンに派遣し、それを招撫させ、自づから歩騎四千を率ゐてヤルカンド城に急行した。城東に到着したのが十月六日、戦端はただちに開始されたが、オーヂチエンの軍は三戦三敗、方針を變へて、城に引込んだまま出て来ない。城は周圍十餘支里（日本里數三里）十三門を有する大城で、それを四千の兵では、ちよつと心細い。永陣を覺悟して、城東を流るる葱嶺南河の對岸に陣地を構へた。この河はヤルカンド・リダアで、土語でカラウス（黒水）といふ。従つて兆惠の陣營は、黒水營と呼ばれた。彼はアイルニアに八百の兵をつけて、カシガルからの攻撃に備へ、三千餘騎を以てオーヂチエンと戦つた。清朝史に名高い黒水營の戦は、それから三ヶ月に亘つて行はれ、互ひに勝敗あり、或時は橋を渡つて城内に入らうとし、高天喜、三保等の將と四百の兵を失つたこともあり、回軍も善戦し、上流の水を決して、黒水營を水攻めにしたり、夜襲したりした。しかし結局兵が少く、もはや危いと見えたとき、アクスにゐた副將軍富徳が、ソロン、チャハルの兵三千を率ゐて來援し、やうやく圍を解いて、全軍一先づアクスに歸還した。第一回の攻撃は、かくて清軍の失敗に歸した。

乾隆二十四年正月から、二十五年六月までは、第二回攻撃の準備に費された。アクスに集中した清軍およそ三萬、兆惠、富徳各一萬五千を率ゐ、兆はウシからカシガルに向ひ、富徳はコータンからヤルカンドを志したが、大小コージャは、清軍到ると聞いて、當年の勢なく、カシ、ヤル兩城を棄て、バミイルを越えて西に遁れた。清軍の先鋒明瑞等、勇躍してこれを追ひ、大いに回軍をアチュル山、イシホン河に敗つた。コージャ兄弟は、終にバダクシヤン國に投じた。この國はやはり回教國で、本來ならばコージャ兄弟を保護する筈であるが、何しろ清の大軍が境に迫つてゐるので、酋長スルタンシヤは、回教同族の誼も何も構つて居れず、兄弟の首を斬つて富徳に獻じた。第二回攻撃は、かうしてアツ氣なく清軍の勝となつた。時に乾隆二十五年八月である。ズンガリア、カシユガリアは、かうして全く清の範圍に歸した。クルヂヤに將軍を置き、カシガルに辦事大臣を設け、その他の

回城には大なるものには、辦事大臣を、小なるものには領隊大臣を設けたが、大體に於いて自治を認め、土人からアキムベク、イシハンベク、ミラフヘク等の官吏を選任させ、寛大な政治を行つた。例の辨髪をも強制しなかつたのは、異例だといはれてゐる。

四 香妃北京に入る

カシユガリアの亂の間、われらのヒロインである香妃は、どうしてゐたか？

それについての傳説は、區々である。ヤルカンド落城の折、逸早く兆惠に生擒され、すぐ北京に送られたといふのが、第一の説である。この説を率ずる史家も相當にあり、劇などにも、ヤルカンド城外に於ける香妃と回民の離別を諷つたものがあるが、しかし、前節で述べたやうに、刀折れ矢盡きた敗戦でなく、清軍の來襲に先だつて、充分準備をしての退却であるから、香妃を城に残すわけがない。まして香妃の生擒が、清軍の一目標であることも、薄々知られてゐたに相違ないに於いておや。そこで、第二説に従へば、香妃はオーヂチエンに従つて、バダクツシヤンまで行つたといふのである。オーヂチエンを殺したスルタンシヤ汗が、これほどの美人を、そのままにして置く筈はない。恐らくオーヂチエンの死を秘して置いて我れに仕へよといったに相違なく、彼女がこれに對して、むしろ死を擇むといつたであらうことも、ほぼ想像される。かうしてゐる間に、富徳將軍からは矢の催促で、彼女の引渡しを迫つたであらう。——美人は惜しいが、清軍の兵力は恐ろしい。スル汗は終に斷念した。

「河南からの白玉の指環を十個賜はるならば、彼女を差上げませう。」
富將軍は、白玉の指環どころではない。美人を無事に北京に送り届けねば、戦功も何も無なることを知つてゐたので、二つ返事で承諾した。

乾隆二十八年（と傳へられてゐる。）の春、富將軍は、スル汗の手から香妃を受取つた。嘆きに沈んだ彼女は、何物をも飲食せず自殺の憂ひがあつた。富將軍は、下のやうにいひくろめて、ともかくも彼女の玉の緒を取り止めねばならなかつた。

「御身の夫は、バダクシヤンから、近く北京に送られることになつてゐる。カシユガリアへ、再び歸することは難かしいが、御身を

伴うて、北京で暮すことになるのはたしかだ。」

一縷の望みをいだいて、香妃は、カシユガリアから北京までの、半歳に亘る長い旅を、馬車に揺られて行つた。車は大きく、横臥することが出来、窓は錦繡を以て装はれた。二人の侍婢と、二十人の奴隷の娘、同じ数の奴僕を随へた一行は、物々しい兵士の護衛を受けて、一驛又一驛と進んで行つた。夕陽が、楊柳古道を染める頃には、馬車は廢驛にとまる。やがて、羊のミルクの風呂が、彼女のために立てられる。これは、彼女の皮膚を嫩かく白くし、美と芳香とが、彼女の長身から發散した。

「香妃娘娘、御機嫌よう！」

別を惜む回民は、争うて沿道に堵列した。

「今生今世、なつかしきカシユガリアよ！ 又、相見ることもあるまい。はるかなる江山よ！」

回民の小娘が摘んで贈つた、白い野花をいだきながら、香妃はかう叫ぶのであつた。

北京に着いた一行は、蘆溝橋から圓明園へと送られた。その一室で乾隆帝は、はじめて彼女を見た。

彼は王中の王、その時代に於ける最大の征服者、一生の間に十大武功を建て、自づから「十全老人」と號した人である。だが、今、彼と相對してゐる彼女も亦、女神中の女神であつた。美の領域に於いては彼女に肩を並べ得るものはなかつた。地の胸の香はしき女神は、夫を奪はれた悲憤のうちに、蒼白き輕蔑を交へて、冷然として立つた。彼女にして、もし、彼の希望に屈したならば、楊貴妃以上の役割を演ずることが出来たであらう。だが、彼女の眼には、彼は一個の異教徒でしかなかつた。

彼は、一眼で幻惑された。一語をも發せず、ただ仰ぎ視るばかりであつた。彼女の冷艶さは、地に屬するものでもなく、天上のものであつた。月の嫦娥とは、かうした神であらうと思はれた。見よ！ 彼女はほのかに耻らひを呈した。娥眉、櫻んぼうのやうな紅い唇、雪のやうに白い齒、なだらかな肩の上に波うつ黒髪、スラリした軀幹、その手は白く、水晶のやうに、透き通つてゐるやうであつた。

一生の中に、人間の姿をした、かくも美しいものを見たことはなかつた。彼の欲望は、潮の退くやうに、消え失せた。彼は獨語した。

（これこそ、眞の珠玉だ。三十六宮の、何といふ寂寞さだ！）

彼は、辛うじて現實の王者を取り戻し、眞珠の首飾と、幸運の象徴である玉笏とを彼女に與へた。彼女は感謝の一語をも發することなしにそれを受け、楚々として彼女の室に引取つた。

彼女は、圓明園で數日を過した。湖上に船を浮べ、川に魚を釣り、苑に鹿を逐うた。乾隆帝に會つたときの、冷然たる態度はどこへやら亡國の恨みも忘れ果てたもののやうに、嬉々として遊び戯れた。宮女たちは、どうかして妃の意を諳へさせ、帝と會はせようとしたが、彼女は決してその手に乗らなかつた。宮女の勸め方が、あまりウルさくなると、彼女は終に姿を隠した。園の奥まつたところに在る、摘星樓といふのへ隠れたのである。——しかし、十全の帝には、この隠れ家はすぐ分つた。彼はひそかに樓に入つた。妃の室に近づくと、朗らかな笑ひ聲が洩れた。帳の隙から窺ふと、彼女は髪を垂れ、胸をけかけて、侍女と遊んでゐた。眞珠を一杯入れた二つの鉢が、足許に置かれてある。帝からの贈物であるが、——彼女はそれを掴み出して、惜し氣もなく侍女らに投げ與へてゐた。

帝が笑ひながら入つて行くと、侍女等は狼狽して、かしくまつたが、香妃は知らぬ顔をして、鏡の前に坐つて、侍女に髪を結はせはじめた。彼は胸をかき亂されて、彼女の室を去つた。美人の一瞥をも買ふことが出来なかつたのである。

けれども彼はまだ失望しなかつた。彼女の意を迎へるためには、あらゆる處置を講じた。紫禁城の南端に在る南海には、彼女のために、寶月樓と名くる宮殿が建てられた。今北平南海公園の入口に當る新華門がそれである。それは一名を望家樓と呼ばれた。といふのは、樓から眞下に見える街々を取り拂つて、妃の故郷カシユガリアに似た一市街をつくり、カシユガリアから呼び寄せた數千の回民を、そこに住はせたからである。回教の禮拜寺もあり、パチャ(市場)もあり、妃は故郷が戀しくなると、望家樓に立つて、

家郷を望む思ひで、脚下の回民街を眺めた。この市街の跡は、後年まで残り、回子營といふ街名で、たしか今の北平にもある筈である。

回教徒が沐浴を尊むことは、周知のことであるが、帝は妃のために壯麗なトルコ風呂を營み、これを浴徳殿と名づけた。これは今でもまだ残つてゐる。清室の書畫骨董を集めて、衆人の展覧に供してゐる文華殿、武英殿と相並んで、それらの西に在り、内部を縦貫させてゐる。二昔も前に見たので、構造はよくも記憶してゐないが、白色煉瓦でたたんだ屈曲のあるつくりだつたと思ふ。熱河の避暑山莊にも、妃のために新しい宮殿が營まれた。

賜物は不時にあつた。人間の腕ほどある珊瑚樹や、白玉でつくつた花の鉢、水晶の盃、黄金の浴槽など。しかし彼女は、それらには眼も呉れなかつた。

位もすすめられた。最初は「貴人」であつたが、間もなく「嬪」となり、乾隆三十三年（入京後五年）には、終に容妃に封ぜられた。乾隆帝の温存は、かくも感徳であつた。けれども彼女の心は、終に回へすべくもなかつた。望家樓に立つて、神に祈ることに、彼女は夫オーヂチエンのために、復讐を誓ふのであつた。カシユガリアから肌身はなさず持つて來た利劍を握りしめながら……。

五 死 を 賜 ふ

北京に入つてから、五年目のある日のことである。帝は酒氣を帯びて、官宦によりかかりながら、香妃の室に這入つて行つた。侍女たちは、争つて迎へ、妃にもさうせよと勧めたが、妃は例の通り黙り込んで、立たうともしなかつた。彼女の顔には、明かに不快の色が現はれた。回教徒は、酔酒者を嫌ふのである。

「何か心配でもあるか？」

と、彼は玉座に倚つた。官宦と侍女は、いつの間にか座を外した。

彼は、彼女の胸首をとり、火のやうな眼をして、ささやいた。

「なんと嫌い、白い手だらう！」

と、突嗟に、彼女の手が、内懐ろに入たと見る、次ぎの瞬間、もう短劍が握られてゐた。

「夫の敵！」

彼は、よろめきながら身をかはした。短劍は、僅かに袂の袖をかすめただけであつた。二の劍をくだす間もなく、彼女は官宦や侍女に取り抑へられた。

「恩養五年の、それが返事か！ さうだ、妃を冷宮に入れろ！」

彼は怒りに身をふるせながら叫んだ。

香妃失寵の報は、宮中にあまねく傳へられた。それを聽いて、一ばんショックを受けたのは、皇太后であつた。彼女は、最初から帝の所爲をよしとしなかつたので、變をきくと、帝を召して、

「亡國の女は、結局不祥ぢや。私情を割斷して、死を賜はるか、いつそカシユガリアに送り還したらどうぢや。」

と、さとした。

だが、彼はそれに従はなかつた。一旦の怒りに、冷宮入りを申しつけたものの、彼は妃の美を忘れることが出来なかつた。もう後悔の心さへ生じてゐる彼だつた。

賢徳を以て、清朝史に有名な皇太后は、

（所詮、この情縁は、帝自身には斷ち切れぬよ。不びんながら自づからが乗り出す外はない。）

話が少し傍道に入るが、香妃の最後の運命に多大の關涉を持ち、その節を全うさせた恩人として、皇太后のどんな人であつたかを、しらべて見よう。

孝聖賢皇后は、鈕祜祿氏の出で、熱河の生れである。家はきはめて貧乏で、下女も使へず、六七歳の頃には、米や醬油やを、市

場に買ひに行つたりしたくらゐであつた。十三歳の時、一家に北京に移つた。たまたま旗人采女のことあり、——これは旗人の娘の眉目よきを選んで、宮女にすることである。——彼女はその行列を観てゐたが、誤まつて列の中に入れられ、しかも選に中つて、皇子の邸に振り向けられた。それが皇第四子、すなはち後の雍正帝の邸であつた。

皇四子は、後年自づから筆を執つて、「大義覺迷錄」などを書き、漢書の満思想と論戦したくらの人であつたから、學問には非常に熱心で、聲色の好みも少なかつた。福晋（王妃のこと）とも別居してゐた。鈕祜祿氏は、それにも拘はらず、終に寵を受け、乾隆帝の生母となることが出来た。それは、皇四子が流行病に罹つたとき、福晋はじめ、侍女が看護をイヤがつたのに、彼女一人は、身を犠牲にして看護に當り、百日の久しき、皇四子の傍を離れなかつた誠心が、通じたからだ。康熙帝の後を承けて、皇四子が雍正帝となると、彼女も皇后に册立せられた。慈を以て六宮を率ゐ、后妃以下これを慕はぬはなかつた。

かうした賢母であつたから、愛兒の身の上を氣遣ふとともに、香妃の志を憐れみ、妃の節を全うさせることが、今は最善の策であると思ふのであつた。

そのためにもいい機会が、間もなくやつて来た。春祭といつて、天壇に天を祭る儀があるが、その前日は、齋きの宮に帝が行かねばならぬ。その日を窺つて、胸に一物ある太后は、先づ侍女を呼んで、香妃が冷宮でどうしてゐるかを見にやつた。

「今午睡して居られます。机の上に、こんな紙片がありました。」

と、侍女は、何か字の書いてある紙片を渡した。

「何か書いてあると、どれく、おう、これは何かの詞ではないか。なに、

簾外、雨潺潺、

ものうげなる春や！

うすものにとほる五更の寒さよ！

夢さめて知る、身はこれ客なることを。

ひたすらに歡びをむさぼりて、

今このさびしさを受けぬ。

はるかな、江山よ！

別るるは容易、

また見るとき、果して何時？

流るる水に、散り浮く花びら、

春は去るよ！——天上人間。

陳の後主の、悲憤の詞ではないか？ 昔の人のよんだ詞は、澤山あるのに、妃がこれを選んで書くとは、哀れな心根ぢや。妃よ、卿の心はようわかる。ながらは苦しませぬよ。これく、香妃をここに呼んで參れ。』

やがて、午睡の夢から醒めた香妃が參内した。帝にこそ小許さなかつた彼女も、太后は、ちやうど自分の母のやうに思はれるのであつた。

「御召しでござりまするか？」

「國は破れ、家はなく、夫婦離ればなれとは、哀れなものぢやな。妃よ、殘世を、どうするつもりぢや。」

「有りがたき御言葉でござります。死すべき身を永らへて、間關萬里、かやうな有様になりましたのは、怨みを晴らさんためでありましたが、それも今は無駄。いつそ一思ひに死にたうござります。」

「心、一死を甘んずとは、健氣なことぢや。花のやうな顔に、丈夫も及ばぬその意氣。今こそ明すが、卿の夫オーヂチエンは、もろこの世の人ではないぞよ。心安く死ね！」

「では、やつぱりさうであつた！ 有りがたうござります。死んで夫のところへ参ります。」
 太后の命に依つて、宮門は嚴重に閉ざされた。帛を賜はつた妃は、太后に最後の跪拜をし、何事も思ひ切つた、はれはれした顔で、次の室に入つた。西方に向つてひざまづいて、最後の祈禱をあげた後、官宦のしごく帛の下に、従容として昇天した。
 それから一刻後のことである。報を聞いて駆けつた乾隆帝は、棺中の愛人を見て慟哭した。
 「まるで生きてゐるやうぢやないか？ 悪かつた。早くカシユガリアへ還へせばよかつたものを！ 許して呉れるか？ 妃よ」
 彼は、涙とともに、妃の指から指輪を抜いた。
 「では、さやうなら、永久に、香妃よ！」

六、香塚と香塚遺蹟

北平城の南端、やや西寄りの、城壁に接した、陶然亭といふ寺がある。三方、蘆花淺水に取りまかれ、蕭條たる眺めであるが、城内とも思へない野趣に引かれて、都人士はよく杖をここに曳く。——この寺の前に、ちよつと小高いところがあつて、その上に、自然石に、四十五字の銘を書いたのがある。誰の墓とも知れない。銘をつくつた人の名もない。

浩浩として、はてしなき愁ひや！

茫茫、測り知られぬさだめや！

短かき歌、聲やみて、

まどかなる月、影かたぶきぬ。

おどろしく、すさまじき奥津城や、

中に在るは何？——血潮ぞ！

碧き血潮ぞ！ みな血潮ぞ！

碧きは色變り

血潮も土に歸らん。されど——

一縷の香魂、今に残るよ！

ああ、是なるか？ 非なるか？

化して、胡蝶とならん？

四十五字の銘は、かういふ意味である。いつ頃からか、碑は「香塚」と呼びなされて、吟詠の数も少くない。その中に、「萬歲遙拜一碑地。年月封題姓氏無。四十五言銘古塚。埋香廢恨總模糊。」などいふのがある。

一體、誰の墓なのであらうか？ これについては三つの説がある。

昔、一人の士人があつた。荷雲といふ妓女と、二世の約束を交はしたが、御定まり通りの貧書生。終にヤリテ婆に間を割かれて荷雲は金持ちに落籍されようとした。彼女は死を選んだ。士人は彼女の屍體をここに埋め、手頃の石をその上に置き、題銘し去つたといふ、これが第一説。

乾隆嘉慶の頃、これも一人の士人が、學人の試験を受けに来たが、何回やつても通らない。彼は終に受験を断念し、一生つくつた詩文をここに埋め、四十五字の悲憤の文字を置土産に、漂然僧となつて去つた。これが第二説である。

第三説が、すなはち香妃の塚だとする説で、四十五字銘は、十全老人の御製であるといふのである。

三説のどれが當つてゐるか？ 誰も知つたものはない。しかし、詩文稿を葬つたといふ説は、ちよつと首肯しがたい。一縷の香魂断絶なしといふ一句から推して、どうしても美人の墓でなければならぬ。そこで香妃か、妓女荷雲の墓だといふ説が有力になつて来る。ことに香妃説が今も最廣く信ぜられて居り、支那人が「香妃演義」といつたやうなものをつくるにも、スエソ・ヘデン博士が香妃のことを書いても、「同博士著「熱河」の一章」、開卷第一、先づこの香塚に觸れるのであるが、正史に據ると、残念ながら

香妃説の影がうすくなる。もつとも、墓ではなく、一種の追悼碑として、十全老人が四十五字銘をつくり、紀曉嵐あたりが、「これはなかく名吟で御座いますな。石に刻んで置ませう。何の、題人なしといふことにして置けば、御製とは誰も氣が付きませまい。」

といったやうなわけで、案外あつたかも知れない。

正史によると、裕陵の石欄外の邊地上に葬られたとある。北平の東薊縣に在る東陵のことで、ここには乾隆帝の陵もあるのである。ここが妃の正式の墓のあるところで、分骨はカシガルに在る。城外十支里、日本里數で三里足らずのところに、香娘娘廟といふのがこれである。謝彬の「新疆遊記」に、次のやうな記事が見える。

「東門を出て、香娘娘廟に遊ぶ。道傍には、田園渠水多く、民屋稠密、一見にして富饒の地たることが察せられる。十里にして廟に着く、民家數十戸、一市街をなしてゐる。廟の周圍は垣あり、その東北隅に妃の陵がある。上は圓く、下は方形で、綠色の瑠璃瓦をふき、ハミ(新疆東部)の回王の陶墓より數倍奇麗だ。妃陵の外、數十の墳墓があり、大なるは男墳、小なるは女墳、みな香妃の親戚の墓だといふ。門の左側に、粗末な輿がある。香妃が産れたとき使つたものだといつてゐる。乾隆帝から賜はつた額と、妃が平常乗用した輿があるときいてゐたが、見當らなかつた。さて、陵の周圍には塙根があるが、その外側の低いところは、非常に奇麗になつてゐるので、どういふわけかと尋ねると、回民の婦女がここに來て祈禱し、塵を拂ふためであると。面白いのは、羊の角が澤山置いてあることで、薪のやうに積みあげ、塔のやうになつたのが、五つも六つもある。一對十兩から二三十兩に及ぶもので、これは祈禱の際に使ふのである。陵の右側の隅に妃の父が生前讀經し、死後葬られたといふ建築物がある。その前に禮拜場があり、泉水築山があり、なかく立派である。又果樹園もあり、花時は遊人が多い。香火の盛んなること新疆第一で、一年數萬元の賽錢があるといふ。先年達揚氏(達姓に嫁入つた楊氏の女)といふものが、北京からやつて來て、香妃の兄の後で、香妃入京當時隨從し、旗人の籍に編入されたものの子孫だといつて、廟の財産を要求した。カシガル知事馬紹武の判決に依つて、廟の財産を

三分し、一を達揚氏に、一をもとからこの廟を守つてゐた者に、一をまだ北京に残つてゐる香妃の親戚(五人)に與へることにしたさうである。」

餘聞二三を録する。

妃はカシガル城外の産れでなく、コータンとも、アクスともいふ。名前も天香の外、玉香といふ名だつたといふ。しかし香娘娘廟がカシガル城外に在るところを見ると、やはりカシガル説が正しいのであらう。

オーヂチエンの妃だつたといふ説と、大コージヤ・ブラニードのだつたといふ説と、ほとんど同じくある。しかし、オーヂチエン妃説を取る文献の方に、信すべきものが多かつたので、この方に従つた。

北京入りの年月については、乾隆二十五年、ヤルカンド落城直後説もあるが、これは二十八年が正しい。

香妃は美人であつたことは勿論だらうが、どんな型の美人であつたらうか？ トルコ美人の標準に據ると、額が大きく、眼が大きく、口は狭く、背が高く、腰部臀部が大きいのが美人だといふから、大柄の美人だつたらうと想はれる。

香妃が帝に許したかどうか？ 貞潔と否との分れるところであるから、史家は大分研究してゐる。帝が寶月樓で、侍臣に語つたといふことや、或は浴徳殿にからまる話(村上知行氏著「北平天七頁」)。蕭一山氏などの新史家も、「香妃寵を得、後宮三千、比倫するものなく、因つて太后に讒し、遂に死を賜ふ。」(清代通史中巻九二頁)といつてゐるし、稻葉君山氏も、「妃は復仇の意を果さんため、何時頃よりしてか、帝に許せし想像されざるにあらず。」(清朝全史「上巻七八頁」)と斷じてゐるが、そこまでのセンサクはどうであらうか？ やはり「全節」といふ風に見る方が、この薄命の美人に對し、あたたかい見方ではあるまいか？——それ故に、王湘綺(閩運)老人は、故園寒燈の下、「今列女傳を草し、劈頭、「母儀」の篇に於いて、香妃に全節せしめた鈕祜祿氏の徳を叙し、

「太后門に當りて座し、促して回女を召し、絞して之を殺し、その氣絶え、之を撫して已に冷えたるを待ちて、乃ち門を啓けり。上、入りて號泣す。俄かにして大悟し、太后の前に頓首しぬ。太后亦上を持って流涕す。左右感動、泣下せざるなく、海内聞くも

の皆嘆息し、相謂ふ天子、聖母ありと。靜にして化あり、而も教誨につよし。詩に曰く君子萬季、景命有僕と、これ此を謂ふ也。」と、結んだのである。

(文獻。西域開見録、西域水道記、清代通史(蕭一山)、香妃演義、清朝全史演義、新疆遊記(謝彬)、熱河(スエン・ヘチン)、清朝全史(稻葉君山)、最新支那史講話(同)、北平村上知行)、中亞探險(橋瑞超)、回教民族の活動と亞細亞の將來(渡邊己之次郎)、支那邊疆と英露の角逐(入江啓四郎)、回教(雜誌——川村狂堂主編)。第四節及び第五節冒頭、特にヘチンに負ふ。)

(『世界知識』一九三六・三—四)



(福山製本)

昭和十二年八月十六日印刷
昭和十二年八月二十日發行

現代支那の政治と人物

定價貳圓五拾錢

著者 波多野乾一

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 福山福太郎

東京市牛込區西五軒町卅四番地

東京市芝區新橋七丁目十二番地

發兌 改造社

振替口座東京八四〇二番

電話芝(45)自一一二四番

(福山製本)

同じ著者に依りて

『支那の政黨』(一九一九、東京・東亞實業社)。『現代支那—解説と舉唱』(一九二一、東京・支那問題社)。『支那劇五百番』(一九二二、北京・支那問題社。一九二七改訂版發行)。『支那政黨系統表』(一九二三、北京・燕廬社)。『支那關稅會議』(一九二五、北京・燕廬社)。『支那劇と其名優』(一九二五、東京・新作社。姚伯麟氏漢譯『京劇二百年歷史』一九二六、上海・大報社)。『麻雀』(一九二八、北平・東亞公司)。『黨治下の支那政情』(一九三〇、東京・萬里閣『大支那大系』第三卷)。『支那の民間文學』(一九三〇、東京・萬里閣『大支那大系』第十二卷。楊蔭深原著)。『現代の支那劇』(一九三〇、東京・萬里閣『大支那大系』第十二卷)。『支那展望—一九二九年支那年史』(一九三〇、東京・東亞研究會)。『麻雀精通』(一九三一、東京・春陽堂)。『中國共產黨概觀』(一九三二、東京・東亞研究會)。『支那の排日運動』(同上)。『滿洲事變外交史』(一九三二、東京・金港堂)。『上海事件外交史』(同上)。『日支外交六十年史』(第一—四卷。王芸生原著。一九三二—五、東京・建設社)。著者は一八九〇年豊後の儒戸に生れ、東亞同文書院畢業後大朝、大毎、東日、時事に支那專攻の記者として在支十數年、一九三二年來閉戸支那研究に没頭。選述略々上記の如く、尙、現代支那政治の一部門に關する研究の公刊せざるもの六卷三千餘頁あり。

CL	M40-1
NO.	46



